TOHOKU
UNIVERSITY

東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室 “S-チル”

シンポジウム報告書

東日本大震災後の子どもたちへの支援

～高校生・大学生が見つめる被災地の現在（いま）～

震災子ども支援室は、ある個人の年1200万円10年間の寄附を原資とし、
その他多くの方々の寄附をいただいて活動しています。

平成29年12月

東北大学大学院教育学研究科
震災子ども支援室 “S-チル”

震災子ども支援室“Ｓ－チル”
シンポジウム報告書

“東日本大震災後の子ども支援”

～高校生・大学生が見つめる被災地の現在（いま）～

平成 29 年 12 月

東北大学大学院教育学研究科
震災子ども支援室“Ｓ－チル”

目　　次

1. 開会の辞 …… 1
東北大学大学院教育学研究科　研究科長　工藤与志文
ご挨拶 …… 2
東北大学高度教養教育・学生支援機構　機構長　花輪　公雄
東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室　室長　加藤　道代

2. 高校生ポスターセッション　参加高校：6 校　11 グループ …… 5
- 宮城県気仙沼高等学校
  - ・「市民の防災に対する関心を高める方法」　菅原　碧
    ポスターへのコメント
  - ・気仙沼市の防災の課題
    「率先避難と徒歩避難の問題！」解決に近づくための防災ビル　佐藤　杏香
    ポスターへのコメント
- 仙台白百合学園高等学校
  - ・震災による被災者の支援（精神面・身体面）～私たちにできること～
    大槻瑞香、羽鳥連、伊藤花、手塚仁菜、半澤静子、門間唯菜
    ポスターへのコメント
- 岩手県立大船渡高等学校
  - ・震災の記憶　新田　佑
    ポスターへのコメント
- 岩手県立一関第一高等学校・附属中学校
  - ・震災から学ぶ活動（避難行動調査と中学生への災害へ備える授業の実施）
    菊地　優、鈴木　里桜
    ポスターへのコメント
  - ・沿岸被災地と内陸をつなぐ活動（沿岸内陸コラボレシピの開発と普及）
    亀岡　紗衣、小笠原美音
    ポスターへのコメント
    沿岸被災地における健康支援活動（生活不活発病予防のための農園活動）
    高橋　美有、小澤　美咲
    ポスターへのコメント
- 宮城県石巻西高等学校
  - ・本校の国際交流について　小山　愛、甲谷　直子
    ポスターへのコメント
  - ・本校の防災交流について　高橋こころ、阿部　輝、石井　文乃
    ポスターへのコメント

- 福島県立磐城桜が丘高等学校
  ・絆と結束の町　城山　～ハザードマップ作りをとおして～
  河野　息吹、曳地　優莉、本間あゆみ
  ポスターへのコメント
  ・絆と結束の町　城山　～防災カードで変える未来～
  太田　　樹、三瓶　海斗
  ポスターへのコメント

3. 課外・ボランティア活動支援センターと学生ボランティア団体の紹介 ……51
東北大学高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター特任准教授　藤室　玲治

4. 大学生プレゼンテーション　参加団体：6 団体 ……59
- 地域復興プロジェクト“ＨＡＲＵ”
  子ども支援の変遷～震災直後から現在までのＨＡＲＵの取り組み～
  関　　奏子、小林　奎太
- ＮＰＯ法人キッズドア
  東日本大震災からみる子どもの貧困～学習支援というアプローチ～
  宇野あかり、錦織　広樹
- 陸前高田応援サークルぽかぽか
  子ども×大学生 in 陸前高田
  鈴木　優里、大西　花林
- インクストーンズ
  教育学部生からみた被災地の子どもたち
  沼津　大嗣、桐原　朋哉
- 福興 youth
  いわきで出会った子どもたち～学生ボランティアにできることは何か？～
  中澤　　恵、大庭　佳乃
- 基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼた
  私たちが学んだ被災地の子どもを取り囲む環境
  千葉　柚紀、飯田　　司、根來　怜菜

5. ディスカッション …… 113

6. 登壇者アンケート …… 127

7. シンポジウム参加者アンケート結果 …… 133

8. シンポジウムを終えて…… 142

※高校生・大学生の学年は、2017 年 12 月 9 日シンポジウム当時のものです。

開会の辞

東北大学大学院教育学研究科では、平成23年9月より震災子ども支援室（略称S－チル）を設置しまして、被災された子どもたちの心のケア、保護者の方々に対する支援活動を続けてまいりました。これまでたくさんの方々からのご支援・ご協力をいただきまして、今日まで活動を続けることができたと考えております。この場を借りてあらためて御礼申し上げます。S－チルはいろいろな活動を展開しておりますが、その活動の重要なものの一つとして、定期的に研修会、講演会、シンポジウムなどを企画し、震災支援関係者に対する情報提供、それから情報交換の場を設けてまいりました。

本日のシンポジウムは9回目を迎えます。今回はこれまでと少し方向性を変えまして、岩手県・宮城県・福島県在住の高校生の皆さん、それから東北大学生の皆さんがこれまで取り組んでこられた震災ボランティアや防災活動に焦点を当てました。震災から7年近くが経過しておりますが、被災地支援はこれからも継続していかねばならない事業です。そのためには、将来を担う支援者の育成も欠かせない課題であると考えております。今回のシンポジウムを通じて、支援活動を積極的に行っている若い皆さんと交流を深めることで、今後の震災支援の在り方のみならず、次世代への継承・発展について、共に考える機会になればと願っております。

平成29年12月9日

東北大学大学院教育学研究科　研究科長
工藤与志文

ご挨拶

皆さんおはようございます。本日のシンポジウムを共催するということで、一言ご挨拶申し上げます。

はじめに、午前中ポスターセッションをしてくださる高校生の皆さん、関係者の皆さん、本日はこの会に参加してくださり、誠にありがとうございます。岩手県からは大船渡高校、一関第一高校と附属中学校の皆さん、福島県からは福島磐城桜が丘高校の皆さん、そして宮城県からは気仙沼高校、石巻西高校と仙台白百合学園高校の皆さん、ようこそおいでくださいました。皆さん方の東日本大震災に対する探究、あるいはボランティア活動等で学んだこと・体験したことを、ポスターセッションでお伺いできることを楽しみにしております。

さて、私が所属する東北大学の高度教養教育・学生支援機構について、少しお話しいたします。2011 年 3 月 11 日、非常に大きな地震が起こりまして、その後津波により甚大な被害が出ました。東日本大震災と名付けられました。この後、東北大学の学生・教員・職員、多くの人が被災地に駆けつけまして、ボランティア活動を行いました。この活動を大学としても支援しようということで、2011 年の 6 月に東日本大震災学生ボランティア支援室を設置いたしまして、学生のボランティア活動の支援を行ってまいりました。その後 2014 年の 4 月に、特に本学の初年次・2 年次の学生に対して教育を行う組織として高度教養教育・学生支援機構をつくったのですが、サークル活動等の課外活動やボランティア活動も学生の教育において非常に大事な役割を担っているということで、そこを継続的に支援するセンターとして課外・ボランティア活動支援センターを設けました。その際にやはり専任の先生が必要だということで、2014 年以降専任の先生 2 名を配置いたしました。藤室玲治先生、江口怜先生、この二人の先生方が本学の課外・ボランティア活動を支えている先生方です。また、当初は東日本大震災のボランティア活動支援だけでしたが、例えば 2014 年 7 月には山形県の南陽市で水害があり、昨年の 4 月には熊本地震が起こりました。現在はそうした場所への支援も含めまして、東日本大震災に限らずいろんな場所で支援活動に従事しております。特に熊本地震の後は、本学から何回も学生や先生方が向こうに行って活動し、また、一緒に活動した熊本大学の学生が本学に来て報告をしてくれました。

今日は、本学の 6 つのボランティア団体から発表があります。本学の学生と大いに交流する中で理解を深め、高校生の皆さんの今後の活動に生かしていただきたいと思います。今回のこのシンポジウムが有意義なものとなりますことを祈りまして、私の挨拶といたします。本日は本当にありがとうございました。

平成 29 年 12 月 9 日

東北大学高度教養教育・学生支援機構　機構長
花輪　公雄

ご挨拶

皆さま、おはようございます。東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室S－チルの室長を務めております、加藤と申します。本日は、年末の大変お忙しい中、シンポジウムにご参加いただきましてありがとうございました。

震災子ども支援室S-チルは、2011年3月11日の東日本大震災で親を亡くした子どもたちへの支援を願う、篤志ある個人の十年間の寄附を原資として活動を始めました。以来震災子ども支援室は、震災で大事な人やものを失くした子どもと共に、その子どもを育てる周囲の大人たちにも向けた支援を実施してまいりました。電話相談、遺児家庭サロン、里親サロン、学習支援、研修会やシンポジウム、様々な活動を通じて多くの方たちとお会いしてまいりました。活動の詳細につきましては、受付のところで年次報告書をお渡ししておりますので、そちらをお読みいただければと思います。

さて、本日のシンポジウムですが、「高校生･大学生が見つめる被災地の今」と題しまして、高校生と大学生が震災支援や震災に関する調査活動を行った体験から、気づいたこと、感じたことを伝えていただくということになっております。

少し思い出話になるのですが、震災からまもなく1年が経とうという2012年の2月、私は岩手・宮城・福島の学校の先生たちの研修にご一緒することがございました。その時、震災で丸ごと町を失った沿岸被災地の先生方がおっしゃっていた言葉の数々は、今も強く心に残っています。例えば、「子どもたちは母校の校舎で学ぶことができない、もう母校から卒業させてあげられない」とおっしゃった先生、「ふるさと教育、伝統教育、今まで築き上げてきた学校の文化が消滅してしまった」とおっしゃった先生、あるいは、「何もない町の中で子どもたちにどうやって将来の夢や目標を持たせてあげたらよいのか」とおっしゃった先生。当時はふるさとが風景も暮らしも、積み重ねてきた歴史や文化も失い、先の見えない無力感の中にありました。子どもたちの「これまで」というものと、「これから」という部分が途切れてしまったという、そういう思いの中で、先生方は生徒たちの未来を本当に心の底から案じていらっしゃった、そんな言葉だったと思い出します。

でも、それから7年が経って、当時小学生だった子どもたちは高校生、中学生だった子どもたちは大学生になりました。今日の主役である高校生と大学生は､そんな世代の方々です。

高校生は岩手・宮城・福島の6校から集まってくださいました。遠くからこの場に出席するために、おそらく夜明け前のまだ暗くて寒い中、床から出て、遠路本当に長い時間をかけ

てこちらに来てくださったと思います。本当に遠くからありがとう。引率の先生方も、大変お忙しい中、本当にありがとうございました。高校生には、この後、ポスター発表を行っていただきます。

大学生は、必ずしも被災地出身の方ばかりではありません。でも、仙台のこの大学で学ぶ中、被災地に気持ちを向けて、自分にできることを考え、実際に行動している人たちです。午後にこの場所で発表していただきます。

震災子ども支援室は6年間の活動を通して、たくさんの方々と出会い、たくさんの事を教えていただきました。今日は、若い世代の方々が、この震災をどのように捉え、何を考えて、どのように活動しているのかをお聞きすることで、また新たな気づきが生まれるのではないかと楽しみにしています。これまで、それぞれの活動の中で蓄積されてきた支援の力が、次の支援へと繋がり、支援してもらったものが今度は逆に支えるものとなって受け継いでいく、そんなバトンリレーを繋げていくことを、被災地が得たかけがえのない大事な財産としていきたいと思います。高校生も大学生も、それぞれの活動を伝え合ったり学び合ったりする機会としてください。また、昔、高校生や大学生だった我々も、他者を思い自分を活かそうとする頼もしい彼らの若い力を感じながら、またひとつ、自分にできることを探してまいりたいと思います。本日はどうぞよろしくお願い致します。

平成29年12月9日

震災子ども支援室“S－チル”室長
加藤　道代

高校生ポスターセッション

宮城県気仙沼高等学校
仙台白百合学園高等学校
岩手県立大船渡高等学校
岩手県立一関第一高等学校・附属中学校
宮城県石巻西高等学校
福島県立磐城桜が丘高等学校

市民の防災に対する関心を高める方法

宮城県気仙沼高等学校
菅原　　碧

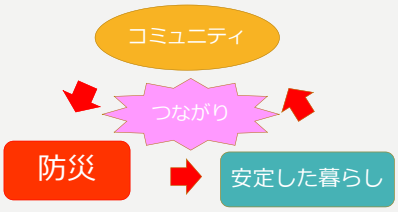
市民の防災に対する関心を高める方法

宮城県気仙沼高等学校２年　菅原　碧

①研究の背景

昨年の地域社会研究テーマ
「気仙沼のコミュニティのために高校生ができることは何か」

昨年の研究を通して、地域の中のコミュニティ、防災に対しての取り組み、安心で安定した暮らしはつながっているということを学んだ。
→その中で防災に興味を持った



My idea 「防災とはいつ来るかわからないものに備えるだけではない」

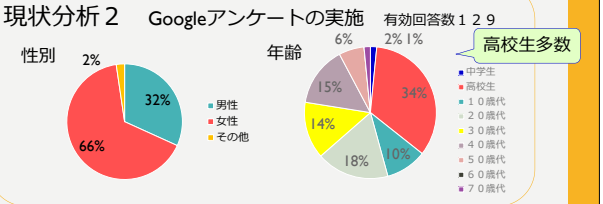
②研究活動

現状分析１
気仙沼市総合計画作成ワークショップに参加

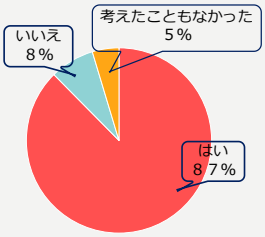
気仙沼市の政策に市民の意見を取り入れるためのワークショップ

問題点
・関心が地震と津波に偏っている。
・多くの人が自分たちの地域についてよく知らない。

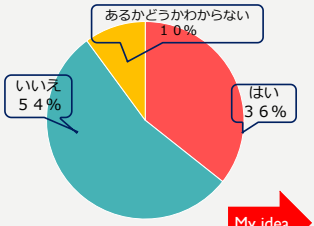
現状分析２　Googleアンケートの実施



Q1 防災に関心がありますか



Q2 非常用持ち出し袋が家にありますか



Googleアンケート結果
回答いただいた人の中で宮城、岩手、福島に住んでいる人が多かったため、関心があると答えた人が多くなったと考えられる。(問題点１参照)
→関心がある＝行動を起こしているではない

関心を具体的な行動に移すためにはどうすればいいのか…

My idea 行動を起こすきっかけ作りが必要

研究テーマに対する仮説

防災、減災に関するワークショップを行う

→議題　非常用持ち出し袋について

参加者
- 高校生が主催
- 多くの世代

条件
- ワークショップ形式
- 参加しやすい雰囲気

③考察

・防災はいつ来るかわからないものに備えるだけのものではない。
・関心を持っている人は多かったが、具体的に行動している人は少ない。
・日常の中に防災について考える機会が少ない

④今後の活動

・ワークショップ開催に向けてのアンケート実施
・防災、減災に対しての知識を深める
・計画の推敲
・ワークショップの開催（１月ごろを目標に計画中）
・第２回以降の開催の検討

⑤参考文献・ご協力いただいた方々

東北大学災害科学国際研究所　佐藤翔輔准教授　　東北工業大学ライフデザイン学部　中島敏教授
東京工業大学リベラルアーツ研究教育院　鈴木悠太准教授　　東京都総務局総合防災部防災管理課著「書籍版東京防災」
NPO法人森は海の恋人　NPO法人底上げ　成宮崇史様　その他気仙沼高校の各先生方

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成しました。

ポスターへのコメント

●フリップを用いるなど、説明の仕方に工夫がこらされていて、大変分かりやすかったです。

●大島の避難所で感じたことが、HUG[1]につながっているということが分かりました。本当に必要なことを探して次の活動に向かうのがすごい。

●震災時の大島の避難所の様子を教えてくれてありがとうございました。あまり知られていないことではないかと思います。

●グーグルアンケートなどの結果をもとにされていて、数字にもとづいた現実的なテーマが素晴らしいと感じました。ワークショップ開催頑張ってください。応援しています。

●意識改善というとても難しいテーマだったと思います。シンプルで見やすいポスターで好印象でした。お疲れさま。

● HUG 大変良いと思います。公民館や自治会役員と相談しぜひ実現させてください。

●様々な視点から考えられていてすごい。グラフやスケッチブックなど分かりやすかった。自分の経験のもと関心を高める方法が考えられていて良いと思った。

●日常の中に防災がかもしだされているものがあるといい。防災という単語を使うと関心ある人しかこない。ターゲットを分けて実施した方が来て欲しい人が来る。学校教育とつなげようとしているのは効果があると思う。

●実際にグーグルアンケートをとったり、ワークショップの準備を進めていたり、防災に関して頑張っている様子が伝わってきました。HUG いいですね。とても素晴らしい発表でした。有難うございました。

●防災の関心についての問題に着目していて良いと思った。関心を持つだけで行動に移さないのはたしかに多くあるので、これからの課題だと思う。多くの人を集める方法は、年代によって工夫が必要だと思う。

●ポスター、レイアウト、きれいですね。

●スケッチブックを用いた発表とても分かりやすかったです。アンケートで防災の関心を聞く際「非常用持ち出し袋」に関する質問をいれた発想がとても良いと思いました。

1　避難所 HUG は、避難所運営を皆で考えるためのひとつのアプローチとして静岡県が開発したものです。避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームです。プレイヤーは、このゲームを通して災害時要援護者への配慮をしながら部屋割りを考え、また炊き出し場や仮設トイレの配置などの生活空間の確保、視察や取材対応といった出来事に対して、思いのままに意見を出しあったり、話し合ったりしながらゲーム感覚で避難所の運営を学ぶことができます。HUG は、H（hinanzyo 避難所）、U（unei 運営）、G（game ゲーム）の頭文字を取ったもので、英語で「抱きしめる」という意味です。避難者を優しく受け入れる避難所のイメージと重ね合わせて名付けました。（静岡県ホームページより引用：http://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/manabu/hinanjyo-hug/about.html）

●私も防災が非常時の備えだけでなく、日常時から当たり前の世の中にするため大学で勉強しています。お互い頑張りましょう。

●防災に関心がない人はほとんどいないけど、その人たちを動かすのは本当に難しい。

●「防災に関心がなくても家に防災袋がある」というのが、本当に防災が浸透している状況だなと思った。

●今後も継続するのが一番力になれると思うので頑張って欲しい。

● HUG について、大学の授業でやったことがあります。長所は全体を俯瞰して、感情を交えて運営について考えること。短所は、問題について「知った気」にはなるが、主体的に学べるわけではないということです。

●高校生でワークショップを実施しようという行動力がすごい。

● Google アンケートはどのように呼びかけて、どの範囲の人に回答してもらったのですか？スマホから回答すると世代が偏ってしまうかもしれません。

●私は東京出身で震災の被害を直接受けていないので、周りの人たちも防災に対する意識が低いのだと思っていました。だから非常用バックを持っている人も周りに少なかったです。でも、被害を受けた気仙沼の方々も非常用バックを持っている人の少なさに驚きました。

●関心を持っているが具体的に行動できていない人々を活動、行動させるにはどうしたらいいのか考えさせられました。

●防災について、関心があるから行動に移すというステップも難しいけれど、関心がないからあるにするのも難しい。私が大学でボランティア活動を行ってきて感じたことです。

●大学生以上の研究と発表、素晴らしかったです。ぜひ今後とも頑張ってください。ワークショップの際にはファシリテーターの能力がとても大事です。若い人（高校生）をせっかく生かすのであれば、どちらについても講義などされると素晴らしいものになると思います。

●ダブルアンケートで実態を確認し、ワークショップで直接的アプローチをするという手法、とても良いと思いました。

●陸前高田市や石巻市で住民の方と防災やまちづくりのワークショップを大学生としたことがあります。

●若い人がいると、住民の人も意見が言いやすくなるようですし、特に女性の方など高校生が入ってワークショップもすごく良いと思います。是非実現してみてください。

●アンケートをもっと広い対象にすると違ったことが見えてくるかも。

●アンケートを取った際の分析では回答者の立場毎の傾向も見てみると新しい結果が出ることもありますので、是非試してみて下さい。

● HUG の案が良いと思った。アンケートをとったりして分かりやすかった。現実的なことが多くすぐできる。

●関心がある＝行動を起こしているではないと気づくことができたので、今後の日本の課題だと思いました。

●防災に関心はあるが、なかなか行動に起こせない人が多いこと。そのきっかけづくりとしての考察がしっかりなされていて、よくまとまっている内容だと思いました。

●地域防災に対して、色々な視点から考えられている。細かく分析されていて、よくまとめられている。Google アンケートの結果から課題を明確にしている。自分の災害時の記憶、経験から HUG の活動に結びつけられている。調査、分析が的確でとてもわかりやすく、ためになる発表でした。

●アンケートにおいて、Google アンケートという点はとても良かったが、ネットの情報、意見というのは革新的なものではないので、アンケートの１つとして利用するような感じにしたほうがいいと思う。

● Google アンケートなどを活用して、防災についての広い意見を聞くことができていて、すごいと思いました。スケッチブックなどをつかって、まとめていたのはすごく分かりやすかった。実際にワークショップなどを行っているのは、自分も行ってみたいと思った。

●防災に関してかた苦しいイメージをとりはらってかみ砕いてわかりやすかったです。調査を沢山していて内容がとても充実していました。

●アンケートにグーグルアンケートを利用しているのは、良い案だったと思う。具体的な提案なども考えられてよかった。

●図などを用いてわかりやすかった。ワークショップで若い人に多く参加してもらうために呼びかけをしてみてはどうか。

●高校生という若い世代自らが市民の防災に対する関心を高める取り組みにを行うということは、同世代の若者の心にひびくものになるだろうと思いました。アンケート調査なども行い現状をふまえた上で課題を捉えているのがすごいですね。

●市民の防災に対する関心を高める方法。３つのつながり、防災、グーグルアンケート、SNS の利用があり、なるほどと感じました。

気仙沼市の防災の課題
「率先避難と徒歩避難の問題！」
解決に近づくための防災ビル

宮城県気仙沼高等学校

佐藤　杏香

気仙沼市の防災の課題

「率先避難と徒歩避難の問題！」

解決に近づくための防災ビル

佐藤杏香（気仙沼高等学校　2年）

今回私は、東日本大震災を経験し、震災当時の気仙沼市民の行動を振り返って今後の課題として残ったものはなにか、気仙沼市役所総務部危機管理課の小山隆晴さんにインタビューをし、その課題の解決のためにはどのような取り組みが必要なのか研究しようと思った。

インタビュー

Q：震災当時、今までの訓練では生かされず、今後の課題になったことはありますか？

A：あります。率先避難と徒歩避難です。

率先避難

身近に危険が迫った時、その危険を察知し、自ら進んで危機を回避するという行動。一人が行動することでまわりの人々にも避難行動を起こさせるという特徴がある。

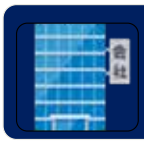
徒歩避難

災害時、交通渋滞や道路の形状の変化により車で思うように移動できないことが考えられる為、徒歩で避難所や高台に避難するということ。

しかし！避難を妨げる要因がある

高齢化

寝たきりや認知症の高齢者は自力で避難するのが難しい。



避難を言い出しにくい環境

店を営業しているならば自分よりも先に客を避難させなくてはいけないし、また、会社でも上司の判断が優先されることが考えられる

車依存社会

公共交通機関が少なくほとんどの移動手段が自動車である

避難所までの距離が遠い

沿岸に住宅や市街地がある為、安全な高台へは徒歩では時間がかかる。

これらの要因より、率先避難、徒歩避難はすべての場合において達成できるものではない！

機能的で地域に密着した防災ビルが地区ごとにあれば率先避難、徒歩避難の問題を解消に近づけるのではないか

具体的な防災ビルの内容

①耐震性、耐波性に優れ、災害時はだれでも長期的な滞在が可能

現在の気仙沼市の避難所、場所、ビルは113か所あるが大体が学校や市内の大きな建物であり避難専用ではない。
理想の防災ビルは「一時的避難所」、また長期滞在ができる「避難所」の、両方の機能を備えている

②避難専用だけでなく、様々な役割を持つ施設としても機能し地域住民にとって身近

病院、保育園などの施設や外国人向けのインフォメーションセンター、店などが防災ビルの中または近隣にあり、災害時、協力し合える関係にある。地域のコミュニティーの場としての機能もあり、常に責任者がいる

③普段から様々な防災イベントを定期的に行うことで住民の防災意識を高める

地区ごとに住民がビルに集まり、防災講座や避難訓練を行う。市の総合防災訓練の時には各ビルで連携して情報伝達訓練を行う。さらに各ビルで情報発信をホームページやSNSやメールマガジンなどで行い、施設と個人の関係が密接である。

④状況にあったスペースづくりを工夫する

小さい子供連れやお年寄り、ペットを連れてきた人たちなどいろいろなタイプの避難者にとって快適に過ごせるスペースの配分が工夫されており、避難する側も訓練によりそれを把握している

学んだこと・課題

市役所の方にインタビューし、防災における気仙沼市の現状や東日本大震災を経験し課題になったことなどを直接お伺いすることができた。それにより、今後さらに起こるかもしれない災害に備えてどんなことをしなくてはいけないのか自分なりに考え、意見として地域に密着した防災ビルの設置を提案した。しかし、実行するには資金面や、人材の面で難しいという課題が残った。今後は気仙沼市だけではなく、様々な地域の避難所、避難ビルなどの例も参考にして、さらにコストや人材なども意識しながらより具体的な研究を進めていきたい。

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成しました。

ポスターへのコメント

●インタビューをもとにして、震災後課題として残った点を考えるという着眼点が良いと思いました。

●一人では避難が難しい人として、寝たきりや足腰のわるいお年寄りの他にも、小さな子どもや視覚・聴覚・身体障害の方々などが挙げられるのかなと思いました。助け合って避難できるよう仕組みが必要なのではないでしょうか。

●避難を妨げる要因の具体的な状況を上げながら説明されていて、イメージがしやすかったです。当時の状況を語れる人は多くないので、今後も伝える活動を続けていきたいです。

●「率先して、徒歩で」わかっていてもしないのであれば意味はない。「できる」にするための具体的な提案が良い。特に「住民に存在（防災ビル）についての理解を求めていく」に賛成、共感した。

●普段から身近な“防災ビル”なら行きやすいですね。どんなときでも frendly な防災ビルはいいアイディア。お店や会社で避難を言い出しにくかった理由をインタビューなどで実際に質問すれば今後の対策になるのではないか？防災ビル、避難スペースは高いけどお年寄りをどのようにしてそこに移動させるのか。

●寝たきりや認知症の高齢者も防災ビルにある病院にかかっていれば少しでも避難しやすくなるので、非常に機能的なビルだと感じました。

●要因を詳しく調べていて、解決法を見つけ出す手立てになっていて良いと思いました。地区のどこに防災ビルを設置すれば、最適であるのか、調べてみても良いと思いました。防災ビルはどれほどの強度であればよいのか考えても良いと思いました。

●当時のことを振り返っていて、具体的で聞きやすかったです。現状をしっかり考えなければいけないと再確認できました。具体的な提案をしていて同じ高校生として自分自身の視野も広がりました。

●今後、解決に向けて自分が、そして高校生、若者が何ができるかという視点で話があるとより良かったと思いました。全体的に筋道立てて話がされていて分かりやすかったです。

●避難する際の問題についてきちんとまとめられていたと思う。避難ビルの建設だけでは自力避難できない人の問題は解決されないのでは？

●カーシェア広がるといいなと思います。このようにいろんな“シェア”のシステムについても考えてみて下さい。

●具体的な情報発信が現代にあっていてよかった。自力で避難できないのは、子どもや障害をもった人も含まれるのでは？

●避難行動の傾向を“実感”できる地域の住民の意見が反映した防災ビルができるといいで

すね。きっと他の地域の参考になると思います。

●“防災ビル”というアイデアとても良いと思います。

●「防災ビル」について初めて知った。いつ起こるかわからないからこそ、学校などで間に合わせて後回しにしてしまうのだろう。わかりやすい説明でした。

●被災地の１つである気仙沼出身の方のお話が聞けてよかったです。避難ビルというアイディアは良いと思います。（具体的な研究を具体的に教えて欲しいです）

●地区ごとの防災ビル、是非実現してほしいですね。発信し続けてください。

●気仙沼の土地、地域の暮らしは気仙沼に住む人が一番良く知っているということを強く感じました。「私は気仙沼市民として」という言葉が心に残りました。

●視覚的にもとてもわかりやすかったです。まとめ方がシンプルでわかりやすいです。

●気仙沼の地域の特性による問題とその解決案が提示されており、興味深いプレゼンテーションだった。

●気仙沼の学生さんの生の声は何よりも大事だと思います。将来に伝えていってほしいです。

●防災ビルの建設とともに、避難を言い出しにくい環境の解決を進めていくにはどのようにしたらよいでしょうか。

●防災ビルの提案は斬新だと思った。実際、Ｙ町（宮城県）には地上より高く駅が再建され、防災センターのような避難できる場所があったと思う。

●高齢者をどう避難させるか。重要な問題提起。自ら問題を提起し自分なりの解決策を出せている。コミュニティ作り⇒防災ビルで行う。高齢者と関わり、災害(避難）の時、その関わりが役立つ。

●避難の問題や取り残され問題はメディアでもよく取り上げられ、災害が起こった際はとても大切なことなので、着眼点がとても意義のあることだと思います。研究としては、どこまでがインタビューの結果として分かったことなのか、どこまでが報告者の意見なのか分けて書くとすっきりするかなと思います。お疲れ様でした。

●資金・人材⇒企業だけでなく、自治体も協力すべきか。

●具体的な対策を詳しく知ることができました。

●率先避難、徒歩避難が重要とは良く聞いていたが、それが果たせないという見方を聞いたことがなく、良いと思った。既存の施設を防災ビルにするという方法もみてみると良いと思う。

●インタビューにより、課題をしっかり表し、避難に対しての妨げる要因を含めた上で具体的な解決になっている。しかも、この解決法で実際に行動に移すことが難しいと理解したうえで、これからのことを考えているし、全体的にまとまっていてとても良いと思いました。

●課題の発見からその解決策、更にそこから発見された課題にも触れていて、長期的に震災からの学びを生かそうとされていて、とても素晴らしい発表だと感じました。市役所の方々へのインタビューなどは、ぜひ参考にさせて頂きたいです。

●高台のない地域にとって、避難できる安心できる場所があるというのは良いアイディアだなと思いました。お年寄りや小さな子どもにも配慮できるアイディアもあるといいですね。

●避難を妨げる要因が分かりやすく、分類されていて、とても良かったと思います。ポスターもとてもレベルが高くて勉強になりました。

●今あるビルを防災ビルに使う方法はないでしょうか？

●発表とてもわかりやすかったです。ありがとうございました。問題の解決法として防災ビルを考えついたのは素晴らしい考えだと思いました。別の解決法を考える視点として気仙沼に住んでいる人（問題の１つに上げられていた高齢者など）にどんな避難所が理想か聞いてみると良いと思いました。そうするとアイディアが広がるかも。

●先日被災地に行った時、災害公営住宅の方から「公営住宅の避難訓練の計画をたてていたが、８階建のため、エレベーターが動かない時はどうやってすべてのお年寄りを避難させられるか頭を抱えてしまった」というお話を聞きました。新たな防災の課題と思えます。若い方たちのアイディアを市に提案して欲しいと思いました。

震災による被災者の支援（精神面・身体面）

～私たちにできること～

仙台白百合学園高等学校

大槻　瑞香

羽鳥　　連

伊藤　　花

手塚　仁菜

半澤　静子

門間　唯菜

震災による被災者の支援（精神面・身体面）

～私たちにできること～

仙台白百合学園高等学校　大槻　瑞香(1年)・羽鳥　連(1年)・伊藤　花(1年)・手塚　仁菜(1年)・半澤　静子(1年)・門間　唯菜(1年)

1. 活動の背景

私たちの高校はSGH指定校であり，その一環で探求活動を始めた。
東日本大震災を経験した当時，私たちは小学生で，地域や人々のために何もできなかった。
その悔しさや救いたかったという気持ちがずっと心にあり，今後震災が起きたときには自分たち学生にもできることを探し，実行して，発信していきたいと思ったから。

2. 活動内容

○　災害時の被災者支援について，研究レポートを作成（2017年8月）
○　石巻市雄勝地区(周辺)訪問（2017年10月29日 日曜日）
・旧石巻市立大川小学校跡 見学。
・石巻市復興まちづくり情報交流館雄勝館を訪問，お話を伺う。
・雄勝地区の食堂を訪問，お話を伺う。

旧大川小学校の様子(2017年10月29日撮影)

3. 活動の成果

・・・ 雄勝地区訪問から ・・・

☆ ボランティア活動をされているSさんのお話 ☆

① 末端に住む人たちにあまり目が向けられていないから，支援が行き届いていない。必要なことはたくさんあるのに，国が何もしてくれない。

② Sさん自身も被災し，2週間後に雄勝に帰ってきたので，地元の人に「雄勝出身の人なら，歩いてでも帰ってくる。」と言われ，悔しい思いをした。
そこで自分に何か出来ることはないかと考え，横浜の友人たちに支援物資を貰い，それを一週間に一度，半年間，車で運搬する活動を行った。
物資を貰ったお礼に，地域の人たちとキーホルダーなどを作り，横浜の友人たちに送った。

③ 雄勝地区はもともと石巻市中心部行きのバスが週に三日間しかなく，この問題は今後の課題となっている。
また，震災後は人口が震災前の1/4にまで減少し，今は約1000人しかいない。

④ 震災時には特にゴミ袋が役に立つ。水を運んだり，長靴代わりにしたりと使い方は様々ある。

⑤ 震災を知らない世代に伝えたいことはあるか？
→ 災害はいつ起きるか分からないものだから，自分の住んでいる地域のことを把握しておくことが大切。
また震災を経験した人の一人として経験していない子供たちに伝えていくことも大事。

食堂で雄勝地区の海産物をいただく(2017年10月29日撮影)

☆ NPO活動をされているHさんのお話 ☆

① 震災直後の被害
・震災当時，Hさんは怪我を負った高齢の男性を発見し，背負って避難させた。
→ 力の抜けた人はとても重く，抱えて立ち上がるのすら困難であった。
・津波による溺死以外の死因として，凍死の方が見られた。
→ 津波から逃れるため漂流物であった船に乗ることができたが，そのまま沖に流され，発見が間に合わず，海の上で亡くなるなど。

② 避難所で起きた事例
・震災前は自炊できていた高齢の女性が避難所で出された食事だけを食べていたら，仮設住宅に入った時に自炊できなくなってしまった。
→ 支援していたことがその方の生活能力を低下させてしまった。
↓
支援をする側とされる側の関係性を理解して支援しなければいけない。

③ どうなることが「心の復興」？
・ 時間やお金で解決できる問題ではない。
・ 要因は人それぞれであれ，「ここに住んでいてよかった」と思うこと。
・ あたりまえのことができるようになること。

Hさんに教えたいただいた雄勝地区の津波の様子(2017年10月29日撮影)

4. 活動を通して学んだこと

・テレビなどではあまり報道されないような，震災直後のできごと。
・支援するときは，さしのべ方やタイミングを間違えるとマイナスになること。
・石巻市近郊は復興が進んでいるところも多いが，郊外ではまだ進んでいない部分が多く見受けられること。
・心の部分の問題は，時間，お金では解決しないということ。
・完全な「防災」は不可能であること。いかに「減災」につなげるかが大切。

☆ 日ごろから，地域の方々と協力し，輪をつくっておくことが大事 ☆

本ポスターは，東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

ポスターへのコメント

●高校生はすることも多く忙しいと思うが、まず当事者の方々にお話を伺えたということで、このご縁を大切に定期的に活動できると良いと思いました。頑張ってください。

●支援が被支援者の生活能力を低下させてしまった例というのうは、初めて聞いてとても勉強になりました。本当の「支援」とは何かということは考えると難しいですが、自分も考えていきたいと思いました。

●支援が必ずしも支援される側にとってプラスだとは限らないことに気づけたことは、とても大事なことだと思うので、このことを忘れずに頑張ってください。心の問題は時間やお金では解決しないのでは。学生としてできることは何なのか、むしろ、時間やお金がかからない学生だからこそ考えられるアイディアや支援の形があるのではないでしょうか。

●支援がマイナスになることがある、というのは私も考えていたことだったので、実際に現地の方の声をこの場で発表してもらって再認識することができました。心の復興について、話を聞き、広めていくことも大切だと思うのですが、実際に心の復興に対する活動をしている団体とも交流したりして、深めていったらいいのかなと思いました。

●相手がしてほしいことを探して頑張ってほしいです。

●なぜ雄勝地区を選ばれたのか。

●支援がマイナスになってしまうこと、完全な「防災」は不可能であることを考え、学び取ることは素晴らしいと思う。

●現地へ行って、現実を知ろうということがまず一歩。次に自分たちに何が出来るかを考え、動くことが大切だと思います。期待しています。

●心の問題を解決していくことが重要であると改めて感じました。今回被災地でボランティア活動されている方から、聞いたお話を生かして今後実際にボランティア活動をしていけばよいと思います。

●町の復興が心の復興になるのではないことを初めて知りました。１つ１つを詳しく説明していて、分かりやすかったです。

●震災直後の大きな被害、亡くなった人の話、なかなか触れづらいことに触れていて、今後の学びにつなげてほしいです。

●高校生のうちから支援に関して色々なことを考えていて、すごいと思いました。

●「あたり前のことができるようになる」深いですね。

●自分たちで学んだことをこれからどうすべきかの支援や減災に役立てていってください（若い人たちの力は必要）

●「減災」につなげること、日ごろから協力することなど、大事なところがまとめられていて分かりやすかったです。今後についても明確でよかったです。

●お疲れさま。丁寧な発表とてもよかったです。質問にもきちんと答えられていてすごい。どういう支援を行うのか、具体的な案をだせるようになるともっと良いと思います。

●大事なことを色々学ばれていると思いました。これからも頑張って活動を続けてください。

●「支援するときは、さしのべ方やタイミングを間違えるとマイナスになる」と感じた時はどんなときでしたか？

●震災の時に何もできなかったくやしさから活動をしているという言葉が印象的でした。みなさんの今の活動は石巻の人たちの支えになっていると感じました。

●「支援するときは、さしのべ方やタイミングを間違えるとマイナスになること」なるほどと思いました。大切な視点だと思います。SGH[1]としてこれからの世界の問題について考えたり、発信できたら面白いと思います。留学生にとっての防災も学びたいとか。

●今（高校生）だから感じたこと、学んだことは、大人にないものなので大切にして欲しい。そして、これからも発信して欲しい。実際、私にはない発想や学びもあり、良かったです。有難うございました。

●「支援のしかた」という視点をもったことは大きな気づきだと思います。ポスターの「SGH」が何を意味するのか書いておくと分かりやすいと思います

1　スーパーグローバルハイスクールの高等学校等は、目指すべきグローバル人物像を設定し、国際化を進める国内外の大学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、グローバルな社会課題、ビジネス課題をテーマに横断的・総合的な学習、探究的な学習を行います。学習活動において、課題研究のテーマに関する国内外のフィールドワークを実施し、高校生自身の目で見聞を広げ、挑戦することが求められます。指定されている学校の目指すべき人物像や具体的な課題の設定、学習内容は、地域や学校の特性を生かしたものとなっております。（スーパーグローバルハイスクールＨＰより：http://www.sghc.jp/）

●「定期的訪問」はいろいろなところで重要性が指摘されています。継続は大変だと思いますが、頑張ってください。

●災害看護を目指す高校生はすごい。もっと質疑応答の時間があると良かった。

震災の記憶

岩手県立大船渡高等学校
新田　　佑

震災の記憶

新田佑・岩手県立大船渡高等学校１年

1. 活動の背景

6年前に東日本大震災にて被災し、これまで様々な方々に出会った。その出会いにより様々な活動に参加させて貰っている。その中でも自分の命の恩人とも呼べる方々や、自分の価値観を大きく変えた体験、活動などについて支援を受けた当事者の視点から報告することは今後の被災者支援や活動の在り方を検討する上で重要だと考えた。

2. 活動内容

あしなが育英会での活動

・小学校4年生から中学校3年生まで東京レインボーハウスで行われている全国小中学生のつどいで自分と同じく震災等で家族を失っている全国の小中学生や同じような体験をしている大学生の方々と心のケアプログラムやつどいによる活動。

・中学3年生のときフィリピンでローブキッズとの交流。（2）

・陸前高田市レインボーハウスのつどいに参加。

高校でのJRC同好会での活動

・募金活動、その他ボランティア活動。

・少年赤十字リーダーシップトレーニングセンター参加。

2

1

3. 活動の成果

日本には自分のような人たちが沢山いること、海外にはもっと沢山いるということを実際に体験したことにより、国内だけではなく海外を含めた震災、防災や被災、支援といったことに対して関心が高まった。そのことにより色々な活動へ積極的に参加するようになった。

4. 活動を通して学んだこと

色々な活動を通して自分には知らないことが多すぎると感じた。そして知らないということはすごく怖いことだと思った。そのため震災の体験などを伝えていくことはもちろん、支援する際に何に困っているのか、本当は何が欲しいのかという相手のことを、現状を知り正しく理解した上で考え行動するべきだと思った。つまりまず知り、次に考え行動することがとても大切だと学んだ。

さらに自分は人との繋がりも大切なものであるとあらためて実感し、被災した経験を生かし、自分を支援してくれた方々のようになりたいと強く思った。

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

ポスターへのコメント

●自分から積極的に活動していて、たくさんのことを学んでいるのがよく伝わってきました。将来のことも考えていてすごいなと思いました。今はインプットが多いと思うのですが、これからどんどんアウトプットしていってください。

●お話が聞けて良かったです。今日話すことも大きな勇気が必要だったのではないでしょうか。その勇気にたくさんのパワーをいただきました。岩手から世界へ経験や思いを発信できたらいいですね。

●自分が辛い経験をしたからこそ、このような活動が出来るのだと思いました。震災からしばらくたち、忘れかけている中で、このような活動をすることはとても大切なことだと思いました。

●発表お疲れ様でした。実際に報告者が何を経験し、何を学び、何を考えたのか、よくわかる発表でした。経験したからこそできる活動があると思います。これからもがんばってください。

●心のケア、一番難しい課題ですね。

●はきはきしていて、聞きやすい発表だった。当事者の視点はやはり貴重であると思うので、自信を持って続けて欲しい。自分の感じたこと、感想が入るとさらによくなると思う。

●目先だけでなく、海外のことについても目を向けていてよいと思いました。自分も被災したからこそわかることもあるのだと思います。とても良い発表でした。私も自分の探求の参考にしたいと思います。

●あしなが育英会× JRC[1]同好会での活動が、自分の行動の方向にもつなげているということはとても尊敬できると思った。

●セミナー参加のため、部活動を休んだら周りから不平がでたという話が心に残った。周りの理解がいかに必要か、重要であるかとを実感した。支援を受けている方々でも、地元に残ろうとする人、支援を返すために進学を決意する人がいると聞き、震災が人生を左右するのだと実感した。

●「知らないことはこわいこと」知ることから始まる支援や防災があると思います。被災者として他の人たち、子どもたちに、どんなことを知っておいてほしいか、お聞きしたかったです。

●「知識がないことはこわいことだ」そのとおりだと思います。どんな知識が重要か考えて

1　JRC は Junior Red Cross（青少年赤十字）の略。青少年赤十字は、幼稚園、保育所、小・中・高等学校、特別支援学校等の中に組織されており、学校・幼稚園の先生や保育所の保育士が指導者となります。児童・生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活の中での実践活動を通じて、いのちと健康を大切に、地域社会や世界のために奉仕し、世界の人びととの友好親善の精神を育成することを目的として、さまざまな活動を学校教育の中で展開しています。（日本赤十字社 HP より：http://www.jrc.or.jp/activity/youth/about/）

みて下さい。

●本当に大切な貴重なお話を有難うございました。今後もぜひこのような活動を続けてほしいと思いました。

●被災者としての体験を語ることは意義のあることであり、とっても勇気のいることだと思います。報告者は自らが被災された身であるにも関わらず、様々な活動をされており、今後自分の体験を生かした活動をされていこうとしていて、勇気づけられました。頑張って。

●お疲れ様でした。大役だったね。スピーチする報告者の姿は、初めて会った時に比べて大人になったと感じました。報告者がいろんな人の前で素直に話す姿は感動します。

●あしなが育英会や他のボランティアの活動を通して、学んだことや経験は報告者にとって大きな価値をもつものだと思うので、自分が感じたことを発信していってほしいと思いました。

●しっかりと自分の考えを持ち、課題解決のためにどうすべきかが明確化されて良いと思いました。

●“自分の目で確かめる”ということの大切さがわかったとおっしゃっていて、気づきが今後の活動に活かせると聞き、感動しました。

●同じ１年生が強い意志を持って積極的に活動していることがすごいと思いました。質問にもしっかり答えていた姿など見習いたいです。お疲れ様でした。

●お話を聞かせていただいて、ありがとうございます。つらいことも沢山あったと思うのですが、前を向いて進んでいらっしゃって格好いいと思いました。夢に向かって頑張ってください。応援しています。

●「今の自分を作っている人」は「命の恩人」という言葉がとても心に残りました。

●陸前高田に若い人がどうしたらもどってくるか難しいですね。

●レインボーハウス[2]の存在など、もっと多くの人に知ってもらえればいいですね。

●たくさんの大事な体験をして、それらの活動からいつも考えて、自分の動き方につなげて

2　遺児・孤児の心のケア施設。遺児が悲しみを吐き出すために工夫されたいろいろな部屋があります。同じ体験を持つ者同士が、安全な場所で、安心して心の中を語り合える「おしゃべりの部屋」、親の死を受容するためにお葬式ごっこをしたりする「ごっこ遊びの部屋」、たまったイライラを思い切り爆発させても安全な「火山の部屋」、一人になって大声で泣いたり亡き人と会話できる「おもいの部屋」など。（あしなが育英会ホームページより：http://www.ashinaga.org/activity/）

活動しようとしているのがすごいと思いました。

●震災直後から現在まで支援として、継続が必要ということ、改めて感じました。“知る”ということの大切さも改めて感じました。ありがとうございました。

●発表お疲れ様でした。ぜひ、目標や夢に向かって頑張ってください。私は親戚が陸前高田市にいるので、年に２回くらいは行っています。震災前の姿も知っているし、震災後の状況もみています（とはいえ、行くところはきまっています）今、仙台にいて震災の活動はあまり出きません。しかし、まだ復興が終わっていない高田の状況があるため、微力ではありますが、高田のお土産を職場に買って持っていくことをたまにしています。少しでも思い出してもらえたら、、、と思って（でも、お土産の種類が少ないので、選ぶの困っています）職場では、震災時に復旧、復興の仕事をしましたが（行政職なので）今、職場で話すことは少ないです。思い出したくないという人も多くいるようです。しかし、震災時の状況を知らない職員が増えてきており、話をしないのはもったいないと思っています。有志で記録に残す活動を始めています。活動内容は違いますが、ともに震災の経験に関する活動を続けられると良いですね。

震災から学ぶ活動

（避難行動調査と中学生への災害へ備える授業の実施）

岩手県立一関第一高等学校・附属中学校

菊地　　優

鈴木　里桜

震災から学ぶ活動
（避難行動調査と中学生への災害へ備える授業の実施）

菊地優(岩手県立一関第一高等学校3学年) ・ 鈴木里桜(同附属中学校2学年)

1. 活動の背景

一関市と陸前高田市は隣接していますが，一関市は内陸部，陸前高田市は沿岸部に位置しています。東日本大震災後，内陸部にある一関市はそれほど時間がかからずに日常生活を取り戻しました。津波で甚大な被害を受けた陸前高田市のために私たちにできることは何かと考え，避難行動調査を実施し，災害への知見をまとめる活動に取り組みました。

2. 活動内容

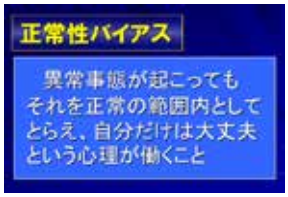
（1）目　的　避難行動調査をとおして津波被災地の現状を理解する。
調査から得られる知見をまとめ，今後の災害へ備える。

（2）内　容　避難行動調査：平成24年8月2日（木）陸前高田市・生徒99名参加

避難者設定（要介護者・高齢者・幼児と親・児童・中学生・高校生・成人）ごとに行動を設定（歩幅・速度・行動の特徴）。陸前高田市内5ルートを実際に歩き，避難に要する時間を計測。得られたデータを陸前高田市へ提供した。

避難行動調査の結果をもとに，そこから読み取れることを付箋紙に書き出し，模造紙に整理。まとめた内容を文化祭で展示，防災意識の喚起を行った。

高校生から附属中学生へ，避難行動調査から分かったこと，考えたこと，災害が起こったときに避難行動を遅れさせる“正常性バイアス”などの人間の心理を含めた「災害に備える授業」を実施した。



3. 活動の成果

避難行動調査の結果と津波到達時間推定のデータから，地震直後に避難を開始することの重要性を理解することができた。要介護者が避難するための道路の整備が必要であること，ルートによっては高齢者の避難に成人の倍以上の時間がかかることが分かった。

4. 活動を通して学んだこと

津波の可能性がある場所では，地震発生時，何をおいてもただちに高台への避難を開始しなければならないことを学んだ。また，被災地の状況から学び，ともに前進するための知見を得ることができた。

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

ポスターへのコメント

●幼児の歩き方を学ぶなど、しっかりとした取組みだと思います。ボランティアを募ったこと、実際に聞いてみたこと、アウトプット（市への情報提供、文化祭の発表、高校生から中学生への授業）ができていることが非常に有用です。歩行のデモなど安定したプレゼンでした。前後の挨拶もいいですね。授業を受けた中学生の感想を知りたいと思います。

●「正常性バイアス」について、バイアスは一瞬のもので、心がけではうちやぶることが難しいものです。できれば、具体的に“グラッときたら、こうする”みたいな行動におとしこめるとよいと思いました。そんな調査もよいのではないでしょうか。

●避難行動調査を行ったのが、平成24年８月ということでしたが、復興関連の土木工事により陸前高田市内の道路状況なども変化していると思います。改めて調査が必要かもしれません。

●陸前高田市の今後のまちづくりに活かせるすばらしい活動だと思いました。現地では、自分のことで精一杯で動き出せない状況の中、近隣に住むが故に出来る活動。正常バイアスについても大変勉強になりました。今後の中高一貫校としての活動に期待しています。

●一番時間のかからないルートや津波到達時間と一番時間のかかった人（40分）について、陸前高田市の皆さんに周知すれば、かなりの効果があると思います。「すぐに逃げれば必ず助かる」とわかることが大事だと思うので、すぐに逃げられるために必要なことについても具体的な部分も含めて、広めるとよいと思いました。

●避難行動調査はルートの状況もかわるので、継続して欲しいと思う。

●高校や中学校の教育に様々な人が関わっていくといい。他の一関市や陸前高田市の中学校でも授業を行ってほしい。

●子どもやお年寄りの視点で調査をされているのが、すごくいいことだと思いました。今後正常バイアスを広める取り組みもできるといいなと思いました。とても聞きやすい発表でした。

●様々な人の場合で、避難にかかる時間を調べて、今後の課題をみつけていたところが良かったです。今までにない発想で自分たちも参考にすることができると思いました。

●中高校生なりに学問的にアプローチして、それを実践的な取り組みに落とし込んでていて素晴らしいなと思いました。陸高から東北、全国、世界、へと発信の幅を広げていけたら面白いですね。ななめの関係　good.

●避難について調査するだけでなく、そこから学んだことを中学生に向けて発信していることが素晴らしいと思いました。

●高校生と中学校のコラボは震災当時幼かった人にも考える機会を与えられていいと思う。次の世代に伝えていくきっかけになると思う。

●震災直後に行ったことに１つ大きな意味があると考えます。

●自ら問題提起し、詳しい調査を行い、結論をだしている。主体的な学びが立派です。これからもがんばってください。

●自分のイメージだけでは思い浮かばないこともあるので、写真があって活動の状況がイメージしやすかった。

●高校生と中学生のコラボがいいと思いました。

●調査でわかった時間や道が今後のハザードマップ等にも役に立てばいいと思いました。ななめから教えるというのはいい案だと思います。教えられた中学生が高校生になって、また教える立場になって欲しいです。現地で学ぶフィールドワークの大切さを改めて感じてことができました。結果や授業についてもっと知ってもらう機会が増えればいいなと思いました。

●複数の人のケースで避難時間を割り出したり、心理学を活かしたまとめを行っていて、とても説得力があり、すばらしい発表だと感じました。避難行動が人によって異なるという点は自分の学校にも持ち帰り、考えてみたいテーマになりました。

●心理にまで踏み込んだ調査はすごい。避難行動調査を朝・夜、季節ごとに地元の人に協力をもらってつづけていけばより成果があがると思います。

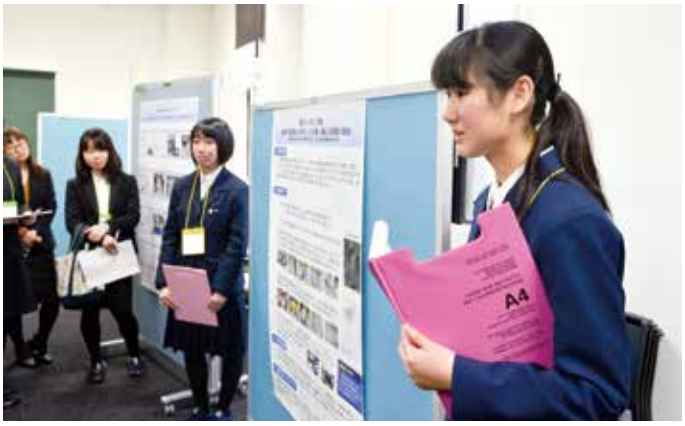
●「先生から生徒」ではなく「高校生から生徒」で中学生にわかりやすく伝えていっていることは、とても大切だと思いました。中・高がとなり合っているからこそできることだと思いました。これからも更に中高つながりをもって、多くの事を伝え合ってほしいです。

●何の質問・疑問も出ない程「その通りだ」と思う発表でした。

●わかったことで正常性バイアスを防ぐことが難しい。すばらしい言葉を知りました。気づいてよかった。質疑応答がやはり、いいですね。

●避難にも時間がかかるし、避難するまでにも時間がかかると思うが、その時間を減らすのが、正常性バイアスの克服なのかなぁと思った。実際はみんな焦っていてパニックでごみごみしてるのだろうと思った。

●データを市へ提供するのはとても有効だと思った。また、99人も集まるのがすごいと思った。そして、５年間で主体的に活動が広がっているのが一番素晴らしいと思った。これからもがんばって欲しいです。



●実際に要介護者、幼児の行動を分析してためしているのが良いと思いま

した。文化祭で展示したということですが、どのくらいの人に伝えることができましたか？あまり興味のない人にこそ、伝えることが必要だと思うので、展示だけはなく人を集めて工夫ができると良いと思います。

●発表上手いなーと感心してました。凄い。内容も論理的で説得力があるものでした。写真が小さいので、何枚か載せるのであれば大きいのを１枚ドーンと載せた方が良い構図になりそうです。

●震災を知り、学んだ人の授業は中学生にとって良い時間になるのでしょう。頑張ってください。

●具体的にデータを出したり、生徒が結果を書き出し防災について深く考える機会があることは大切なことだと思う。自分たちが問題の原因を提示し、根拠として深く調べていることが良いことだと思った。

沿岸被災地と内陸をつなぐ活動

（沿岸内陸コラボレシピの開発と普及）

岩手県立一関第一高等学校・附属中学校

亀岡　紗衣

小笠原美音

沿岸被災地と内陸をつなぐ活動
（沿岸内陸コラボレシピの開発と普及）

亀岡紗衣(岩手県立一関第一高等学校2学年) ・ 小笠原美音(岩手県立一関第一高等学校2学年)

1. 活動の背景

避難行動調査で陸前高田市を訪れた際，現地の方からお話を伺う機会がありました。その際，現地の方から「今，最も恐れていることは，復興が進んでいない現状で，津波被災地のことがどんどん人の記憶から消えていくこと」と話されました。そこから，復興途上である沿岸被災地へ目を向けつつ，沿岸と内陸をつなぐ活動「沿岸内陸コラボレシピ」の開発と普及に取り組みました。

2. 活動内容

（1）目　的　岩手県の沿岸食材と内陸食材を使用した料理の考案・普及をとおして，復興途上である沿岸に目を向けつつ，沿岸と内陸の両方で高め合う。

（2）内　容　沿岸食材と内陸食材の両方を使用し，味，栄養価，盛り付け，ネーミング等をポイントに，22点の料理を考案。試作段階では先生方に試食をお願いし，助言をいただきながら改良した。

考案した料理を「いわて・秋さけ料理コンクール」に応募し，岩手県知事賞と学校賞を獲得。

文化祭では，復興に向けて「みんなでもちっとがんばっぺし！」と題して餅をつき，一関市の郷土料理である「餅」に沿岸食材を使った餅だれを合わせ，来場者に振るまった。陸前高田市の現状を伝える展示を行い沿岸に目を向けてもらう活動に取り組んだ。

3. 活動の成果

この活動をとおして，内陸の方々に対して沿岸の現状に思いを向けていただくきっかけを作ることができた。また，多くの方々から募金をいただき，陸前高田市へ寄付をすることができた。

4. 活動を通して学んだこと

自給率が100％を超える岩手県の様々な食材を学ぶことができた。また，津波被災地である沿岸を支援するという意識ではなく，ともに高まるという意識で活動することが活動の質を高めるのではないかと感じた。

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

ポスターへのコメント

●「食べる」ということは「生きる」ということにもつながり、誰にも共通する題材であると思います。

●どの料理も美味しそうでした。地元の名産品と一関市の郷土料理である、餅をうまく合わせていて地元の宣伝になりそうです。

●沿岸部と内陸部をつなぐことを目的としてコラボレシピを考案する、というアイデア大好きです。ポスターセッションというのとは、ずれてしまうかもしれないですがレシピ一緒に提示しても良いなぁと思います。

●地域の食材の出回り具合は復興の状況を反映するものであり、地域の食材を活用し消費を拡大するということだけでなく、震災からの復興状況も知ることができ、二重の意味がある。

●沿岸被災地と内陸の食材を使って、料理を作ることで復興につなげようとしている点が面白いと思いました。

●地元の方だからこそ気がつく視点での活動、素晴らしいなと思いました。もっと全国に広まればいいなと思います。そして、岩手に行きたくなりました。

●沿岸食材だけを使用するのではなく、内陸の食材もつかっているところが良かった。ぜひ、他県にも広めてほしい。レシピをインターネットなどで公開してはどうか。

●お料理がとても美味しそうだった。買うだけでなく、作ったりしてお互いに高め合うことがたいせつということがわかりました。

●被災地と内陸を郷土料理を使用してつなごうとした考えがとても良いと思う。どの郷土料理も真似してみたくなるようなもので、良いと思った。

○沿岸部内陸部の食材のコラボでベリージャム、赤ワインとしょうゆ、ソースがあいそうですね。有志のグループ。レシピ欲しいです。産地をみる意識が変化した。

●沿岸部と内陸部のコラボレーションという復興と地産地消どちらもできていいと思った。実際に行動にうつすのは大変だと思うけど、有志で行動していることはすごいと思った。

●「ともに高まる」という意識はすごく大事で貴重な気持ちだと思います。レシピ考案楽しそう。

●「内陸食材×沿岸食材」について、

県内の文化交流という意味でも面白い活動だと思いました。

●食を通して復興支援を行っているのが、非常に面白かった。

●地元の材料を使いながら、若者にも広まりやすそうなおしゃれなレシピを開発されていて工夫が感じられました。今後は県内はもとより、より広い地域で普及していければと思います。また、今回の発表をとおして地元の食材に対する意識が高まったのはいいな、と思いました。

●活動が続くように「高め合う」というテーマを持って活動している点が、よく考えられていてよかったと思います。インターネットなどで、レシピを発信すれば、より多くの人に伝えられるかもしれないので、余裕があったらやってみて下さい。

●クックパッド[1]にのせたりはしないのですか？

●内陸食材と沿岸レシピというのは、岩手ならではアイディアですね。沿岸の地域のことを「同じ県」のなかでももっと知ることができていいですね。

●料理という地域の文化の渡航色が出るものをテーマに挙げることで分かりやすい発表になっている。

●アイデアあふれるレシピが多くあり、地域の郷土料理の普及に一役をかっている。実践だと思います。

●地産地消で面白いと思いました。地域復興のために自分達で動く、学ぶ、ということ勉強になりました。

●沿岸のレシピだけでなく、沿岸と内陸をつなぐという発想が素晴らしいと思いました。私も、高校生のときこのようなことをしたかったなとうらやましく思います。ぜひ、これからも頑張ってください。

●岩手は内陸部と沿岸部で様々に意識の違いがあるという話しをよく聞きますが、その中でも「沿岸支援ではなくお互いに高める」という意識で取り組まれたことは素晴らしいですね。ぜひさまざまな場を活用した広める活動をしてください。

●「料理」に着目するのは年代的にも取り掛かりやすさ的にも良いと思う。食べることで支援につながるようにすることは、支援する側は取り掛かりやすくていいと思う。

1　料理レシピの投稿・検索サービス。レシピの投稿・検索サービスを中心に、献立や料理動画といった毎日の料理を楽しみにするサービスを運営している。（Cookpad ホームページより：https://info.cookpad.com/service_product/japan）

●地産地消にもつながり良いと思う。自給率の高い岩手ならではと思った。

●持ち帰れるようにしたり、保存できるようなものを開発して売れば、食材を作る側の支援にもなり、その売り上げを復興の支援にするとより多くの人に支援を届けられるのではないか。

●被災地というと沿岸をイメージするが、そこをあえて内陸とのかかわりという着眼点に感心しました。沿岸と内陸の両方の活性化につながるとも て良い取り組みだと思いました。

沿岸被災地における健康支援活動

（生活不活発病予防のための農園活動）

岩手県立一関第一高等学校・附属中学校

高橋　美有

小澤　美咲

沿岸被災地における健康支援活動
（生活不活発病予防のための農園活動）

高橋美有(岩手県立一関第一高等学校3学年) ・ 小澤美咲(同附属中学校2学年)

1. 活動の背景

避難行動調査から高齢者の避難にかかる時間の問題が明らかになりました。災害時は「自分の身を自分で守る」という意識が重要であることから，高齢者の避難に耐え得る体力維持のための方法を考える必要性を感じました。そのような折，宮城大学から宮城県南三陸町の高齢者にむけた生活不活発病予防のための農園活動のお話をいただき，ともに活動することになりました。

2. 活動内容

（1）目　的　津波により日常生活が奪われた高齢者に対して体を動かす場を提供する。農園活動に共に取り組むなかで，大学生・高齢者との交流を深める。

（2）内　容　平成25年3月，宮城県南三陸町の津波被害を受けていない土地の開墾を開始。石や草の根を取り除く作業を参加者全員で繰り返し行うことで，徐々に畑ができるような土地に変わって行った。

近隣の住民の方に農作業の指導をしていただき，農作業ができる畑が完成。高齢者の方々が日常的な農作物の世話に取り組んだ。

農園活動は4年間継続し，一関一高生・附属中学生は14回の活動に述べ300名の生徒が参加。毎年行われる収穫祭では，たくさんの郷土料理を振まっていただき，農園作業にとどまらず心温まる交流をさせていただいた。

3. 活動の成果

津波被災地の高齢者の方々が心と体を動かす場を提供することができた。農作業に関しての知識を得るだけでなく，高齢者・大学生の方々との交流をとおして，学校生活では学べない大切なことを学ぶ機会となった。

4. 活動を通して学んだこと

何もなかったところに畑ができ，人が集まり，作物が実り，笑顔が生まれることを実感できた。それぞれの世代ができることに取り組むことが大切であるということを学んだ。

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

ポスターへのコメント

●開墾から始めたのは、おもしろいアイディア、「１回来ただけでボランティアヅラするな」ということを聞き出せたのは信頼関係の証拠だと思う。農業を利用したエクササイズに対して、何かインパクトのあるおしゃれな名前をつけてみたら、もっと身近に感じられるかもしれません。（お年寄りも若者も受け入れられるようなおしゃれな名前を）

●良い活動ですね。土に触れ、体を動かすことによる心の安定は大きいと思います。今後もぜひ続けてくださることを期待します。

●農園活動は世代関係なく活動でき、一つのものを作り上げる達成感を得ることができる。体力維持にもつながり、力仕事は学生が手伝うという形でできるとても良い活動だと思った。段階を踏んで将来のことも考えた活動で期待できるもの。

●発表お疲れさまです。生活不活発病について詳しく知ることができました。とても良い活動だと思うので、これからも継続していってください。

●農園活動を４年間も継続し延べ300名の生徒が参加したという長期的な活動のあり方が素晴らしいと思いました。農作物を一緒に食べることによって、心温まる交流が生まれるというのが素敵ですね。

●体を動かす交流は、心をつなげることがしやすい活動であると思うので、農業活動はとても良い活動であると思います。収穫したあと⇒収穫祭という流れもすごく良いと思います。世代間交流はボランティア活動（大学生ボランティア）の中でも課題であり、良いアイディアを沢山いただきました。

●日常生活に密着した広い意味での“防災”といえるような活動だと思いました。ぜひ、今後も継続して欲しいと思いました。

●生活不活発病の予防で高齢者の方々と交流できるとてもいい活動だと思う。高齢者のみなさんも嬉しい活動だと思います。継続的な活動が実を結んだ同校の調査から研究の内容、動機がきまる。

●私自身一関で生活したことがあり、一関の中高生がこのような志の高い活動をされていることに感銘を受けました。

●被災地支援を農業から行ってゆくというのはおもしろい手段だと思った。被災地の高齢者の健康支援と農園活動を是非長く続けていって若者にも伝えていってほしい。

●体を動かす＝運動、体操でないところがGOOD。思考錯誤してたどりつ

いた結果として素晴らしい。

- “農業大好きマン”なので、農業に目を向けてくれて凄く嬉しかったです。お疲れ様でした。
- 農業を通して、継続した活動をしたいうことは、住民の方々にとっても良いことで、内容も被災者の方々に寄り添ったもので、素晴らしいと感じました。
- 発表も質疑応答もとても良かったです。また、とてもユニークかつ具体的な活動でおもしろかったです。生活不活発病予防や農園を通じたコミュニティ作りは高齢化社会に今、震災支援にとどまらない可能性を感じます。活動頑張ってください。
- 現在も地域の方々の手でこの活動がつながっていることが、何より地域に必要な活動であったということを物語っていると思います。

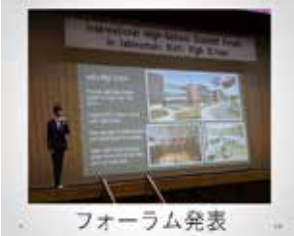
本校の国際交流について

宮城県石巻西高等学校
小山　　愛
甲谷　直子

本校の国際交流について

小山　愛(宮城県石巻西高等学校、1年)　・　甲谷　直子(宮城県石巻西高等学校、1年)

元青年海外協力隊員より

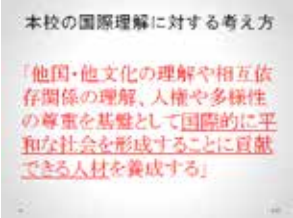

フォーラム発表

フォーラム　西高発表

フォーラム・共同宣言

部活動体験

被災地フィールドワーク



本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

ポスターへのコメント

●石巻の復興をしっかりと見つめ、海外交流から学んだことを生かしていってほしいと思います。また、海外交流の目的について、その目的を達成する手立てについて、再考していくことが大切だと思いました。

●災害の事を国内で終わらせるのではなく、海外にも広めている点で海外の方からの視点でも防災についての考えを深められるのが良いなと思いました。ただ、年々続けていくこと、語り繋いでいくことがもう少し積極的に行われると良いと思いました。

●今後も活動を進めて欲しいです。「防災」「他国間」「津波を経験した地域の高校」をキーワードに自分たちだからできる活動、広げる活動をして欲しいです。

●学校単位で防災に関する活動を行っていて素晴らしいと思いました。

●高校生のうちから国際的な意識を持っていて、将来的にはすごく成長するだろうなと思いました。

●高校生語り部は良いと思います。自分の体験を自分の言葉で伝えていってほしいと思います。

●個人的に国際交流に興味があるので、これからもこのような取り組みを続けてほしいと思います。国際的な防災は、日本にない考え方も発見できると思いました。

●アメリカ、韓国、台湾の３か国の人々との交流は、各国の視点から様々な意見を聞くことができるし、各国の災害についても知ることができるいい取り組みだと思う。震災の経験を日本以外の国に伝えることは大切だと思う。

●高校生から国際フォーラムで発表していてすごいなと思いました。

●日本国内だけでなく外国の学生と交流することで、一人一人の意識も変わる良い活動だと思いました。

●いろいろな国の方々と交流できるのはとても魅力的だと思った。また、防災についても訓練だけではなく、グループワークができるのは良いと思う。工夫されている事業だということが伝わった。

●質疑応答見ていて感動なので検討違いかも、、ごめんなさい。いろんな人と交流していて、考え等が深まっていくのは大切だと思うんですけど、そこから見えたことを今回のように外部に発信しているんでしょうか？していなかったらもったいないなぁーって、、、、。

●少しの時間遅れるだけで命にかかわるということを知りました。また、いろいろな国の人との交流は充実した時間だったと思います。

●防災に関するグループワークは国内の他の高校でも広がるような動きをしてほしい。世界だけでなく、日本国内にも目を向けてみるのもいいかも。東京の高校などにも講演にいってみては？

●想像以上に規模の大きな取り組みをなさっているようで感心しました。国と国とのかかわりを高校生のうちから交流があることで、視野が広まることにつながると思います。

●日本にとどまらず、世界の災害にまで視野を広げているのが素晴らしいと思いました。他国の高校生との交流を通して、さまざまな知見が得られると思います。防災体験学習と授業内で行うというのが、学校をあげた取り組みとしてすごいですね。

●学校側によって国際フォーラム等の国際的な活動ができているので、もっと自分たちから活動できるようにしたほうがもっと良いものとなると思います。

●海外にも目を向けて活動しているのは、すごいと思った。引き続き大変だと思うが頑張ってください。

●震災について外国の学生と考えると、自分では思いつかない考えも出てくると思うので、素敵な取り組みだと思いました。

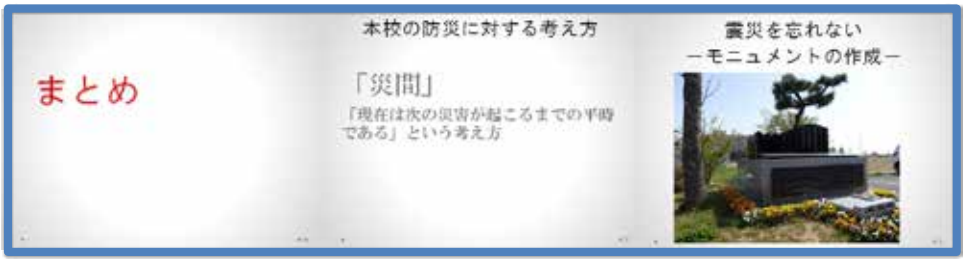
●自身の体験を世界の人の為に活かしてください。

本校の防災交流について

宮城県石巻西高等学校
高橋こころ
阿部　　輝
石井　文乃

本校の防災交流について

高橋こころ(宮城県石巻西高等学校、2年)・阿部輝(宮城県石巻西高等学校、2年)・石井文乃(宮城県石巻西高等学校、2年)



本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

ポスターへのコメント

●地域間・世代間で震災の考え方、感じ方は様々だと思うので、今後も石巻の若者として体験を伝える活動を続けて頂きたいと思います。私も今、石巻に住んでいるので、同じ地域の若者に元気をもらいました。有難うございました。

●“震災を体験した高校生”として、他の高校や小学生に対して一緒に考えながら震災を伝える取り組みをしておられて、すごいなと思いました。

●写真が多くあり、イメージがつきやすかったです。地域の小学校とつながりを持ち、地域に根ざした学校というところがとても良かったです。いろいろな世代と沢山つながることで、自分だけでは気づけないことに、お互いに気づけるよい機会だと思いました。

●これまでに大きな震災などを受けていない地域とどんどん防災交流して欲しいです。（特に、南海トラフが予想されている東海地方と交流していただきたいです）

●災間[1]の考え方、大切だなと感じました。小学生にとって自分たちと同じ年に被災した高校生からのお話を聞くのはとても貴重だなと思いました。発表とても上手でした。

●なまずの学校[2]の現物も見てみたかったなと思いました。

●受け答え、発表、素晴らしかったです。高校全体として、他校との交流をしているのはとても貴重なことですね。“災間”という言葉、覚えておきたいと思います。

●「なまずの学校」(内容を知りたかったです）ゲームを通して、災害についての知識を学ぶことが大事だと思いました。

●被災地以外の高校生たちと交流することで、互いに災害に対する考えを深められるということで、よい活動だなと感じました。

●防災交流という関係を全国の学校と行えているというのは素晴らしい。災間という単語を聞き泣きそうになった。

●小学生だから出てくる発想、被災してないからわかること、などに学ぼうとする姿勢がすごい。

●「何事も起こっていないところ」にしなければならないことが山程あると知りました。

---

1 「災間」とは、前の災害と次の災害の間（2015 年 3 月 10 日朝日新聞朝刊「『災間』を生きる」より）
2 「なまずの学校」は、地震などの災害で発生する様々なトラブルを紙芝居形式で出題し、トラブルを解決するのにもっともふさわしいと思う「なまずカード(アイテムカード)」を出してもらい得点を競うゲームです。このクイズは、実際に阪神・淡路大震災を体験された方々へのヒアリングやアンケートを元に作られています。（NPO 法人プラス・アーツ HP より：http://www.plus-arts.net/?page_id=1585）

●年代や地域を越えた活動は震災の経験を広く伝えるには良い方法だと思う。ゲームは小さい子などにも取り組みやすいものにすれば、もっと広がると思う。

●フォントサイズもう少し大きくしても良いと思います。遊びと学びをリンクさせのはすごい良いアイデイアだと思います。小さいころからそういうこと意識するのが大切ですよね。素敵な学校だとなぁと思いました。

●防災教育というのは、今後震災を風化させないためにもとっても重要になってくると思うので、この取り組みはとても素晴らしいと思います。実は私も「なまずの学校」を他県の小学校で行ったことがあります。どんどん普及していくといいですね。

●伝えることは本当に大切だと思います。震災を知らない小学生の中には仮設で生まれ育った子たちもいて、まだ辛い思いをしています。先輩がどんなふうに乗り越え活動しているかを知ることは、子どもたちにとっても励みになると思いますが、頑張りすぎず、活動を続けていってください。

●被災地の高校はやはり、その他の高校に比べ防止に対する考え方が異なっていると感じた。学生が学生に教える、教わるという関係性は理想的であると思った。

●震災経験のない同世代や下の世代と支援との中で作られたものはとても大きいと思うので、今後に生かしてください。防災ゲームはその内容によってできる年齢が限られてしまったりするので、別物にチャレンジしてみても面白いのかなと感じました。

●「なまずの学校」楽しそうです。ゲームだと勝ち負けだけに集中してしまうことはないですか？

●災間という発想を知りました。受け答えがとても良かったです。さわやかでした。

●他校との交流でお互いに学びが深められるのはよい取り組みですね。「災間」はとても重要な考え方だと思います。何かの本とかにでているかもしれません。よそで見聞きした気がしなくでもない。改めて調べてみたいと思います。

絆と結束の町　城山

～ハザードマップ作りをとおして～

福島県立磐城桜が丘高等学校

河野　息吹

曳地　優莉

本間あゆみ

絆と結束の町　城山

～ハザードマップ作りをとおして～

河野息吹(福島県立磐城桜が丘高等学校2年)　曳地優莉(福島県立磐城桜が丘高等学校2年)
本間あゆみ(福島県立磐城桜が丘高等学校2年)

1. 活動の背景

私たちの学校がある地域は、昔、平藩の城があったことから、城山と呼ばれている。学校周辺のフィールドワークや生徒、地域住民の方にアンケート調査を実施したところ、急傾斜地や暗くて狭い道が多くあり、危険であることが分かった。また、防災に対する住民の意識も震災直後と比べると薄れてきていることが分かり、再び震災が起こった時に、避難のための行動が被災につながる可能性があるのではないかと懸念した。そこで、いわき市が制作したハザードマップを改良し、より地域に密着したハザードマップをまずはこの城山地区に普及することで、薄れつつある防災意識を向上させ、次の災害に備える足がかりになるのではないかと考え、この活動に取り組んだ。

2. 活動内容

1. 城山地区でフィールドワークを行い、災害時の給水や備蓄品保管場所の情報を整理し、また、危険区域や避難所を標示する看板や公共施設の場所をハザードマップに示した。
2. 東日本大震災の発生当日、通常どおり登校していた生徒のなかには帰宅困難な者がいた。そこで、学校から徒歩で帰宅する際にかかる時間や危険区域について確かめた。
3. 私たちの活動が認められ、いわき市主催の防災訓練(内陸部)を本校会場で実施することになり、市の危機管理課と協力し図上訓練やカレーの炊き出し、運動不足を解消するための本校伝統の「磐女体操」を参加者と行い、また、ラジオで防災活動の取組を紹介した。
4. 完成したハザードマップを、全校生徒と城山地区の全戸に回覧板を通して配布した。

活動内容1
ハザードマップに必要な情報を追加

活動内容3
防災訓練での図上訓練

活動内容4
城山地区ハザードマップ

3. 活動の成果

- 学校周辺や通学路の災害危機状況をより深く知ることで、私たち自身の防災意識を高めることができた。
- 地域の防災情報を詳細に取り入れ、独自のハザードマップを作成することができた。
- いわき市との協力で内陸部防災訓練を成功させることができた。
- ラジオをとおして、自分たちの活動を多くの市民に発信することができた。
- 1.17防災未来賞　ぼうさい甲子園に参加し「はばたん賞」を受賞した。

4. 活動を通して学んだこと

防災は地域の方々への声掛けが大切であることを強く感じました。「お互いがお互いを思い合う心」こそ最大の防災であるということが、今回の研究をとおして学んだことです。地域の方々に城山の歴史を聞きながら調査を行い、さらに独居老人会との交流ができたのも大きな収穫となり、日ごろのあいさつや声掛けなど、これからも地域との交流を深めていきます。

活動内容3
FMいわきで活動を紹介

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

ポスターへのコメント

●危険な地域にこそ避難方法、経路の提示は重要だと思う。

●自力での避難が困難な人の把握をして、どの辺にそのような人が多いのか、その人はどう避難すればよいのかも考えるとより良いと思う。

●学校で行われた取組みが市で採用されたことが非常に成果のある活動だと感じました。見やすいということだったので、一目見て危険な個所がわかるハザードマップはとても有用だと思いました。

●ハザードマップを実際に歩いて作り直したということで、その行動力に感心しました。やはり地元で生活しているということで、一番当事者に近い視点で、地域に寄り添えるのが強みだと思うので、それを生かして今後も活動してください。

●防災は大切だということは、多くの人が感じていても中々行動に移すことが少ないと思うので、高校生でこういうことをやっているのは、本当にすごいと思いました。しかも授業とかではなくやっていて、すごいと思いました。

●ハザードマップは、市が作ったものよりも「地元の高校生が作った」という方が、地域の人もおそらく見る気になるなぁと感じました。まさに高校生の強みかもしれないです。

●ハザードマップと地形や建物を見て回るだけかと思っていましたが、歴史なども含めて話を聞いたり、交流も知識も深められる、とても良い活動だと思いました。お疲れ様でした。

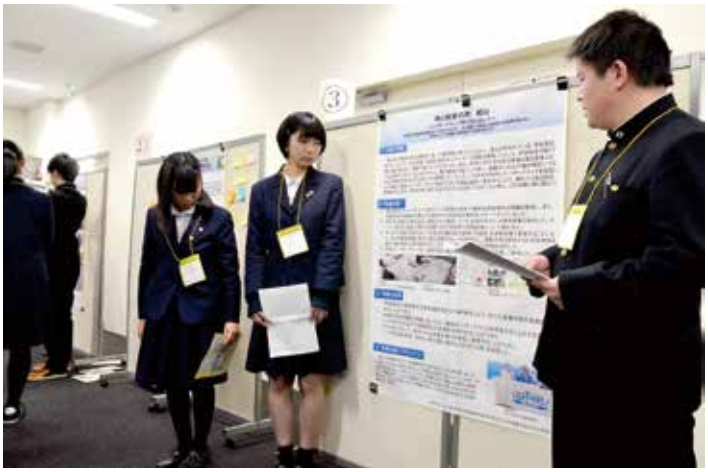
●自分たちで考案し、作成しそれを地域に還元される活動がすごい。是非こういう視点の活動を続けてください。

●高校の部活動が市の活動に反映されたということで、すごいなと思いました。有難うございました。

●とても地道ですが、大事な活動をされていると思いました。情報のアップデートなど手間ひまかかると思いますが、活動頑張ってください。

●「キケンだ」と言われてしまうと、地価に影響するというのはまったく、そのとおりでとても厄介な大人の事情ですが、もし可能ならば県や市、そして知識人とのコミュニケーションを通して、その部分を若者の力で突破していってほしいなと希望します。

●よく発表の準備をしていて良かった。取り組みが防災マップという



形になったり、防災甲子園での「はばたん賞」を受賞につながったりと素晴らしい。さらに、訓練の充実を期待します。

●ハザードマップの改良を通して、自身の防災意識をUPさせたことは素晴らしい。自分の足で歩いて自分の目で見ないとわからないことは多い。それができているのは素晴らしい。これからもその姿勢を続けてほしい。老人会との交流ができたことは地域貢献ですね。普段のマイナーチェンジを行ってよりよいものに。

●ハザードマップを作る時に、実際に行ってみるのは大切だと思いました。学校や近所の人だけでなく、公民館などに大きくしたものを貼ったりするといいと思います。初めて聞く人としては、どういう地域で、どういう被害があったかなどが、分からないので教えて欲しかったです。

絆と結束の町　城山

～防災カードで変える未来～

福島県立磐城桜が丘高等学校

太田　　樹

三瓶　海斗

絆と結束の町　城山
～防災カードで変える未来～

太田　樹（福島県立磐城桜が丘高等学校2年）　三瓶海斗（福島県立磐城桜が丘高等学校2年）

1. 活動の背景

2015年いわき市主催の防災訓練に本校が指定され、図上訓練や炊き出し、そして本校伝統の「磐女体操」を参加者と一緒に行うなど、訓練の運営に携わることができました。この体験から、地元住民との交流そのものの重要性を肌で感じ、また、避難時に準備しておく物資は何かを理解しておく必要性を感じました。そこで、いわき市及び城山地区の「結の会」（独居老人を見守る会）との交流会を催したり、住民の方々や私たちが安全に避難できるように「防災のしおり」や「防災カード」の制作に取り組みました。

2. 活動内容

1. いわき市市制50年を記念して開催された高校生チャレンジブースにて「城山から広げよう防災の輪」を合言葉に、「防災のしおり」と「乾パンレシピ（本校防災食で選ばれた作品）」を配布し、また、防災袋の販売や防災クイズ、いわき市危機管理課の協力で乾パンスープや「ハザードマップ」の配布を行いました。
2. 城山地区の独居老人を見守る「結の会」の会員の皆様に、防災袋と防災のしおりを配布し、また、独居老人宅の窓ふき掃除を全校生徒から希望者を募って活動を行いました。
3. 地域の美化活動として、通学路の落ち葉掃きやごみ拾い活動を全校生徒で取り組みました。
4. いわき市危機管理課、学校教育課、保健福祉課、消防署に意見をいただきながら「防災カード」を完成させ、全校生徒及び教職員に配付し、また、現在は老人用や外国の方々のために英語版も作成しています。
5. 災害の少ない富山県の高校生と「防災」をテーマに交流を深めました。

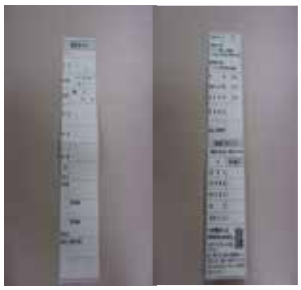
活動内容1高校生チャレンジブース

活動内容2窓拭き清掃

3. 活動の成果

・高校生チャレンジブースでの活動をとおして、いわき市民に防災の備えや非常食の大切さを知らせることができ、市民の方々から「防災のしおりは役に立つのでもっと下さい」や、外国の方々から「英語バージョンも作って下さい」と声を掛けていただきました。
・「結の会」との交流をとおして、地域の方々が地元の学校を大切に思っていただいていることを知り、高校生として出来る事を活動していきたいと強く感じました。
・作成した「防災カード」の配布活動をとおして、家族の避難場所を決めていない家庭が多いことを知りました。
・他校生との交流で、今まで以上に「防災」について深く考えることができました。

活動内容5富山県の高校生と交流会


活動内容4「防災カード」

4. 活動を通して学んだこと

・「防災」について広く住民に知らせる活動の大切さを知りました。
・東日本大震災を経験した私たちが、他校との交流をとおして、「防災」の大切さを再認識することができました。
・「防災カード」作りをとおして、子どもからお年寄まで、そして外国の方々にも対応できるように、文字の大きさや言語に注意し、避難場所で正確に自分の情報を伝えられるように工夫をこらしました。今後も「防災カード」を世界中の方々に使っていただけるように改良していきます。

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

ポスターへのコメント

●高校生発の取り組みが、市と連携してどんどん広がっていて素晴らしいですね。防災カード全国に広めよう。

●防災カードの普及を是非続けてください。英語版も。

●二人で連携した良い発表だった。防災カードや防災のしおりはとても役立ちそう。普及して欲しい。

●「防災カード」の完成に向けた活動が高校生と地域を繋げることができたり、活動を通じて交流することができている。顔や心のつながりが、発災時、地域ぐるみの避難行動につながると思う。

●６年前の震災時にデジタルな物が役に立たず、手書き等のアナログな物の重要性を痛感した。是非、しおり、カード等を日々改善して有効なものにしてほしい。

●防災のしおりや防災のカードを実際に見せてくれたのが良かった。ポスターに書かれてある字を全て読み上げるのではなく、ポスターには特に大事なことを書き、発表する際に細かいことを話すともっと良いと思います。

●ハザードマップやしおりなどを配布することで、災害が起こった時に被害を少なくすることができると思いました。私は震災後の被災者の心の支援についてとても興味をもっているのですが、日ごろから防災意識を高めることで被害を少なくできるのだと思います。素敵な発表を有難うございました。頑張ってください。

●震災を経験していない県に出向き、自分達の感じたことや学んだことを伝えていくという活動はとても素晴らしいと思いました。何が必要で何をすべきかを明確にしていて、防災カードの製作は本当に良いと思いました。

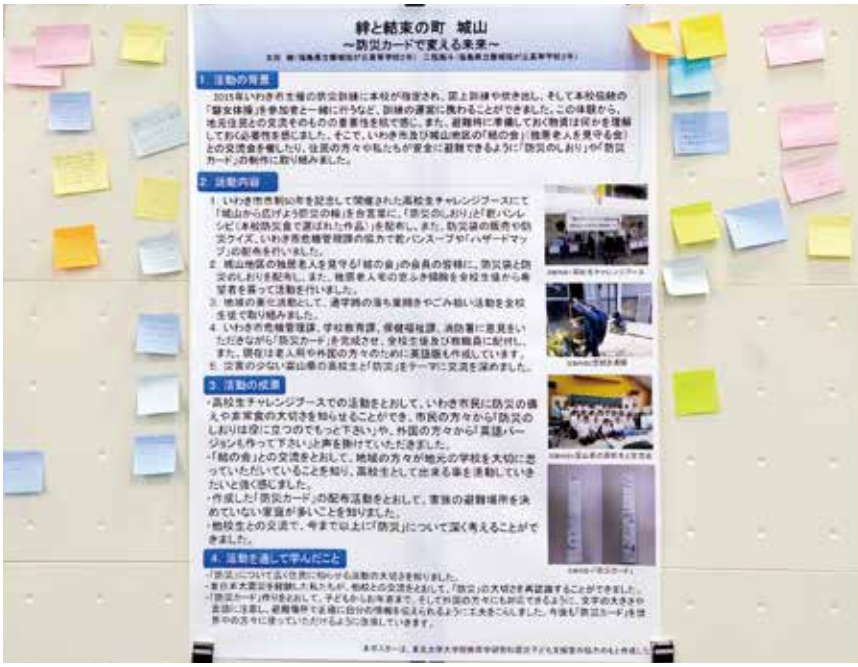
●防災のしおりや防災カードの配布など高校生でも地域のために沢山のことをできることが分かりました。また、発表や質問への回答がとても聞き取りやすく、分かりやすかったです。お疲れ様でした。

●高齢者の方との交流を通して感じたことなども多くあると思うので、それについても発信してくれるといいと思う。

●いわきで、東日本大震災の経験を引き継いでくれて心強いです。頑張ってください。

●持ち運びしやすい防災カードや英語版の防災のしおりを作ったのはとても素晴らしいアイデイアだと思いました。外国の方は防災の意識が低いので喜ばれると思います。

●防災カードは人を安心させる便利グッズですね。今後も広められるよう頑張ってください。



●窓ふきなどは単身で住んでいるお年寄りの方には、難しいとも思うので良い試みだと思った。実際に仮設住宅に住む人向けに、窓ふき等のボランティア活動をしたことがあります。

●中国語版を作るなら繁体字（台湾の方向け）と筒体字版が必要ですね。

●私は福島出身です。皆さんの活動はとても素晴らしいものだと感じました。是非福島県内で県出身の大学生や高校生などが交流する機会があればと思いました。

●防災カードや外国人用を作るときは英語以外（中国語、ベトナム語）もあるといいと思います。英語を話す人より中国語を話す人が多い。

●自分たちで調査し、防災カードやしおりを作っているのはすごい。どんどん自分達でそういうものを配布して広げていってもらえればと思います。県とか市に提案してみるとか。

●他県の生徒の交流もいいですね。

●防災意識が低いのは震災の被害を受けていない地域だと思っていました。被害を受けている方々も意識が低いんだと驚きました。

●経験した所ですら防災カードが必要とは驚きです。防災カードを貰えてうれしい。日本中に広めてもらいたい。

●防災カード、もらいました。有難うございました。“活動の成果”で、新たな問題点が見つかったようなので、是非活動継続と活動の拡張を頑張って欲しいと思った。せっかく、富山と交流があるので、災害の時に家族の連絡を集める先を互いに用意するとかどうかなと思った。

●防災カードは、日本語と英語のを別々に作るのではなく、日本語版に英語を加えた方がいいと思った（日本人がみても読めないと意味がないから）

●実際の経験を通して、完成度の高い防災カードを作り、市民の防災を良く考えて取り組ん

でいることが伝わってきました。防災カード、日本中に広がるといいですね。応援しています。

- 「防災のしおり」「防災カード」必要性を感じるので、まずは福島県内で広まることを願いたい。

- カードやしおりなどのツールに作る過程を活用してもらうまでの活動も、本当に大変だと思います。手にした方々は本当に幸せだと思います。頑張ってください。

課外・ボランティア活動支援センターと
学生ボランティア団体の紹介

課外・ボランティア活動支援センターと学生ボランティア団体の紹介

東北大学高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター特任准教授　藤室　玲治

東北大学の課外・活動ボランティア支援センターで特任准教授をやっております、藤室と申します。これから行う、学生団体からの報告の司会をやらせていただきますのでよろしくお願いいたします。このたびは、東北大学の学生ボランティアに活動報告の機会を与えていただきました教育学研究科 S- チルの皆さん、また遠路はるばるお越しいただきました高校生の皆さん、誠にありがとうございます。

先ほど岩手県の大船渡高校に通う陸前高田出身の高校生の方の報告をお聞きしたのですが、私も東日本大震災発生の後、陸前高田市によくうかがっています。私は神戸出身で、1995 年に阪神・淡路大震災があったときに、大学生の皆さんと同じ 20 歳でした。その時、避難所でボランティアをしたのがきっかけで、今も学生ボランティア支援の仕事をさせていただいております。2011 年のゴールデンウィークの際には、神戸から陸前高田を訪問しました。その後、定期的に通っています。最近は、かさ上げ地に商業施設が出来ました。ただ、その周辺はまだ更地です。復興はまだまだです。7 年経って、そういう状況ですね。

僕は神戸にいた頃、阪神・淡路大震災の避難所の仮設住宅で活動していました。2013 年になってから東北大に来まして、東北の仮設住宅や復興住宅の支援を行なうようになりました。ですので、2011 年当時の東北大の様子は他人から聞いた話になります。

スライド 1 をご覧下さい。3 月に東日本大震災が発生して、東北大は 5 月のゴールデンウィークくらいまでお休みになります。入試も後期日程は遅らせて実施になりました。その間、宮城県の一番南の方に山元町というところ

東日本大震災の東北大学学生ボランティア支援

年月日	事柄
2011/3/11	東日本大震災が発生
2011/4/4	東北大学Webサイトに「東日本大震災学生ボランティア支援」に関するページが設けられる。
2011/4/8	東北大学の災害対策本部が山元町社会福祉協議会の要請を受け、山元町にボランティア派遣を開始。コーディネート等は学生団体HARUが担当
2011/6/7	大学生ボランティアの増員を受けて「東日本大震災学生ボランティア支援室」が設置される
2014/4/1	高度教養教育・学生支援機構発足。機構の一業務センターとして「課外・ボランティア活動支援センターが発足」
2016/4～	熊本地震発生。熊本大学・熊本県立大学と連携し、支援活動を実施。これまで9回、現地に東北大学生を派遣

【スライド 1】

がありまして、宮城県から「山元町に支援に入ってくれないか」という要請があって、東北大から多くの学生が山元町で活動しました。避難所に入って活動したり、ガレキ撤去の活動をしたりしています。これから、トップバッターで話をしてもらう学生団体“HARU”が、当時の山元町での支援を担当していましたが、当時は非常に厳しい状況だったので、一生懸命活動していた大学生のボランティアが疲れ切ってしまうことがありました。それで、大学として支援体制を整えようということで「東日本大震災学生ボランティア支援室」が6月に設置されます。

その後2014年度になり、冒頭ご挨拶させていただいた花輪先生が機構長を務める「高度教養教育・学生支援機構」が誕生し、その機構の業務センターとして「課外・ボランティア活動支援センター」ができます。私は現在、その課外・ボランティア活動支援センターで色々な学生ボランティア活動の支援をさせていただいています。2016年に熊本地震が起きますね。その支援も熊本大、熊本県立大と一緒に行っています。他にもセンターではボランティアに関する授業もしています。仮設住宅や復興住宅でボランティアをしてみる基礎ゼミ・展開ゼミ「地域課題とボランティア活動」を開講していて、今回報告してくれる団体のひとつ「たなぼた」はその授業から誕生します。

【スライド2】

さて、東日本大震災が起きてから、いろんなグループが東北大に誕生しました。今、8つほどのグループが、大学に登録しています。スライド2をご覧ください。☆がついているのが今回報告してくれる団体です。“キッズドア”は学外のNPOなんですが、そこで活動している東北大学生の皆さんに活動内容を報告してもらいます。

さて、私どもとしては、ボランティア活動の基本はコミュニケーションだと思っています。被災して傷ついた方々は、自分はいかに理不尽に大変な目に遭ったかということを人に理解してもらいたいという気持ちを持っています。同時に、誰にでも簡単に話せるものではないとも思っています。だけど、やっぱり人に分かってもらいたいという矛盾した思いを持っています。そういう中で、被災した方々同士、あるいは被災した方々とボランティア、あるいはボランティアとボランティア同士がどういう風にコミュニケーションをとるかがすごく大事で、コミュニケーションにより相手の事をよく理解した上で、労力の提供や物資の提供、資金の提供等が続いて支援されることが非常に大事です。

このことは、野田正彰さんが阪神・淡路大震災のあとに『災害救援』という岩波新書で書

かれています。「ボランティアが自分の創意で被災者に近づいて、心の交流をしていくことが災害時ボランティアとして一番大事」だと。

今、多くの東北大生ボランティアが「足湯ボランティア」という活動をしています。タライにお湯をはって、被災された方々に足を入れてもらって、その間に向き合って、相手の手を揉んだりさすったりしながら会話をします。すると、色々なお話をうかがいます。そうしたお話のことを我々は「つぶやき」と呼んでいます。今回いろんな報告の中で、被災した方から足湯しながら聞いた話なんかも紹介されると思います。足湯はコミュニケーションのための創意工夫の１つなので、足湯が大事ということじゃなくて、「つぶやき」が大事になります。他にも、お茶を飲みながら色んな話を聞いたり、手芸しながらいろんな話を聞いたり、あるいは子どもと遊びながらいろんな話を聞いたり、様々な形でうかがった被災された方々のお話が今回は紹介されると思います。ぜひ、学生が見た被災地の様子を聞いていただければと思います。

またさきほど、防災ワークショップをやろうとしている気仙沼高校の菅原さんの発表をお聞きしたんですけれども、大学生も同じように、防災ワークショップをしています。地域のおじさん達おばさん達に学生が交じってワークショップをすると、住民の方々がお話やすくなるようです。伝統的な地域社会ですと、年配の男性の前で、若い方とか女性の方が意見を言いにくいところがあります。年配の男性の方々というのは、もちろん立派な方々なんですけれども、それだけに女性・若者が意見を言いにくい場合があります。そこによそ者の大学生が入って司会をすると、女性や若い方もいろいろ話やすくなるという効果がありました。なので、ぜひ高校生の皆さんも、地元の方々に交ざって、防災ワークショップをやっていただければいいかなと思います。

被災地では、いま人口減少社会に見合った「新しい価値観」をどう構築するかということと、「新たなコミュニティ」をどうつくるかということが課題になっています。これこそ、大学生や高校生の皆さんにこそ考えてもらうことが必要な課題です。今どんどん日本は人口が減少する社会になっています。被災前よりも人口が増えるという自治体はそうありません。東北の中では仙台が一人勝ちと言われて、仙台は震災前より人口が増えていますが、その仙台でさえ数年後には人口減に転じます。多くの被災地で、前より人が増えるということは考えにくいという状態です。じゃ、その中で復興とは何でしょうか？「人が増える事＝復興」と考えると、被災地は復興しないのです。そこで「新しい価値観」を持つことが必要となります。また前のコミュニティーが流されてしまい災害危険区域に指定される、新しい住み方をしないといけない。新しい住み方、新しいコミュニティってどう形成するのか？これも大きな課題になります。

今年の夏、陸前高田の高校生からお話を聞いた時に「震災前に比べて、今の高田にいいところなんてひとつもない」と言っていました。新しい商業施設なども出来ているんですが、

前の高田は取り戻せていないということかなと思いました。高田には「動く七夕」というお祭りがあり、東北大学生ボランティアも手伝っています。その祭りをやっていた人たちと一緒に太鼓をたたいた後、同じ高校生が「この地域にはいい人が多いので、大学に行った後も関わりたい」と言っていました。だから「動く七夕」のような伝統行事を支えていくことも、すごい大事かなと思います。

今からいろんな大学生の実践を紹介してもらいます。被災地はどんな様子か、そして大学生の実践にどんな意味があるのか、ということを考えながら聞いていただけたらと思います。

大学生が見つめる被災地の現在（いま）

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター　藤室玲治

自己紹介

- 1974年4月10日、大阪生まれ
- 1995年1月17日、神戸大学在学中に阪神・淡路大震災に遭遇。母校の高校が避難所になり、そこでボランティア活動を始める。その後、大学のボランティアサークルで仮設住宅等を支援。
- 2007年3月発生の能登半島地震の際、避難所で足湯ボランティアをはじめて行う
- 2011年4月末、岩手県陸前高田市・大槌町に神戸大学からボランティアバスを派遣
- 2013年4月、東北大学に着任。岩手県・宮城県・福島県等の仮設住宅や復興住宅での学生ボランティア活動の支援を行い、現在に至る

東日本大震災の東北大学学生ボランティア支援

年月日	事柄
2011/3/11	東日本大震災が発生
2011/4/4	東北大学Webサイトに「東日本大震災学生ボランティア支援」に関するページが設けられる。
2011/4/8	東北大学の災害対策本部が山元町社会福祉協議会の要請を受け、山元町にボランティア派遣を開始。コーディネート等は学生団体HARUが担当
2011/6/7	大学生ボランティアの疲弊を受けて「東日本大震災学生ボランティア支援室」が設置される
2014/4/1	高度教養教育・学生支援機構発足。機構の一業務センターとして「課外・ボランティア活動支援センターが発足」
2016/4～	熊本地震発生。熊本大学・熊本県立大学と連携し、支援活動を実施。これまで9回、現地に東北大学生を派遣

2015年度の東日本大震災学生ボランティア支援室

課外・ボランティア活動支援センター

【使命】
本学学生の社会性を涵養し、主体的な問題解決能力を備えた指導的人材を育成するために、学生の自主的な課外・ボランティア活動を総合的に支援するとともに、社会貢献型の体験学習を実施し、学生の心身の健康増進に寄与する。

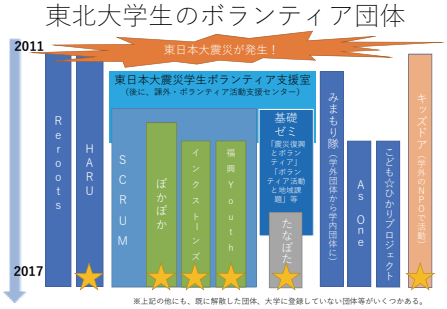
【事業】
(1) 本学学生の自主的な課外活動、文化やスポーツ・ボランティア活動の総合的な支援
(2) 東日本大震災被災地復興および地域社会・国際社会に貢献し得る人材の育成を目的とした、社会貢献型の体験学習（サービス・ラーニング）の企画・実施
(3) 国内外の大学・高校との課外・ボランティア活動における交流・連携の促進

【組織】
センター長　小田中直樹（経済学研究科教授）
副センター長　永富良一（医工学研究科教授）
スタッフ　藤室玲治（機構准教授）　江口怜（機構助教）　水口早苗（学生支援課）
学生スタッフ（SCRUM）代表　山本賢（文学部2年）含め60名

社会貢献型の体験学習（サービス・ラーニング科目）の企画・実施（2017年度）

科目群	授業題目	担当教員	開講時期、受講生数
基幹科目	東日本大震災から見る現代日本社会	藤室玲治、西出優子、江口怜	1S・火1（医保歯薬工）、36名 2S・月4（文系・理農）、15名
基礎ゼミ	ボランティア活動を通して、被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題を知る	藤室玲治	1S・月3・4、14名
	仙台市の地域課題を解決するアイデアを考えよう	藤室玲治	1S・木5、18名
	共生社会に向けたボランティア活動―人権・多様性・エンパワメント	藤室玲治、江口怜	1S・月5、11名
	震災をどう伝えるか―震災遺構の保存・活用と、震災の記憶の伝承の課題を学ぶ	藤室玲治	1S・集中、10名
展開ゼミ	ボランティア活動を通して、被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題を学ぶ	藤室玲治	2S・4S・木5、6名
	三陸復興の地域課題と日本の未来	藤室玲治	2S・4S・集中、9名
	福島における人権保障と共生の課題―原発事故以降を生きる人々に寄り添う	藤室玲治、江口怜	2S・集中、6名

東北大学生のボランティア団体



東北大学　課外ボランティア活動支援センターボランティア支援学生スタッフ

SCRUM

活動メンバー：約60名（東北大生）

設立：2011年6月

○参加団体
ぽかぽか：岩手県陸前高田市で活動

インクストーンズ：石巻市雄勝町で活動

福興youth：福島県いわき市で活動

○直轄部
国際部：主に留学生向けツアー・イベントを実施

人権共生部（ひととも）：主に人権や障害者問題などについての勉強会を実施

震災伝承・災害救援部：過去の災害やその教訓についての勉強会などを実施

その他、熊本地震の支援活動等も行っています！

活動の基本はコミュニケーション

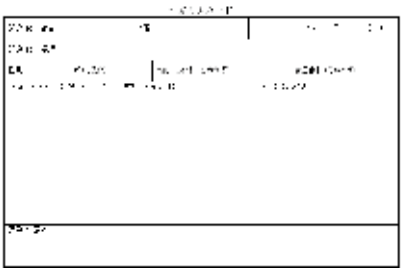
- ボランティア活動の基本は労力提供ではなくコミュニケーション
- 被災し、傷ついた方々の真のニーズは、自分の状況（苦境）を他者に理解してもらうこと
- 被災者と被災者、被災者とボランティア、ボランティアとボランティア同士が、創意工夫してコミュニケーションを取る関係がまずあって、そこに労力や物資が提供されることが重要

傷ついた人こそ、自分を尊敬してほしいと思っている。ボランティアの真の仕事は、被災者一人ひとりの内に人間の尊厳を見出すことである。…被災地のあちらこちらで被災者とボランティアとの無数の交流が行われている。対立もあり、批判もあり、時に喧嘩になってもいい。ボランティアが自分の創意で被災者に近づき、心の交流をしていくことこそが災害時ボランティアの精神である。両者の交流を主軸に義援金や労力のサービスが寄り添う援助活動が繰り広げられるように、行政も社会も変わっていってほしい、と私は思う。…大地震にもかかわらず、災害直後から人間のネットワークが無数に伸び、からまりあい、しっかりと人々が支え合う根のある社会こそが地震に強い社会である。

（野田正彰『災害救援』1995）

「つぶやき」を書きとめる

- 足湯を行っている10分程度の間に、いろいろなお話をうかがいます
- こうしたお話を「つぶやき」と呼んでいます。被災のこと、仕事のこと、家族のこと、生活のことなど
- 「つぶやき」は記録して、現地の支援団体等と共有し、今後のケアに活かしてもらいます。また、自分たちでも共有して、相手のことを深く理解するために役立てます。



例えば、こんなつぶやきが被災地の子どものつぶやき

- （仮設住宅の中で）遊んでいると怒る人がいるから、ゲームばかりしている（2015年9月、陸前高田市　高校生）
- （仮設住宅に移って通う小学校が変わって、それでも）一緒に通っていた同じ地域の子どもがいたんだけど、その子が自宅再建して出て行って、友達がいなくなって、それで中学校に上がった後、不登校になった。仮設では元気にしているんだけど……（2015年9月仮設住宅の会長さんから）
- 仮設は、こどもが少なくなって寂しい（2017年9月、石巻市　小学生）
- 家の再建で2重ローンを抱えていて、大学進学のお金がない（2017年8月、陸前高田市　高校生）
- 震災前の陸前高田と比べて、今の高田にいいことなんかひとつもない（2017年8月、陸前高田市　高校生）
- この地域にはいい人が多いので、大学に行った後も関わりたい（ 2017年9月、陸前高田市高校生）

高校生・大学生にできること

- 寄り添い、傾聴
- 子どもの遊び相手、学習支援
- 伝統行事のお手伝い
- 防災やまちづくり等のワークショップ
- 調査やアドボカシー（権利擁護のための代弁）

まちづくりワークショップ

伝統行事のお手伝い

新たな価値観とコミュニティ

- 新たな価値観

人口減少社会の「復興」とは何か？という前例少ない課題に取り組むにあたっては「戦災復興」イメージの復興観を脱却して、新たな価値観を持つことが必要

- 新たなコミュニティの形成

従前のコミュニティが、震災・津波・原発事故と、その後の復興事業のために分断されているのを乗り越え、新たなコミュニティを形成する必要がある。

大学生プレゼンテーション

地域復興プロジェクト“ＨＡＲＵ”
ＮＰＯ法人キッズドア
陸前高田応援サークルぽかぽか
インクストーンズ
福興 youth
基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼた

子ども支援の変遷

～震災直後から現在までのHARUの取り組み～

地域復興プロジェクト“HARU”
関　　奏子
小林　奎太

東北大学地域復興プロジェクト
“HARU”

HARUとは

東北地域の復興支援・地域再生を目的に有志の学生が集結し、2011年3月24日に結成された学生ボランティア団体です。東日本大震災直後から活動を継続してきた経験とつながりを生かし、被災地の移り変わるニーズへの対応に努めています。現在は、宮城県石巻市及び山元町を活動拠点としています。

活動の実績

2011年3月24日 → 2011年9月21日（長期的な支援を見据えて） → 2017年1月1日（多様なニーズに対応するため） → 現在

震災直後のボランティア活動	プロジェクト単位の活動	部門単位の活動
現地支援 物資支援	足湯プロジェクト 教育支援プロジェクト あそいくプロジェクト 料理教室プロジェクト	石巻部門 山元部門

部門の活動

土日を利用し、レンタカーや公共交通機関で現地に行きます。月に一度の全体ミーティングで活動報告や今後の企画の検討を行います。

◆石巻部門

仮設住宅および復興公営住宅の集会所にて、足湯カフェや料理イベントなどを定期的に行っています。住民と学生、そして住民同士の交流を深める場を設けることが狙いです。地域住民の方との交流を通して課題やニーズに気づき、自分たちにできる支援を行っています。

足湯カフェの様子

- 震災によって失われたコミュニティの再建
- 傾聴活動による心のケアや安らぎ・癒し
- 継続的な訪問や対話を通じたニーズの発掘

◆山元部門

地域のお祭りやイベントを積極的にお手伝いし、町を盛り上げる数々の取り組みに関わっています。毎年秋には他団体と協力してハロウィンイベントを企画しており、子どもからお年寄りまで幅広い世代が楽しく交流することのできる機会を作っています。

ハロウィンイベントの様子

- 地域の活性化への貢献
- 町民の世代間交流の促進
- 若者の人手の提供

その他の活動

◆他団体・他大学との交流

団体の壁を越えてコラボ企画を行ったり、日本各地の学生と合同支援活動や交流会をしたりしています。

◆ツアーの企画

一般参加者の学生とともに、被災地について学んだり魅力を発見したりするツアーを開催しています。

◆広報活動

HARUの活動の様子をHP・ブログ・Twitter・Facebookを用いて積極的に発信し、大学生が見つめる東北の「いま」を伝えています。

- 活動の幅の拡大
- 遠方の地域と被災地を繋げる
- 被災地やボランティアに対する関心を高める

活動から得る学び

- 社会的意識の高まり
- 多くの経験や人との出会いが自分の糧となる
- 自分自身のことを見直すきっかけになる

SNS更新中！
・Twitter
・Facebook
もあります。

HP　ブログ

新メンバー随時募集中！！
お問い合わせはこちらまで
koho@haru-tohoku.org

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

地域復興プロジェクト“HARU”の発表を始めさせていただきます。タイトルは、「子ども支援の変遷～震災直後から現在までのHARUの取り組み」で、発表者は、教育学部3年の関奏子と、法学部2年の小林奎太が務めます。どうぞよろしくお願いいたします。

この発表では、東北大学の震災関連ボランティア団体として震災直後から6年半に渡り活動を継続してきたHARUが行ってきた子ども支援を、被災地のニーズの変化を踏まえつつ、時系列でご紹介していきます。

まず、HARUという団体について簡単にご紹介させていただきます。私たちHARUは、東日本大震災の直後、2011年3月24日に、東北地域の復興支援・地域再生を目的とし、有志の学生が集まって結成されました。きっかけとなったのは、環境科学研究科の教授らが立ち上げた「復興メーリングリスト」で、多い時には1000人以上のボランティアに関する情報を求める学生が登録していました。それ以降、さまざまな活動体制の変化を繰り返し、現在は10人程度で活動を行っております。

つづいて、HARUの活動の歴史を振り返ると、こちらのようになります。2011年3月24日から現地支援、物資支援、教育・研究機関関連支援等の復興支援を行いました。その半年後の2011年9月21日からは、様々な「プロジェクト」を企画し、プロジェクト単位での活動を始めます。そして今年、2017年1月からは活動体制を大きく変え、宮城県石巻市で活動する「石巻部門」と同県亘理郡山元町で活動する「山元部門」の2つの部門を新たに設立しました。次のスライドからは、この大きく分けて3段階の活動体制の変化と、それぞれの時期に行った子ども支援について、被災地の状況と照らし合わせながらお話していきたいと思います。

まず、震災直後の活動についてです。震災直後は、どのようなボランティアが求められており、そしてどういった子ども支援が必要とされていたのでしょうか？

こちらが、震災直後にHARUが主に行っていた活動です。子どもの支援に関わる部分を、赤字で示しています。当時、被災地の子どもたちの現状としては、住宅が流されてしまい、避難所で暮らすことを与儀なくされたり、学用品類を失ったりしてしまっていました。そこで、物資支援として、小中学校への学用品類の提供や、参考書を届けよう！プロジェクトのお手伝いをしました。また、教育に関する支援として、避難所の子どもたちとの交流や、学習の補助を行っていました。

つづいて、そこから半年後に始まったプロジェクト単位の活動についてです。この時期には、被災地のニーズが震災直後から大きく変化したことにより、HARUも変革期を迎え、

子ども支援の在り方も違ったものになります。

それには、ボランティア観の変化がとても影響していました。震災直後は、実際に声に上がるニーズにのみ対応していたのが、そうではなく、実際には声として上がらないニーズにも対応していく必要が出てきました。また、震災直後の活動は一方向的で、行動重視、短期的、そして受動的であったといえます。それに対し、半年後には、支援者と受援者が両方幸せになれる双方向的で、対話を重視し、長期的に絶え間なく被災地を訪れ、ニーズを踏まえて自ら活動を作り出す能動的な姿勢が求められるようになったのです。

こうしたボランティア観の変化に対応し、HARU はこれまでのような単発的な活動ではなく、プロジェクトとしてさまざまな活動を行いました。こちらの 7 つのプロジェクトの中でも、特に子ども支援と関わっている、教育支援プロジェクト、あそいくプロジェクト、料理教室プロジェクトについて取り上げていきたいと思います。

まず、教育支援プロジェクトは、宮城県の石巻市で行っていました。石巻では、塾などの多くは津波で流されてしまい、仮設に住む子どもたちは、以前のような落ち着いた学習環境が奪われてしまっていました。そこで、月に 2 回、二週間おきに石巻の仮設住宅に訪れ、子どもたちの勉強を見て、分からない箇所は教えるという学習の補助を行ったほか、仮設住宅に住む子どもたちの「居場所」を作りたい、という思いから一緒に折り紙やゲームをして交流をするといったことも行いました。現在では、仮設住宅に入居している子どもが減り、プロジェクトとしての活動は終了しています。

次に、あそいくプロジェクトについてです。この「あそいく」は皆さん聞きなれない言葉だと思いますが、実は「遊びに行く」という言葉を縮めたものです。先ほど「ボランティア観の変化」の中で、自らニーズを探す能動的な姿勢が必要になったと申し上げましたが、震災から 4 年が経過した 2015 年には、その重要度がさらに高まりました。また、震災から 3 年目までと比べ、震災支援を行う組織や取り組みが大きく減ったと体感した時期でもあります。それでも継続して活動を行うべきだと思った私たちは、被災地のニーズは、自分で現地に行き、地域の様子を知り、そこに住む住民の方と交流しなければ見えてこないと考えました。定期的に「遊びに行く」という究極のニーズをプロジェクト名とし、石巻市に訪問し、住民の方と触れ合い、対話の中からニーズを探りました。お茶会やカラオケを通して、子どもたちとも交流し、見知った顔の大学生が定期的に「遊びに来る」というだけでも、支えになれる部分があったのではないかと思います。

そして、そのあそいくプロジェクトから派生して生

まれたのが料理教室プロジェクトです。仮設住宅を訪問した際にお話した住民の方の「みんなで料理を作るイベントがあったらいいな」という一言をきっかけに立ち上げられました。これまでには、すいとんやおはぎ、冷やし中華などをHARUが材料を用意し、住民の方と一緒に作る、といった活動をしてきました。料理イベントの良さは、幅広い世代の方が気軽に参加しやすいところにあります。普段あまり関わる機会のない住民の方同士が、一緒に料理し、出来上がったものを食べるというのは、貴重な交流となります。ご家族などで子どもたちも多く参加してくれて、これもまた子どもの居場所作りにつながることではないかと思います。

ここまで、HARUがプロジェクト単位で行ってきた活動について紹介してきました。以降のスライドでは、石巻部門と山元部門に体制が見直されて以降のこども支援について、紹介していきます。

そもそも活動体制が見直されたことには、プロジェクトの枠には収まらない多様な活動が増えたことにあります。スライドに挙げた、各地域のイベントへの参加や一般学生向けのツアーの企画、他大学・他団体との交流などです。では実際に行ってきたプロジェクト以外のHARUの活動について紹介していきます。

まず石巻部門ですが、石巻では、仮設住宅や復興公営住宅での料理イベントやお茶会などを継続して行っているほか、高校生との交流も積極的に行っています。今年の3月には、栃木県の真岡女子高校のJRC部の皆さんが宮城県に来て、石巻の門脇西復興住宅、いつもHARUが行ってるところですが、ここで合同で活動を行いました。HARUは、これまでにもオープンキャンパスなどで何度か他県の高校生と一緒に活動をしてきましたが、このような機会を通じて、普段なかなか現地に来ることができない高校生たちに自分たちのボランティア経験を伝えることができればと思っています。

次に山元部門での活動です。山元町では震災後、山元町で「子どもセンター」が新たに作られたり、さまざまな組織・団体が主催するお祭りが定期的に開催されたりなど、子どもを支援する取り組みが盛んに行われています。HARUでも、地域のお祭りをお手伝いしたり、自分たちでイベントを企画したりして、現地の子どもたちへの支援をしています。

まずハロウィンイベントについてです。この企画は元々HARUと東北大のボランティア団体のSCRUMさんが2年前に企画主催したもので、企画は今年で3年目を迎えるのですが、つばめの杜西区、そこが会場なのですが、その自治会が主催という形で行われました。

内容は、皆さんが想像しているようなハロウィン、仮装をした子どもたちがグループを組

んで、大学生と一緒に住宅を訪問していくというものです。住宅訪問では、子どもたち同士の交流が深まった他、大学生を通じて、子どもとお年寄りの間の、世代間での交流もみられました。やまもとスポーツ祭りは、数年前に無くなってしまった山元町の町民運動会を復活させようという目的で、山元町教育委員会生涯学習課にご後援をいただいて、企画したものです。ここでは、小学生や中学生が参加してくれて、地域ぐるみで開催することができました。子どもたちと年齢的に近くて身近な存在である大学生が一緒に交じって体を動かすことで、子どもたち同士の交流がとても深まったと思います。

これまでHARUが行ってきた子ども支援をまとめると、このスライドのようになります。発足からもうすぐ7年を迎えるHARUですが、この間にHARUの活動場所が避難所から仮設住宅、復興住宅へと変わって、子ども支援の内容も、学用品の支給などの物資の支援から教育支援、子ども同士の交流や世代間交流へと大きく変化してきました。今後の支援の在り方としては、引き続き高校生と震災ボランティアについて考える機会を設けたり、来年もやまもとスポーツ祭りやハロウィンイベントの企画を継続して行っていく予定です。また直近では今月17日に山元町のジュニアリーダーという組織に対する教育支援活動も行う予定です。

私たちにできることは、常に被災地のニーズをくみ取りつつ、大学生という立場を生かして子ども支援をしていくことだと思います。これまでお話ししたように、定期的な教育支援を行うことができたり、世代間交流の橋渡しの役割を担うことができたりと、大学生は子どもと近い目線で支援を行うことができる立場にあるのではないかと思います。

震災からの時間の経過とともに被災地の状況は変化していきますが、もちろん子どもたちを取り巻く状況にも同じことが言えます。そのニーズの変化を見逃さず柔軟に対応したり、小さな気づきから新たなニーズを発見したりすることを今後も心掛けて活動していきたいと思います。そして、こうしたボランティア活動を通した学びや出会いは、HARUのメンバー自身の糧となり、充実した大学生活を形作ってきています。

最後になりますが、HARUではHARUは公式HPの他、ブログ、Twitter、Facebookを更新して、HARUのメンバー自身から見た被災地の様子や活動の報告を発信していますので、よろしければぜひご覧ください。

以上でHARUの発表を終わります。ありがとうございました。

東北大学地域復興プロジェクト
“ＨＡＲＵ”

TOHOKU

子ども支援の変遷
～震災直後から現在までのHARUの取り組み～

報告者
教育学部3年　関奏子
法学部2年　　小林奎太

HARUについて

2011年3月11日に発生した東日本大震災の直後に、
東北地域の復興支援・地域再生を目的として結成された
ボランティア団体です。

創設日　2011年3月24日
震災直後に教授らが立ち上げた「復興メーリングリスト」から学生ボランティア団体として立ち上がりました。
1000人程の東北大学関係者が登録するメーリングリストにボランティア募集情報を提供し、ボランティアの派遣と現地指揮を行いました。
現在は10人程度で活動しています。

活動の歴史

2011年 3月24日	2011年 9月21日	2017年 1月1日	現在
震災直後の ボランティア活動	プロジェクト 単位の活動	部門単位 の活動	

2011年3月24日から・・・現地支援、物資支援、教育・研究機関関連支援等の復興支援を行う。

2011年9月21日から・・・様々な「プロジェクト」を企画し、プロジェクト単位での活動を始める。

2017年1月から・・・宮城県石巻市で活動する「石巻部門」と同県亘理郡山元町で活動する「山元部門」の2つの部門を新たに設立。各部門にて現行の「プロジェクト」を継続。

活動の変遷

2011年 3月24日	2011年 9月21日	2017年 1月1日	現在
震災直後 の活動	プロジェクト 単位の活動	部門単位 の活動	

震災直後の活動

現地支援
避難所支援、瓦礫／泥撤去支援、介護支援、通訳、資料整理、HP作成補助、仮設住宅移行支援、写真洗浄

物資支援
物資支援（募集／仕分け／分配／管理保管／運搬）、市町村への衣類提供／青空市場、小中学校への学用品類提供、参考書を届けよう！プロジェクト手伝い

教育／研究機関関連支援
東北大学図書館復旧作業（書籍整理／書架整備）、避難所の子供たちとの交流・学習補助、ボランティア斡旋

活動の変遷

2011年 3月24日	2011年 9月21日	2017年 1月1日	現在
震災直後の ボランティア活動	プロジェクト 単位の活動	部門単位 の活動	

ボランティア観の変化

震災直後

・実際に声に上がる「ニーズ」にのみ対応
・支援者が受援者に〇〇してあげる活動（一方向的）
・「行動」重視の活動
・即戦力となる人材を集める（短期的）
・既にある活動を行うだけ（受動的）

2011年　夏

・実際に声には上がらない「ニーズ」にも対応
・支援者と受援者の両方が幸せ（双方向的）
・「対話」重視の活動
・絶え間のない被災地への訪問（長期的）
・「ニーズ」を踏まえ自ら活動を作り出す（能動的）

プロジェクト単位の活動

過去のプロジェクト

現在活動中のプロジェクト

プロジェクト単位の活動①
教育支援プロジェクト（2012/7-2015/4）

活動場所
宮城県石巻市大橋仮設住宅

活動目的
学業上の不利益の克服に寄与
子どもたちの集まる場所を提供

活動内容
・宿題や自主学習の補助
・折り紙、将棋、お絵かきなど子どもたちが楽しめる場づくり

プロジェクト単位の活動②
あそいくプロジェクト（2015/5-）

※「遊びに行く」の略

活動場所
宮城県石巻市及び山元町

活動目的
住民との交流
被災地のニーズの把握

活動内容
・仮設住宅や公営住宅でのお茶会やカラオケ
・地域の施設訪問
・お祭りへの参加

プロジェクト単位の活動③
料理教室プロジェクト（2016/6-）

活動場所
宮城県石巻市大橋仮設住宅

活動目的
住民との交流
住民同士が交流できる場の提供

活動内容
住民との調理および食事
落語などの催しもの

活動の変化

2011年 3月24日	2011年 9月21日	2017年 1月1日	現在
震災直後のボランティア活動	プロジェクト単位の活動	部門単位の活動	

活動体制の見直し（2017年1月-）

プロジェクト以外にも・・・

①地域のイベントへの参加
②ツアーの企画
③他大学・他団体との交流

「プロジェクト」単位ではなく
「活動場所」単位での活動へ

あそいくプロジェクト・料理教室プロジェクトは平行して行う

多様なニーズへの対応が必要に

石巻での活動

料理イベントや足湯カフェ開催のほか、高校生との交流も行っています。

栃木県真岡女子高校
JRC部との交流・合同活動

場所：門脇西復興公営住宅

東北大学オープンキャンパスにて高校生と交流することも

山元での活動

つばめの杜
「ハロウィンイベント」
※SCRUMとの合同企画

やまもと子ども大人もみんなで遊び隊
「春の遊び隊」「夏の遊び隊」

「やまもとスポーツ祭り」
※後援：山元町教育委員会

まとめ

場所・内容を変えて継続されてきた「子ども支援」

2011年 3月24日	2011年 9月21日	2017年 1月1日	現在
震災直後の活動	プロジェクト単位の活動	部門単位の活動	
避難所	仮設住宅	地域公営住宅	
交流・学習補助 学用品の支給	教育支援 居場所作り コミュニティ支援	地域の活性化 世代間交流の促進	

私たちができること

震災からの時間の経過とともに被災地の状況は変化していく

ニーズの変化を見逃さず柔軟に対応する
小さな気づきから新たなニーズを発見する

被災地の子どもたちを取り巻く状況は
どう変わっているのだろうか？

最後に

HARUは公式HP（www.haru-tohoku.org）の他、活動のブログ（日本語版・英語版）、Twitter、Facebookを更新しています。ぜひご覧ください。

東北大　HARU　検索

ご清聴ありがとうございました

東日本大震災からみる子どもの貧困

～学習支援というアプローチ～

NPO 法人キッズドア

宇野あかり

錦織　広樹

キッズドア@東北

子どもの貧困×震災復興

活動理念と団体概要

子どもの**7人に1人**が貧困状態です

ひとり親家庭では**2人に1人**の子どもが貧困状態です

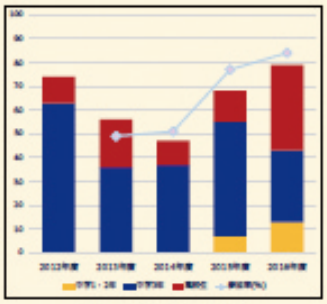
深刻な社会問題…収入格差が教育格差に！！

<キッズドアの学習支援の特徴>

- 被災したご家庭や、経済的に塾などの有料教育サービスを受けることのできないご家庭の中高生が対象の無料学習支援。
- 子どもの教育に関心のある大学生や社会人ボランティアがマンツーマン・少人数制授業等で学習サポート。

多数のメディアに出演・掲載「内閣府子供の貧困対策に関する有識者会議」構成員、「子供の未来応援国民運動」発起人、など政府に対しても積極的に働きかけています。キッズドアは国内における子どもの貧困問題解決のパイオニアとして活動しています。

「子供の未来応援国民運動」一周年の集いに参加（2016年11月8日）



東北事業部は東日本大震災を機に2011年に発足。貧困世帯はもちろん、被災によって困難な状態にある子どもたちも含め、受益者となる子どもの数は年々増えています。

事業内容

タダゼミ&ガチゼミ（受験対策講座）

家庭の経済状況などの理由により塾に通えない環境下で進学を目指す中学生や高校生を対象に、定期テスト対策から受験指導まで行い、勉強の合間にはキャリア教育や進路相談の時間を組み込むこともあります。親や学校の先生とは違った関係を築けるボランティア講師の心温かい指導は、子どもからも保護者からも好評です。

English Drive（英語教室）

個別に英文法の指導やテスト対策をする時間と、ゲームや発表など主体性・協調性を育みながら英語を学ぶアクティビティの時間を用意しています。初めは英語が苦手でも自然と楽しく英語を使えるようになります。

ネクスタ（自習室）

学習習慣が身についていない子や、家庭に学習机などの学習環境が整っていない子なども通っています。自習室では、学校の宿題や受験勉強をしたり、先生に聞けなかった疑問などをいつでも気軽にボランティア講師に尋ねることが出来ます。

南三陸町の復興支援

東日本大震災の直後から被災地支援として戸倉小学校、戸倉中学校、志津川中学校の放課後の学び支援を続けて来ました。2017年度からは新たに志津川高校での学習支援もスタートしました。

ボランティア活動内容

寄り添い支援

まずは子どもたちに心を開いてもらうことが肝心！
集中力の続かない子にも丁寧に対応します
人生の先輩として寄り添いながら学習だけでなく幅広い社会知識を提供し、個々の生徒の将来の夢を実現させるためにキャリア確立のサポートをします

カリキュラム提案

子どもの学力レベル、個性を見極め、各々に適した学習メニューを考案します

集団授業・個別指導

ときには緊張感のある講義形式の集団授業もします
個性あふれるボランティアによる面白授業は必見！

子どもとのコミュニケーション

勉強を教えるだけでなく学校や家庭の悩みを聞いたり悩み相談にものったりします
何でも言える斜めの関係だからこそ打ち明けられることもあるのです

広報活動

ボランティア仲間を増やすのも大事な活動です
活動内容を沢山の方に知ってもらうため、SNS等で発信したり、他団体と積極的に交流したりしています

体験活動

防潮林の植樹ボランティア

学集会

キッズドアの活動に参加すると…

子どもたちとの深い関わりの中で自分自身も**成長**

同じ問題意識を持った人々との**連携・協力**

社会の中で何かしらの力になれるという**実感**

何よりも中高生の子どもたちと一緒にすごしているうちに圧倒的に**笑顔**が増えます！

生まれ育った家庭環境や震災によって変化した環境に将来が左右されることなく、すべての子どもが夢と希望を持てる社会を目指し、子どもたちを支え続けます！

Acknowledgement:本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもとに作成したものである。

KIDS'DOOR NPO法人 キッズドア

まず、簡単な団体紹介をしたいと思います。キッズドアは 2011 年の震災を機に、4 月から東京に避難してきた方への支援を始め、6 月に東北本部を設置し活動を拡大してきました。震災直後にはいわき市や大熊町、双葉町、釜石市などで支援を行ってきました。

キッズドアは貧困層の子どもの支援という形で震災後の復興に携わってきましたが、そもそも子どもの貧困とは、ということについて説明したいと思います。日本の子どもの 7 人に 1 人､ひとり親家庭に限れば 2 人に 1 人が貧困状態にあると言われています。日本における貧困とは、多くの場合、相対的貧困を指します。そして、相対的貧困とは、部活動や習い事、受験勉強など周りの人が当たり前にできている生活が「お金がない」という理由でできない状態を指します。

左の図は、一般家庭と収入の低いことが多い母子家庭の子どもについてまとめた図です。これを見ると、母子家庭の子どもの方が、学力が低く、大学進学率も低くなっています。つまり、親の収入で子どもの学力や進路に差が出てしまっているということです。右の図を見てください。親の収入が少ないと、十分な教育を受けられず、進学や就職も不利になり、その次の世代も貧困になるという連鎖が起こります。そこで、キッズドアは貧困層の子どもに学習支援をすることでこの貧困の連鎖を断ち切ろうとしています。

キッズドアは子どもの貧困を解決するために、経済資本・文化資本・社会関係資本という 3 本の柱を掲げています。まず、経済資本として、大学生を中心とするボランティア講師による無料の学習支援を行っています。次に、芋煮やクリスマス会など、親が忙しい貧困層の家庭ではなかなかできないイベントを企画し、文化資本の面でも支援を行っています。そして、普段は接することのない大学生と関われる環境も、子どもが自分の将来を考えるきっかけになり、社会関係資本を養うのに役立ちます。

ここから簡単に具体的な事業紹介をしたいと思います。キッズドアはタダゼミ・ガチゼミという 2 つの活動をメインに活動しています。タダゼミでは、大学生ボランティアを中心として、中学 3 年生を対象に高校受験対策の指導をしています。ガチゼミでは、高校生を対象に大学受験対策の指導を行っています。また、中学 1・2 年生を対象にしたタダゼミ Jr. という活動も設けています。

その他にも、楽しく英語を学べるように工夫した英語教室 English Drive や、自習できる環境を整えており、ボランティアに質問もできる自習室ネクスタという活動もしています。

南三陸周辺の地域では、震災直後から志津川中学校をはじめとするいくつかの学校で放課

後支援を継続してきました。それに加え昨年度は毎週土曜日に中３生を対象に出張学習会を開催しました。さらに、今年度からは新事業として、南三陸町と協力して新たな学習支援センターを設立し、その運営をキッズドアが請け負っています。南三陸での活動は平日に行っていることが多く、時間的制約で学生の参加が難しいですが、長期休暇などには希望者は参加することができます。

それでは次に成果報告にうつりたいと思います。まずは仙台の活動についてです。震災直後から仙台での活動がはじまり、今年で６年目になりますが、学習会の拡大や広報活動の強化などにより、昨年度はここ５年間で生徒数が最多となりました。また、ボランティアスタッフ一同が、日々子どもたちとの関わり方を模索したことも生徒数増加に繋がったのだと思います。また、毎年、回を重ねるごとに出席率が低下してしまう傾向にありましたが、子どもたちへの積極的な声がけやコミュニケーションを徹底し、受容的な雰囲気をつくることを意識することで、子どもたちからの信頼感や学習意欲が高まり、出席率が大幅に向上しました。もちろん、学力の面でも大きな成果が見られました。キッズドアの子どもたちの多くは、勉強が苦手で勉強をする意義も持てずに受験生になってしまったという子が少なくありません。経済的な理由から、大学進学を中学生の時点であきらめざるを得ず学習意欲がわかないというケースもあります。そのような状況においても、学力が上がることで進路の選択肢を少しでも広めることができるというのが私たちの団体の基本理念です。昨年度は学習会全体として半年間で大幅に学力をあげることができました。ちょっとした機会を与えることで、子どもたちの「今」を大きく変えることが活動の中で痛感させられました。

それでは次に南三陸での活動についての報告に入ります。昨年度行っていた出張学習会は、小規模ながらアットホームな雰囲気が印象的な学習会でした。半年間活動を続け、結果的に学習会に来てくれていた子どもたち全員が無事に高校受験に合格しました。

南三陸の子どもたちとの会話の中で見えてきたのは、震災とは関係なくそもそも地方ということで塾が存在せず、学習の機会が限られているということです。それに加え震災という出来事が重なってしまったことで、子どもたちの将来に対する視野も狭まってしまっているように感じる場面がありました。一方で、南三陸の子どもたちの学習意欲の高さには大変感心させられ、この気持ちを無駄にはしたくはないと強く感じました。現在でも多くの地方被災地では十分な学習機会が提供されていないという状況にあります。１つの団体としてできるこ

とは限られてしまうため、被災地の復興を促進する上で、似た領域の団体同士の横の繋がりを強め、同じ目標に向けて協力しあうことの必要性を感じました。

その他にキッズドアでは仙台と南三陸の繋がりをつくるためのイベントや企画なども定期的に行っています。双方の子どもたち同士が交流する中で、子どもたち自身の視野を広めていきたいというねらいがあります。

最後に実際にキッズドアに来てくれた子どもたちの声を紹介したいと思います。この生徒は石巻で被災し、仙台にやむを得ず引っ越し、昨年度高校受験のためにキッズドアの学習会にきてくれていた子です。このような生徒に対してもスタッフ同士でその都度情報交換をし、細やかな対応をすることで無事に高校受験を終えることができました。

今後とも、すべての子どもたちが夢と希望を持てる社会を目指し、子どもたちを支え続けていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

KIDS'DOOR NPO法人 キッズドア

東北大学大学院教育学研究科
震災子ども支援室"Sチル"
第9回シンポジウム　発表資料

東日本大震災からみる子どもの貧困

～学習支援というアプローチ～

日時：2017年12月9日(土)
教育学部4年　宇野あかり（活動4年目）
工学部2年　　錦織　広樹（活動1年目）

発表概要

1. 団体紹介
   ➢活動経歴／子どもの貧困とは？／活動理念
2. 事業紹介
   ➢仙台での事業／南三陸での事業
3. 成果報告
   ➢仙台での成果／南三陸での成果／子どもの声

CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　2

活動経歴

NPO法人キッズドアでは2011年3月11日の震災以後
4月から被災地および東京に避難してきた方へ支援を開始
6月には仙台市に東北本部を設置し活動を拡大してきました

これまでの主な活動

2011年8月～現在
➢ 南三陸町立戸倉中学校（現在は志津川中学校に統合）での放課後学習支援

2011年8月～現在
➢ 震災等により困難を抱える子ども向けの受験講座『タダゼミ・ガチゼミ』

2017年8月～
➢ 地方創生事業として県立志津川高校学習支援センター『志翔学舎』を設立

その他、震災直後はいわき市、大熊町、双葉町、釜石市などでの学習支援

CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　3

子どもの貧困とは？

子どもの貧困は大きな社会的課題です。貧困は様々な事象の原因となります。

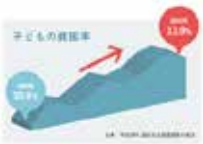
日本の子どものうち
7人に1人が貧困状態です

ひとり親家庭限れば
子どもの2人に1人が貧困状態です

相対的貧困とは？

周りの人は当たり前にできている生活が
「お金がない」という理由でできない

ex. 部活動、習い事、受験勉強…



CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　4

貧困と教育格差

親の収入で子どもたちの学力が決まるといっても過言ではありません。

母子家庭　一般家庭

小学6年生の正答率

	国語A	算数A
母子家庭	53.0%	67.2%
一般家庭	64.8%	80.1%

高校生の進路

	就職など	大学進学
母子家庭	35.9%	28.2%
一般家庭	15.7%	49.4%

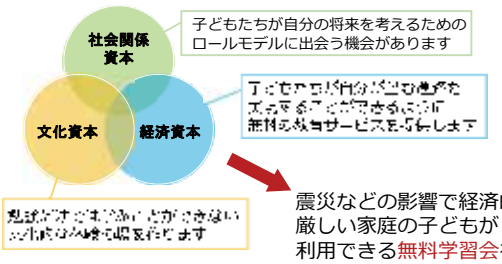
出典：国立大学法人お茶の水女子大学『平成25年度全国学力・学習状況調査(きめ細かい調査)の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究』
出典：東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センター2009年

CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　5

活動理念

我々はすべての子どもたちが夢と希望を持てる社会を実現します。

子どもの貧困解決に重要な3本柱



震災などの影響で経済的に
厳しい家庭の子どもが
利用できる無料学習会を運営

CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　6

発表概要

1. 団体紹介
   ➢活動経歴／子どもの貧困とは？／活動理念
2. 事業紹介
   ➢仙台での事業／南三陸での事業
3. 成果報告
   ➢仙台での成果／南三陸での成果／子どもの声

CONFIDENTIAL 7

事業紹介@仙台

無料高校受験対策講座『タダゼミ』	中学3年生を対象に受験指導やキャリア教育を行います。大学生を中心としたボランティアが指導案を作成し個人にあった習熟度別の手厚い指導を可能にしています。
無料大学受験対策講座『ガチゼミ』	高校生を対象に日々の学習をサポートしています。高校3年生には、納得のいく進路に進めるよう、ボランティアが一丸となって受験に向け指導しています。
無料高校受験準備講座『タダゼミJr.』	中学1・2年生を対象に、タダゼミへの前段階として数学や英語の指導を行っています。子どもたちの「わかった！」のため、ボランティアが工夫をこらして指導にあたります。

集団授業

個別指導

CONFIDENTIAL 8

事業紹介@仙台

無料英語教室『English Drive』	英語が苦手な子でも自然と楽しく英語を使えるようにするため、英文法や単語を学ぶ時間と主体性や協調性を養うようなゲームや演劇などのアクティビティの時間を用意しています。
自習室『ネクスタ』	学習習慣が身についていない子や家庭に学習環境が整っていない子も通っています。自習室ではボランティアが常駐しているため、学校の先生に聞けない質問を気軽に尋ねることができます。

E-Drive

自習風景

CONFIDENTIAL 9

事業紹介@南三陸

志津川中学校放課後学習支援	震災により町民が減ったことで統廃合を余儀なくされた学校もありました。放課後、スクールバスを待つまでの空き時間をキッズドアの学習支援で有効に活用する子が増えました。
南三陸出張学習会 ※今年度は実施していません	町内には塾や予備校がほとんどありません。南三陸で生活している子どもたちにも、受験勉強で躓いたところを克服できるように、毎週土曜日に学習会を開講しました。

志中放課後学習支援

New！
新事業『志翔学舎』

南三陸町が設立した学習支援センターをキッズドアが運営する事業です。地方創生事業の一環として復興の道を切り開いていきます。

CONFIDENTIAL 10

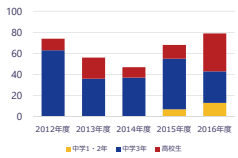
発表概要

1. 団体紹介
   ➢活動経歴／子どもの貧困とは？／活動理念
2. 事業紹介
   ➢仙台での事業／南三陸での事業
3. 成果報告
   ➢仙台での成果／南三陸での成果／子どもの声

CONFIDENTIAL 11

昨年度の成果@仙台

仙台での受益者数

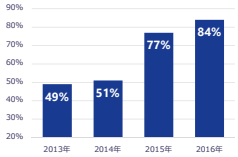


震災後、減少傾向にあった生徒数も直近2年では増加が著しい。

▼

事業の拡大に伴い生徒数は増加傾向に我々の支援が届いていない子どもたちは少なくないはずなので規模の拡大が必要

子どもの年間出席率



精神的な不安や勉強への意欲不足で学習会への出席率が低くなりがち。

▼

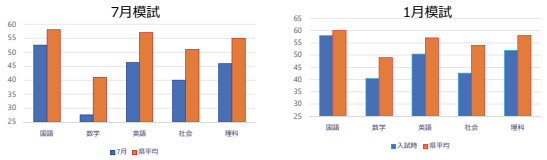
ボランティア講師が子どもに対して心温かいコミュニケーションをとることで子どもからの信頼感や学習意欲が高まり学習会への出席率も大幅に向上した。

CONFIDENTIAL 12

昨年度の成果@仙台

どんな子どもたちだって、機会を与えられれば学力は上がる！

タダゼミ生徒の学力推移と県平均の比較（2016年度）



県平均との差を5教科で14.9点も縮めることができた！

▼

経済的な理由で学習の機会が恵まれていなかった子どもたちが多く、
半年間という短い期間でも学力の差を埋めることは可能であった。

CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　13

昨年度の成果@南三陸

南三陸出張学習会

初めての試みで、何人集まるか不安でしたが15人の生徒が参加しました。ボランティアにとっても、仙台の活動では見えなかった部分が可視化され、今後の活動の参考になる部分がたくさんありました。

～子どもの声～

3年生になり受験生徒なった私たちを支えてくれたキッズドアの皆様方から、私はたくさんのことを学びました。
（中略）
もし理解できていなかったら、次の日までに解答より何倍も詳しいプリントを作ってきてくださいました。また、土曜塾では自分の能力にあわせて学習を進めていただいたので身につくのが早く、行くたびに自分の学力が上がっていることを実感できました。おかげさまで、私は自分の目標を達成することができました。3年間、本当にありがとうございました。

CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　14

昨年度の成果　仙台×南三陸

南三陸の子どもたちと仙台の学習会に通う生徒の交流会も行いました。

芋煮会 in 秋保

初めて出会った子どもたちも
大学生がファシリテートしながら
一緒に芋煮づくりを行いました。

食事のあとは「なぜ勉強するのか？」
というテーマでグループワークを行い、
日ごろの勉強の意味を再確認しました。

CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　15

子どもたちの反応

生徒それぞれの学力、個性、心情を見極めながら指導にあたることで
子どもたちをポジティブな思考へと導いています。

あの時起きた地震は一体何だったのか。建物を飲み込み、多くの人の夢や希望、そして命を奪いました。５年たった今も私の心の中にはたくさんの「なぜ」があり夢を持つことも忘れてしまいました。仙台に引っ越してあの時のことを封じ込んで、もっと頑張らなければいけないと思いました。でもそう思えば思うほどどんどん自信を無くしてしまいました。しかし、あることがきっかけで少しずつ自信が持てるようになりました。

それは「キッズドア」です。初めは入ることも躊躇していましたが、先生方と出会い、その思いは一気に吹き飛びました。一生懸命教えてくれる先生方は学校と勉強の楽しさや自分に自信を持つことを教えてくれました。

（中 略）

いつかキッズドアの先生方のように良いきっかけを作ってあげられる人になりたいです。

CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　16

最後に

～2016年度タダゼミ・ガチゼミ壮行式より～

今後とも、すべての子どもたちが夢と希望を持てる社会を目指し、
子どもたちを支え続けていきます。

ご清聴ありがとうございました。

CONFIDENTIAL　Copyright © 2017 NPO法人キッズドア All Rights Reserved.　17

子ども×大学生 in 陸前高田

陸前高田応援サークルぽかぽか
鈴木　優里
大西　花林

東北大学陸前高田応援サークル
ぽかぽか

死者・行方不明　1,757人
（人口24,246人に対して）

東北大学では2012年の夏から岩手県陸前高田市で活動するボランティアツアーを実施しており、そのツアーに参加した学生が結成したサークルが「ぽかぽか」です！現在では月に1度ほど、陸前高田市を訪問して活動しています！名前の通りあたたかい雰囲気で、よそ者の大学生だからこそできるボランティアをやっています(^^)/

（1）仮設住宅でのよりそい
多くの方が仮設住宅を退去しましたが、自宅再建等を待っている方々もいます。そうした方々に足湯や手芸でよりそいます。

（2）復興住宅のコミュニティ支援
復興住宅に移ると新しい人間関係が始まります。円滑にコミュニティ形成が進むように、自治会の活動等をお手伝いします。

（3）地域社会での活動
被災を免れた地域社会にも少子高齢化や新住民の受け入れ等の課題があります。伝統行事や祭等の地域の活動も支援します。

手芸
住民さんと折り紙などをしてコミュニケーションを取りやすくします。学生と住民さんだけでなく住民さん同士の交流も促します。

視察
陸前高田市の復興状況を知るために毎回行っています。まちのちょっとした変化にも気づくことが出来ます。

足湯
たらいにお湯を張り、そこへ足をつけてもらう。その間に学生が手もみをしながら会話をする。心身ともにリラックスできます。

子どもの学習支援
震災後遊ぶ場が少なくなった子どもたちと一緒に勉強をしたり、遊ぶことで日々のストレスを発散してもらいます。

伝統行事のお手伝い
高田町和野地区の伝統行事「動く七夕」「虎舞」に住民さんと参加し、盛り上げます！

学生の学び
- いろんな人と関わる面白さに気付いた
- ボランティアの今までのイメージが変わった
- 被災地の今を知ることが出来た

住民の方の声
- ボランティアの大学生が来ると元気になる
- 新しいまちを見るまで生きないとね
- 全然知らなかった人と仲良くなれて良かった
- これからどこへ行くかわからない

【ぽかぽかへのアクセス】
E-mail:　tohoku.poca2@gmail.com
Twitter: @poca_2
Facebook: @tohoku.poca2
Blog: http://s.ameblo.jp/poca-2/

本ポスターは、東北大学院教育研究科震災子ども支援室の協力のもと作成しました。2017.12.9

それでは東北大学陸前高田応援サークルぽかぽかの発表を始めさせていただきます。私は教育学部２年の大西花林と申します。工学部２年の鈴木優里と申します。よろしくお願いします。

まずぽかぽかという団体について説明させていただきます。ぽかぽかは、岩手県陸前高田市で活動しております。主な活動内容は仮設住宅・災害公営住宅での寄り添い活動、地域活動の支援、子ども支援、そして広報・情報発信などになっています。それでは、早速本日の内容の１つ目、「NPO 法人パクトと大学生との関係について」に移らせていただきます。NPO 法人パクトさんは、震災によって得られた人と人とのつながりによって平穏な日常を取り戻すことを理念に、2011 年７月に設立されました。そして現在、ボランティア活動の紹介、子ども支援、宿泊所の運営の活動を行なっています。その子ども支援の「みちくさルーム」という活動に、ぽかぽかは 2013 年から参加しています。活動の頻度は月に１回程度です。お手元の資料の方に 12 月実施予定と書いてあると思いますが、先週の土日に実施しましたので、今年度は６回活動して、今後２月に実施予定になっています。対象となる子どもは、陸前高田市小友町の子どもたちです。内容は、学習支援として宿題のお手伝い、居場所作り活動として大学生との遊びの時間を設けています。こちらは、参加してくれた子どもからもらったお手紙です。「みちくさのおにいちゃんおねえちゃんへ いくよ。楽しみにしているよ。どんな遊びするの。いっぱい楽しい遊びまってるよ。」とあります。わざわざ手紙をくれるという気持ちこそが活動の成果ではないかと思っています。

続いて、本日の２つ目の内容、「和野の子どもと大学生の関係について」に移らせていただきます。まず活動する理由についてなのですが、震災前から和野地区には子ども会があり、夏休みには勉強会を開いていたのですが、震災後子ども会は停止してしまったため、2013 年まで実施されていませんでした。しかし、また 2013 年から再開するということで、元々和野地区に震災ボランティアとして関わっていたぽかぽかがお手伝いをすることになりました。その後、和野の子ども会は活動が続かなくなってしまって、今では東北大学生だけで、和野の町内会の方に協力をいただきながら、子どもの学習支援を行なっています。活動の目的は、震災後に遊び場が減ってしまった子どもたちに思い切り遊ぶ機会を作ること、勉強や遊ぶことを楽しんでもらうこと、そして子ども企画と同じタイミングで行われる伝統行事に「あの大学生が参加しているなら自分も行こうかな」と思ってもらい、子どもたちに伝統行事に興味をもってもらうことが挙げられます。実際の活動は年に２回、伝統行事の行われる

8月と1月のタイミングに合わせて活動を行なっています。内容は、長期休みの宿題を見ることと、高田小学校というところの校庭などの屋外で遊ぶことです。ちなみに、来年1月の虎舞（とらまい）の際には、今年中心市街地にできたばかりの公園で、ペットボトルロケットを使って遊ぼうと考えています。実際に参加してくれた子どもからは、「楽しかった」「次いつくるの」などの声が挙げられる一方、これは伝統行事の虎舞の際のつぶやきなのですが、「僕のママは津波でいっちゃったの。本が好きだったの。」というつぶやきが聞かれました。このようなつぶやきは、長く付き合っている大学生だからこそ聞かれたのではないかなと思います。また、現地の子どもの保護者の方からは、「以前学習支援に来ていた子どもたちが高校受験を終え、全員無事に高校に入れました。これも大学生のおかげだね。今度大学生活の様子とかを高校生に話してほしいな。あまり大学進学が進路の1つになっていない気がするから。」という声がきかれました。そしてこの言葉から、次にお話しする企画が生まれました。

続いては今年の夏初めて行なった東京の中学・高校生そして高田の高校生、それから東北大学生の交流についてお話ししたいと思います。この東京の中学・高校生とは私の母校の生徒になります。私の母校の生徒は震災後「東北復興 study ツアー」ということでスタディすることをメインに毎年夏休みに陸前高田市を訪れていました。そこで、今年は私が「私たちぽかぽかと一緒にボランティアをしませんか」と提案して一緒にボランティアツアーを行うことになりました。今回のこの交流企画というのはそのボランティアツアーの中で行った企画です。その交流の目的はこのように設定しました。

東京の中学・高校生の目的は次の3つです。1つ目は同世代の高田の高校生から震災の体験を聞くことによって大人の人から聞くよりももっと身近に体験を聞くということ。2つ目は普段東京でずっと生活をしている彼女たちは、なかなか外での生活を知ることはないので、高田での生活について知ってもらうこと。3つ目は東京で交流する機会の少ない東北大生と交流をしてもらうことです。

そして高田の高校生の目的は次の3つです。震災の体験を東京の中学・高校生に伝えるということ。そして普段交流することの少ない同世代の東京の中・高生と交流する機会にすること。さらに、先ほどお父さんからの声にあったように東北大生と交流することによって大学進学を進路選択の候補の一つにすることです。

交流の内容は、東京の中学・高校生と高田の高校生、東北大学生の混合グループを5グループ作り、そのグループ内でざっくばらんにトークをしてもらうというものです。トーク内容とし

ては、彼女たちが辛くならない範囲で震災当時の体験を話してもらったり、今の陸前高田について思うこと、これは先ほど藤室先生が少しおっしゃっていましたが、「今の陸前高田は前の陸前高田より良いところはない。」というような話を聞くことが出来ました。そして、他には陸前高田の将来、もしくは自分の将来について考えていることを話してもらいました。また、雑談として高田の高校生から東京の高校生に「学校帰りに制服でゲームセンターとかに寄り道するんですか？」という質問もありました。

このような企画の中で高田の高校生からはこのような声を聞くことが出来ました。「こういう機会がないと震災について話すことはない。友達ともなんとなく震災の話はしないんだ。」とか、「今は復興の状況を知ってもらいたい。頑張っていることを知ってもらいたい。」対して東京の中学生からは「同世代の方から震災についてありのままの話を聞くことが出来て震災のことが身近に感じた。もし、自分の身に起きたら…と考える機会になった。」そして、高校生からは「同い年であることが恥ずかしくなるくらいに将来のやりたいことを具体的に語ってくれてよかった。」という声が聞けました。この交流が3者それぞれにとって良い体験になったのではないかと思っています。ちなみに、このつながりから我々のぽかぽかメンバーは、秋に高田高校の文化祭にお邪魔して話を聞いた高田高校の生徒に会いに行くということもしました。

これらの企画を行う中で私たちが気づいた高田の子どもを取り巻く環境の特徴はこのようなものがあげられると思います。今は中心市街地が出来てきてその中に公園が建設されているのですが、震災当時は津波ですべてを流され、学校の校庭には仮設住宅が建っている、公園はまだ建設途中のものがあるということで遊び場がないということ。また、少子高齢化という大きな問題としても震災によっても、従来のコミュニティが崩壊しているため、子ども同士のつながりがバラバラになり、遊び相手がいないということ。そして、近くに大学がないということ。陸前高田に近い大学は東北大学と岩手大学がありますが、どちらも車で３時間弱かかる所にあるので、大学進学する場合にも陸前高田を出なければならない、もしくは就職で市外に出なければならない人がいるため私たちのような大学生世代がいないということがあげられます。

これらの状況を踏まえて陸前高田の子どもたちと大学生の関係に基づいて大学生の役割はこのようなものがあげられると思います。まず、子どもたちにとっては普段出せない気持ちを受け止めてくれる、思いきり楽しめる居場所になっているということ。次に、家族でも先生でもない、だけど定期的に会える新しく特別な関係であるということ。そして、大学生と

いう進路選択のモデルになっているということです。

そして、東京の中学・高校生という被災しなかった子どもと大学生の関係から大学生の役割は東日本大震災の被害に遭った地域の大学として、伝える、知ってもらうための役割があると思います。そして、ボランティアの新たな形を見せる役割もあると思います。普通、ボランティアというとゴミ拾いなど結果が目に見えるものを想像しがちですが、私たちがやっているのは結果が目に見えない、今まで身近に感じなかったボランティアの形を見せる役割があるのではないかと思います。

我々はこれからも子どもだけではなくていろいろな地域の方々とのつながりを保ちながら陸前高田市で活動していければと思っています。

子ども×大学生　in　陸前高田

東北大学陸前高田応援サークル　ぽかぽか
工学部2年　鈴木優里
教育学部2年　大西花林

ぽかぽか　について

○仮設住宅・災害公営住宅での寄り添い活動
○地域活動の支援
○子供支援
○広報/情報発信
など

陸前高田市

1. NPO法人パクト×大学生
2. 和野の子ども×大学生
3. 東京の中学・高校生×
   高田の高校生×大学生

1. NPO法人パクト×大学生
2. 和野の子ども×大学生
3. 東京の中学・高校生×
   高田の高校生×大学生

NPO法人パクト×ぽかぽか

NPO法人パクトの基本理念

「震災によって得られた“人と人とのつながり”という財産を大切にし、これからもありとあらゆる人と人をつなげることで、住民一人ひとりが平穏な日常を取り戻し、希望に満ちた地域社会の実現を目指します。」

子供支援の
「みちくさルーム」に
2013年から参加

ぽかぽかの活動

○頻度：月に一回程度
(今年度5・6・7・9・11・12月に実施/2月実施予定)
○対象：陸前高田市小友町の子ども
○内容：

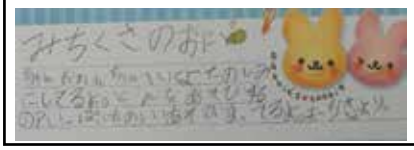
学習支援
(宿題のお手伝い)

＋

居場所づくり
(大学生と遊ぶ)

子どもの声
（手紙をもらいました！）

みちくさのお兄ちゃんおねえちゃんへ
いくよ。楽しみにしてるよ。どんなあ
そびするの？いっぱいたのしいあそび
まってるよ。



---

1. NPO法人パクト×大学生
2. 和野の子ども×大学生
3. 東京の中学・高校生×
   高田の高校生×大学生

---

1. NPO法人パクト×大学生
2. 和野の子ども×大学生
3. 東京の中学・高校生×
   高田の高校生×大学生

和野の子ども×大学生

なぜ活動をするのか？

①和野の子ども会再開のお手伝い（2013年～）
　現在は子ども会はなくなり、学生の子供支援のみ行う
②震災後、遊ぶ機会の減ってしまった子どもに思いきり遊べる機会を
③大学生と宿題・遊びをすることを楽しんでもらう
④伝統行事への若者の参加が減ってきているため、「あの大学生が来ているなら、自分も祭りに参加したい！」と思ってもらう

ぽかぽかの活動

○頻度：年に2回。和野の伝統行事の時期に合わせて
　→8月の「動く七夕」&1月の「権現舞（虎舞）」
○対象：陸前高田市高田町和野地区の子ども
○内容：

学習支援
（宿題のお手伝い）

大学生と遊ぶ

＋

子どもの声・親御さんの声

楽しかった～～
またね！！

次、いつ来る？？

僕のママは津波で行っちゃったの。本が好きだったの。

子どもたち

以前、学習支援に来ていた子どもたちが高校受験を終え、全員無事に高校に入れました。これも大学生のおかげだね。
今度、大学生活の様子とかを高校生に話してほしいな。あまり大学進学が進路の一つになっていない気がするから。

高校生のお父さん

1. NPO法人パクト×大学生
2. 和野の子ども×大学生
3. 東京の中学・高校生×
高田の高校生×大学生

1. NPO法人パクト×大学生
2. 和野の子ども×大学生
3. 東京の中学・高校生×
高田の高校生×大学生

東京の中学・高校生×高田の高校生×大学生

【東京の中高生】
・同世代の高田の高校生震災体験について話を聞き、知る
・高田での生活について知る
・東北大学生との交流

【高田の高校生】
・震災の経験を東京の中学高校生に伝える
・普段交流の少ない同世代の東京の中学高校生と交流する機会にする
・東北大学生との交流により“大学進学”を進路の選択肢に

活動内容

東京の中学・高校生、高田の高校生、東北大学生の混合グループでざっくばらんにトーク

陸前高田の将来について
今の陸前高田に対して思うこと
自分の将来について
震災当時の体験（言える範囲で）
雑談（東京の高校生の生活って？）

参加者の声

こういう機会がないと震災について話すことない。友達ともなんとなく震災のことは話さないんだ。
高田の高校生

今は復興の状況を知ってもらいたい。頑張っていることを知ってもらいたい。
高田の高校生

参加者の声

同年代の方から震災についてありのままの話を聞き、震災のことがとても近くに感じた。もし自分だったらどうするだろうと考えた。
東京の中学生

同い年であることが恥ずかしくなるくらい将来のやりたいことを具体的に語ってくれた。
東京の高校生

陸前高田の子ども

遊び場がない！

・津波ですべてが流された
・校庭に仮設住宅が建てられている
・公園等の施設も建設途中

遊び相手がいない！

・子どもの数が減少している
・震災により従来のコミュニティが崩壊

周りに大学生世代がいない！

・近くに大学がないため、大学進学する場合は陸前高田を出なくてはならない
・働く場も少ないため就職で市外に出て行ってしまう人も

陸前高田の子どもと大学生の関係

子どもたちにとって、普段は出せない気持ちを受けとめ、思いっきり楽しめる“居場所”に

家族でも先生でもないでも定期的に会える“新たな・特別な関係”

大学生という進路選択のモデル

被災しなかった地域の子どもと大学生の関係

東日本大震災の被害に遭った地域の大学として“伝える・知ってもらう”という役割

“ボランティア”の新たな形を見せる

教育学部生から見た被災地の子どもたち

インクストーンズ
沼津　大嗣
桐原　朋哉

東北大学インクストーンズ

活動概要

私たち東北大学インクストーンズは、宮城県石巻市を中心に、地域に寄り添いながら、子どもやお年寄りといった社会的弱者を手助けし、また生み出さないための**コミュニティ支援**や**地域支援**を行っています！

活動内容 Part1

仮設住宅や復興公営住宅では**足湯カフェ**や**イベント**を開催し、波板地区ではその時々の**ニーズに合わせた活動を**しています。

☆大森第4仮設/飯野川校仮設☆

仮設住宅の**草取り**をしたり…

石けんを作ったり…

流しそうめんもやりました！！

☆門脇復興公営住宅☆

春の**押し花**づくり

足湯しながら傾聴活動※

☆波板地区☆

波板地区は**限界集落**ですが、住民の方は集落維持に向けた活動をしており、私たちは様々な形でそれを支えています！

※傾聴活動とは…相手の話を真摯に受け止め、その背景や感情を理解しつつ、相手の心のケアをする活動。

活動内容 Part2

私たちは実際に現地でボランティアをしているだけでなく、被災地の**イマを学ぶ**活動もしています！！

←遺族の会の方に大川小学校を案内していただいている様子。

↓門脇地区で語り部さんのお話を伺っている様子

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

それでは東北大学インクストーンズの発表を始めさせて頂きます。発表者は私教育学部2年沼津、そして同じく教育学部3年の桐原で行わせて頂きます。

私たちは教育学部生から見た被災地の子ども達というタイトルのもと、私たちの日々の活動、そして教育学部生の視点から見た子ども達への震災の影響について説明させて頂きます。

目次です。私からは東北大学インクストーンズについてそして被災地、そして仮設住宅に暮らす子ども達について説明させて頂きます。まずは私たち東北大学インクストーンズについて少々説明させて頂きます。

私たち東北大学インクストーンズは石巻市旧雄勝町を中心に石巻市の仮設住宅そして復興公営住宅にてイベント運営そしてお茶会や手芸を通した傾聴活動を行っています。上の写真は足湯を行っている時の写真です。

このように足湯を行いながら被災地の方々とお話をして心のケアを行うといった活動をしています。また下の写真は仮設住宅にて押し花を使った絵を作ろうという企画を行った際の写真です。このように足湯そして手芸といった活動を通して住人の方々に寄り添った支援を行っています。それでは仮設住宅について説明させて頂きます。

これは私たちが関わっている仮設住宅の現状についての説明なのですが、震災から約6年と9ヶ月といった長い時間が経過したことにより入居率は約20パーセントにまで減少しました。そしてその減少した住人の大半を高齢者の方が占めています。

そしてここでは「動ける世代」と書かせて頂いたのですが、イベントなどを行う際の例えばテントの設置、重いものを運ぶなど体力のある世代、そしてそもそもの企画を運営しようとする活力のある世代が不足しています。このため住人同士の関わりが減少し、コミュニティの弱体化が現在進んでいます。わかりやすく図にしてみました。震災から時間が経過することにより住人が減少します。そして住人が減少したことにより、先ほど説明させて頂いた世代が不足、そして世代が不足することにより行事が減少し、コミュニティが弱体化してしまう、こういった負のスパイラルが今、仮設住宅で起きています。この負のスパイラルを断ち切るため、私たちは、上は草刈りをしている写真なのですが、労働力として被災地の仕事を手伝わせて頂いたり、また、下は石巻市の名物の石巻焼きそばというものがあるのですが、その焼きそばの焼き方講習会イベントを開いて住人の方々と交流し、また住人の方々同士の

交流する機会を増やすといった活動を行いました。

今までは仮設住宅の現状についてお話しさせて頂いたのですが、ここからは仮設住宅に住む子ども達に焦点を当てていこうと思います。ここに書いているのは私たちが活動を通して見た子ども達の様子なのですが、実際に子ども達同士で遊ぶ場面を見ることが出来ませんでした。

この仮設住宅に住む子ども達は実は二人しかおらず、その二人も兄弟ということで兄弟同士で遊ぶという様子は何度か見たことがあるのですが、全くの他者同士で遊んでいるという様子は一回も見ることが出来ませんでした。そこから他者と関わる機会が圧倒的に少なくなっていること、そしてまた、この仮設住宅は少し離れた位置にあるため地理的要因によって地域の子どもたちとはある意味隔たれた状態にある、こういったところが問題ではないかということになりました。

では、子ども達にどのような問題があるか、私はまず一つとして同世代とコミュニケーションを取る機会が少ない、これが一番の問題だと思いました。先ほど説明させて頂いた子ども達はお兄ちゃんが小学校低学年、そして弟は未就学児なのですが、彼らはこれから成長していく上でグループ形成を行っていく時期に入っていきます。これは教育学の言葉で、グループ形成を行う時期をギャングエイジという言葉で説明するのですが、ギャングエイジと呼ばれる時期に集団行動を行うことが他の子ども達と比べて少ないため、これからも集団行動を行う上で支障が生じてしまう、さらに小学校を卒業した後、中学校など新しい場に出た際に、集団でふれあうという機会が少ないというこから人間関係を育む機会が少ない、このことから友人関係を育む上で支障が生じてしまうのではないかと考えました。

二つ目の問題としてコミュニティの変容とその影響ということが考えられると思いました。この仮設住宅は実は平成 30 年に入居期限が終了し、集約されることがすでに決定されています。これに伴って住人の方々は新しい住宅を建設する、もしくは別の仮設住宅、復興公営住宅への移動を余儀なくされています。このため、子ども達も同様に引っ越しをしなければならないので震災後仮設住宅で育まれたコミュニティを離れてまた新しい移転先でコミュニティを形成し、それに順応していかなければなりません。このコミュニティの順応の際にストレスを感じてしまうということが問題点として考えられました。

ここで時間軸を用いて子ども達に震災がどのような影響を与えたのかについて説明させて頂きます。まず現在の所を見て頂くと 2017 年現在、先ほど述べたように人間関係において子ども達に問題が生じている、そして、「横と縦のつながりに支障が出る恐れ」とここでは書かせて頂いたのですが、横、つまり同世代間との交流が少ない、横と横のつながりが薄い、縦のつながりということで仮設住宅内は高齢者の方が多く、高齢者と子どもの間、例えば中高生といった若者が圧倒的に少なくて縦との関係が持てない、これらが問題であると感じました。また過去にさかのぼってみると、2011 年震災が発生した当時、彼らは小学生と未就

学児なので震災後に生まれた子ども達なのですが、震災が発生した後、仮設住宅という特殊な環境下に生まれ、そこでずっと育ち続けたというのは、やはり大きな影響を受けたと述べることが出来ると思いました。またこれから先、将来、未来に目を向けると、先ほど述べたように中学校など新しい場に出た際に人間関係を築くのが難しいといったことから未来での人間関係の形成、そして居住環境変化によるストレスを受けることが想定されるため、今後の成長における影響が大きいと言えると感じました。

ここから多くの方は東日本大震災の復興はすでに終わったもの、もしくはもうすぐ終わるだろうと考えている方が多いと思っているのですが、こうしてみると東日本大震災というものは過去そして現在さらには未来においても子ども達に大きな影響を及ぼすものであり、まだまだ震災から復興したとは言えない、大きな存在である、と言うことが出来ると感じました。

それではそのような子ども達に対して私たちに何が出来るのかを考えた際にまず一つとして住人の世代間、そして同世代間の交流を促す潤滑油のような存在になれるのではないかと考えました。この写真は夏休みの夏祭りを行った際の写真なのですが、私たちが流しそうめんを出店した際に仮設住宅以外の子ども達も多く参加して頂いて、その子ども達が交流するといった光景を見ることが出来ました。

このように私たちが活動を行うことによって、子どもと子どもの交流を生むことが出来る、そこから潤滑油的な存在になれるのではないかと考えました。またこの流しそうめんをしている際に住人の方々が子ども達の様子を見て喜んでいらっしゃるという光景を見て、子どもと子どもといった同世代間だけではなく、子どもと大人といった世代間の交流も促すことが出来ると感じました。そして二つ目は集約先の地域に継続的に関わることが出来ると感じました。集約先の地域に積極的にそして継続的に関わることによって子ども達の居場所になることが出来る。新しいコミュニティに移動した際にもしも子ども達が新しい環境になじめなかった場合、どうしても心理的負担が大きいと思われます。そのためコミュニティの外に居場所のような存在を作って子ども達が上手くなじめなくても、居場所があると感じられる場所を作ることが子ども達の成長に役立つのではないかと考えました。このように交流を促したり、居場所を作ったりするために今後も活動を続けていきたいなと感じています。

次は私、桐原の方から、他の団体やこの後発表する団体とは結構ベクトルが変わりますが、ある被災地における

小学校について話をしたいと思います。

被災地におけると書きましたが、ここでは被災した小学校という捉え方ではなく、過疎地域や持続性が危ぶまれている地域における小学校と捉えて頂いた方が理解しやすいと思います。石巻市立雄勝小学校についてお話をしますが、取り上げた理由は、団体として旧雄勝町を中心に活動しているため、この小学校に団体として関わってはいませんが、地域の方とお話しする中で何度かお話を伺うため、話せると思ったこと、もう一つは雄勝小学校に勤める先生の話を伺ったことがあったためそのつながりから面白いのではないかと思い選択しました。こちらが今の雄勝小学校の写真になっています。雄勝中学校が併設校としてありますが一貫校ではありません。単純に同じ敷地に小学校と中学校があるという場所なのですが、この校舎が今年の夏にようやく完成して、今この学校で授業が出来ています。

この学校が出来る以前は隣の河北町の中学校に間借りをしていたり、高校の校庭に仮設校舎を建てて授業をしていたので、ようやく自分たちの学校で教育活動が出来ているという状況になっています。雄勝地区とはという話をすると、ここにいる方の多くは宮城県の方だと思われるので、ご存じとは思いますが、石巻市の北東部にある漁村で震災時に町の中心部の9割が津波に流されてしまうという甚大な被害を受けました。それによって人口が4366人から1730人に、これは住民基本台帳のデータのため、実際はもっと少ないと言われていますが、凡そ6割の減少となりました。これは例えば女川町等の他の石巻市の地区に比べて圧倒的に高い数値になっており、地域としての持続性が危ぶまれていると言われています。人口減少のあおりを受けて小学校の児童数も105名から20名程にまで減少し、その中で、チーム雄勝で子どもを育てていることを伺いました。チーム雄勝とは学校と家庭と地域が一体となって児童を育てることを指し、学校、家庭、地域が一体になるということは、最近の言葉で言う、コミュニティスクールのように進めているということでした。

その背景には宮城県が推し進めている協働教育という教育政策が一つあり、もう一つは雄勝の幸せのために何が出来るかというのを先生と子どもが考え、そのためには地域を知らなければならないためこのような教育を進めているということでした。

これについては次のスライドに続く子ども達にとっての意味というところでも説明していきます。子ども達にとっての意味を考えると、雄勝町は被害は大きく復興した未来が描きにくい地域で、藤室先生がおっしゃったように人口減少社会における復興の意味を捉え直さな

ければならないということにも関連すると思われますが、その地域で生まれた子ども達からすれば、雄勝というのはかけがえのない故郷であり、その故郷をよくするために、そこに暮らす人々のために何が出来るのか考えることは当然だと思われます。しかしこれは学校教育だけでは出来ないため、地域に出て地域とふれあうことで初めて可能となり、初めての学びを得て、それによって子ども達が自分の将来を考えるきっかけを得ることになると考えています。これについては被災地というとらえ方だけではなく、人口減少、少子高齢化、持続が危ぶまれている地域のこれからを支えていく人材を育むという意味で学校と家庭と地域が一体となって教育を行う雄勝小学校の取り組みは有意義なものとなると考え、紹介させて頂きました。ベクトルが違うため理解しづらかったかも知れませんが、質問があればまた後でお願いします。ご静聴ありがとうございました。

教育学部生から見た被災地の子どもたち

教育学部2年　沼津大嗣
教育学部3年　桐原朋哉

目次

1. 東北大学インクストーンズについて
2. 仮設住宅に暮らす子どもについて
3. 被災地における小学校について

東北大学インクストーンズについて

東北大学インクストーンズについて

主に石巻市の仮設住宅や復興公営住宅でイベントや傾聴活動を行っています！！

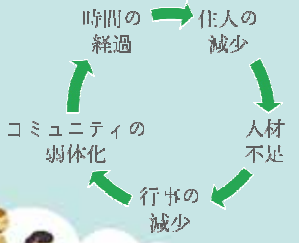
詳しくはポスターをご覧ください！！

仮設住宅に暮らす子どもについて

①　仮設住宅の現状

・震災から時間が経過したことにより、入居率は約20パーセントにまで減少
・入居者の大半を高齢者が占める
・“動ける世代”が不足
・コミュニティの弱体化

負のスパイラル



仮設の子どもの様子

・実際に子ども達同士で遊ぶ場面を活動中に見ることがなかった

・他者と関わる機会が少ない

・地理的要因により、地域の子ども達とは隔たれた状態

② 仮設住宅の“子ども達”が抱える問題

・（１）同世代とコミュニケーションを取れる機会が少ない

・グループ形成を行う時期に、集団行動を行う機会が減る

・集団行動を行う上で苦労する恐れがある

・中学校など新しい場に出た際に、友人関係を築く上で支障が出る場合も

・（２）コミュニティの変容とその影響

・平成３０年度に入居期限が終了、これに伴い、住人達は新たな住宅の建設、別の仮設住宅、復興公営住宅への移動を余儀なくされる

・子ども達も引っ越しなければならず、震災後に生まれたコミュニティを離れ、新しくできるコミュニティに慣れなければならない

③時間軸で見る震災の影響

・2011年（生まれた頃から仮設住宅という環境下に置かれる）
・2017年現在（人間関係　横と縦の繋がりに支障が出る恐れ）
・未来（将来の人間関係、居住環境変化によるストレス）

④ 私たちにできること

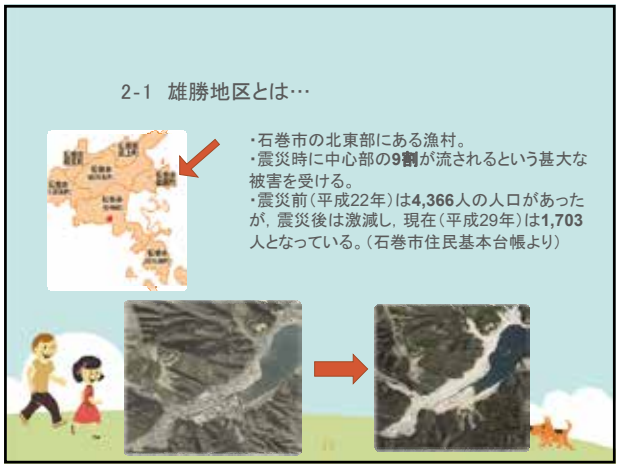
・住民の世代間、同世代間の交流を促す“潤滑油”になる

・集約先の地域にも継続的に関わる

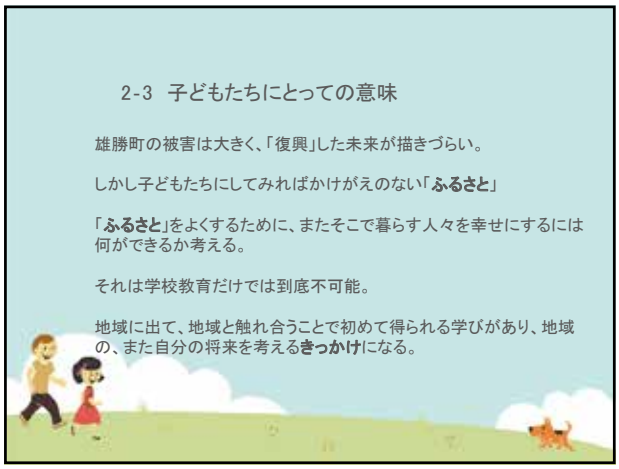
→子ども達の“居場所”の一つに

被災地における
小学校について
～石巻市立雄勝小学校～

石巻市立雄勝小学校
（雄勝中学校　併設）
←今年の夏に開校した
新校舎


2-1　雄勝地区とは…
・石巻市の北東部にある漁村。
・震災時に中心部の9割が流されるという甚大な被害を受ける。
・震災前（平成22年）は4,366人の人口があったが，震災後は激減し，現在（平成29年）は1,703人となっている。（石巻市住民基本台帳より）

2-2　地域に根ざした教育を…
震災後、児童数は105名⇒20名ほどにまで減少。
そんな中でも、「チーム雄勝」で子どもを育てている。
学校、家庭、地域が一体となって児童を育てること。
1、「みやぎの協働教育」
2、雄勝の幸せのために


2-3　子どもたちにとっての意味
雄勝町の被害は大きく、「復興」した未来が描きづらい。
しかし子どもたちにしてみればかけがえのない「ふるさと」
「ふるさと」をよくするために、またそこで暮らす人々を幸せにするには何ができるか考える。
それは学校教育だけでは到底不可能。
地域に出て、地域と触れ合うことで初めて得られる学びがあり、地域の、また自分の将来を考えるきっかけになる。

ご清聴ありがとうございました。

いわきで出会った子どもたち

～学生ボランティアにできることは何か？～

福興 youth

中澤　　恵

大庭　佳乃

東北大学 福興youth

<活動紹介ポスター>

私たちは、東北大生有志によるボランティア団体です。2013年9月に、当時在学していた福島県双葉郡富岡町出身の学生が発起人となり設立されました。設立当初からこれまで、東北大の全学生を対象とした「福島ボランティアツアー」「福島スタディツアー」を企画し実施してきました。

○ボランティアツアー

◎福島県いわき市平薄磯地区

いわき市平薄磯地区は、いわき市沿岸部の、塩屋埼灯台の北に広がる地区です。
東日本大震災時には津波により甚大な被害を受け、多くの方が亡くなりました。

～活動内容～

・災害公営住宅での「足湯カフェ」の実施
・地域の神社の例大祭への参加
・児童クラブでの遊びボランティア　など

左：「足湯カフェ」の様子（2017年5月）　右：薄磯神社例大祭の神輿（2017年5月）

◎永崎団地・下神白団地

市営住宅永崎団地は津波で被災された方々が入居されている災害公営住宅で、県営下神白団地は原発事故の影響で避難されている方々が入居されている復興公営住宅です。この両団地は隣同士にあります。

～活動内容～

・両団地住民対象の「足湯カフェ」の実施
・子どもを対象とした「子ども企画」の実施
・団地自治会主催行事への参加　など

左：「子ども企画」の様子（2017年6月）

右：団地の婦人部主催の花植えに参加した（2017年6月）

◎福島県双葉郡富岡町

富岡町は、福島県浜通りのほぼ中央に位置する町です。町全域が東京電力福島第一原子力発電所から半径20km圏内にあるため、2011年より長い間町全域が避難指示区域に指定されていましたが、2017年4月には町の一部の避難指示が解除され、帰還が始まりました。

～活動内容～

・いわき市泉玉露仮設住宅でのお掃除ボランティア
・富岡町社会福祉協議会主催のイベントへの参加　など

左二枚：富岡町社会福祉協議会主催の蕎麦まつりにて、ボランティアを行った時の様子（2017年11月）

○スタディツアー

震災や原発事故に関心のある東北大生に向けて、実際に福島の各地を訪れ現地の方にお話を伺いながら学ぶスタディツアーを企画・運営しています。2017年度は、4月には双葉郡富岡町を地元の語り部さんに案内してもらいながら視察する「富岡スタディツアー」、9月には相双地区の視察を中心に、福島県庁の方や弁護士さん、東京電力福島復興本社の方などにお話を伺う「福島の"今"を知るスタディツアー」を実施しました。

上：富岡町視察・バリケードの向こう側は今なお放射線量が高い帰還困難区域（2017年4月）

下：南相馬ソーラー・アグリパークの視察（2017年9月）

福興youthは、活動の様子をHP、Twitter、Facebookで更新しています！是非覗いてみてください(^^♪

ホームページQRコードはこちら！

本ポスターは、東北大学大学院教育学部研究科震災子ども支援室の協力のもと作成しました。

みなさんこんにちは。私たち東北大学福興 youth からは、「いわきで出会った子どもたち～学生ボランティアにできることは何か？～」と題しまして、発表をさせていただきます。

まずはじめに、簡単に私たちの自己紹介をさせていただきます。

私は、東北大学教育学部３年の中澤恵と申します。仙台白百合学園高校の出身で、今日は母校の先生や後輩たちも来ているので少し緊張しています。よろしくお願いします。

同じく東北大学文学部２年の大庭佳乃と申します。私は島根県出身で、震災当時も島根に住んでいたのでほとんど影響がなく、大学進学の際に初めて東北へ来て、このような震災に関わるボランティアを始めました。今日はよろしくお願いします。

ではまず、私たち「福興 youth」の普段の活動を少し紹介します。私たちは、主に福島県のいわき市と富岡町で活動しています。主な活動としては、東日本大震災の津波の被害を受けた方々や、東京電力福島第一原子力発電所事故の影響により避難をされている方々が入居されている、仮設住宅や公営住宅にお邪魔して、カフェ活動を行ったり、自治会のイベントのお手伝いをしたりしています。こちらがカフェの際の呼びかけのチラシと、カフェの様子です。このような活動を通して、部屋にこもりがちな住民の方が家から出るきっかけになれば、また、住民さん同士が知り合う場になればと思い、活動しています。詳しくは、活動報告のブログや、ツイッター・フェイスブックなどの SNS を通して紹介もしていますので、よろしければぜひご覧ください。

今日の発表内容は、大きく分けてこの３つです。まずはじめに、私たちが活動させていただいているある公営住宅団地で、子どもたちと関わる中で気になったことについて、事例紹介のような形でお話させていただきます。その次に、それらを踏まえてこれまでその団地で取り組んできたことと、今後取り組みたいと考えていることについてお話させていただきます。

それではここからは、気になった子どもの言動と学生の対応、感想を４つ報告します。

まず１つ目です。ある日の活動で、学生と子どもの間でこんなやりとりがありました。

＜昼ごはん食べた？＞

「ううん、食べてない。家に誰もいないし。お母さん、２時か３時まで帰ってこないから。」

ある週末に、学生が活動先の団地に昼前に到着した際に、子どもがやってきたので、「お昼ご飯食べた？」と聞くと、このような返事が返ってきました。その子は、学生が昼食を食

べている間も外で遊んでいて、結局夕方まで家には帰らずに遊んでいました。他にも同じように、昼前から遊びに来て夕方までずっと遊んでいる子どもが２～３人ほどいました。

学生の対応としては、お腹がすいているようだったので、お昼ご飯を分けるべきか迷いましたが、結局分けることはせず、子どもたちの遊びを見守りました。

学生の感想としては、お腹がすいたままでいさせるのもかわいそうとも思いましたが、私たちが持ってきたご飯をあげることの安全面の不安や、もしあげたということをその子がお家に帰っておうちの人に話した時に親御さんがどう感じるかということを考え、結局ご飯をあげることはしませんでした。しかし、週末はいつもこんな感じなのかと想像すると少し心配になりました。

そこで、改めて、学生としてできること、してあげられることは何なのだろうと思いました。昼食を食べる・食べないは家庭によって違うのかもしれないけれど、もしそこにいろんな家庭の事情が絡んでいるとしたら、私たちはそこにどこまで踏み込んでいいのだろうかと思いました。

２つ目は、活動の終わりの、学生と子どものこんなやりとりです。

＜帰り際に突然泣き出してしまい＞

「もっと遊んでいたい。いつも遊んでくれる相手がいない。帰っちゃうのいやだ。」

学生とずっと楽しそうに遊んでいた一人の子が、学生が帰り支度を始めた時に突然泣き出してしまいました。ずっと黙って泣きじゃくっていたので、最初はみんなその子が何で泣いているのかわからなかったのですが、しばらくして泣き止んで落ち着いてから話を聞くと、このようなことを言ってくれました。

学生の対応としては、「また必ず来るからね」と声をかけました。

学生の感想としては、まず泣いている理由を話してくれたことが嬉しかったし、聞けてよかったと思いました。また、日頃抱えていた寂しさやストレスをぶつけてくれたのかなとも思い、きちんと受け止めてあげたいと感じました。

この言葉から、子どもにとって学生のような遊び相手の必要性を感じ、定期的に遊びに来れたらと思いました。しかし、私たちは毎週これるわけではないし、その子が日頃寂しさやストレスを抱えているとしたら、私たちが遊びに行くことだけでそれを根本的に解決できるわけではないとも感じました。

また、３つ目に、これは発言というわけではないのですが、子どもたちが遊んでいる様子でも少し気になることがありました。

＜小学校中学年・高学年の子どもたち＞

「おんぶして！」「だめ、わたしがする！」／「(学生の名前を呼び捨てで呼ぶ)」パンチ！

小学校中学年以上の、ちょっと大きい子どもたちでも、学生に対しおんぶをせがんだり自分の思う通りにいかないとぐずるなどの様子が見られ、年の割に、やや甘え方が幼いように感じました。

また、初対面の学生にも物怖じせずものすごくなついてくる様子で、時にはやや暴力的な甘え方も見られました。

学生の対応としては、基本的に、子どもたちに求められるがままに遊んでいる状態です。特定の子にかかりきりにはならないように気をつけて接しています。

学生の感想としては、まず、自分に注目してほしいというようなアピールのある子が多いように感じました。また、特に、少々暴力的な発言や行動に対して、どこまでは受け止めて、どこからは注意するべきかわからないという声もありました。

考えすぎかもしれませんが、もしかしたら普段思い切り甘えられる相手がいないと子どもたちが感じているのかもしれないと思い、私たちの活動の中では、子どもたち一人一人にきちんと向き合っていきたいと思いました。

4つ目、最後になりますが、団地のこどもたちに対して、団地の大人の人たちからはこんな声が上がる場面がありました。

＜カフェの場で、子どもが騒いでいて＞

「子どもがうるさい。」「なんでこんなところに子どもだけで来ているのかしら。」

集会所でカフェを行っていた際に、子ども達が室内で遊んでいるのがやかましいという声が聞かれました。特に、親が付き添わず子どもだけで集会所に来ている子に関して、安全面の心配だけでなく、「親がちゃんと面倒を見ていないのだ」というような意見も聞かれました。

学生の対応としては、その後、自治会の方からの要望もあり、カフェの際は大人がくつろぐ部屋と子どもが遊ぶ部屋を分けるようにしました。

学生の感想としては、確かに団地の大人の方々の意見の通り、「室内では騒がない」などのルールを作る必要があると思いました。子どもだけで来ている子に関しては、安全面の心配はあると思う一方で、カフェがそのような子にとっての居場所になれたらという思いもあり、複雑な気持ちでした。

カフェでは大人の人にはゆっくりくつろいでもらいたいし、子どもにはのびのびと思い切り遊んでほしいと思っているので、カフェが大人だけ、子どもだけではなく、両方にとって居心地のいい場所にするに

は、どうしたらいいだろうかと考えるきっかけになりました。

これらを踏まえて、これまでこの団地で工夫して取り組んだことは、主に２つあります。

１つ目は、先ほどもお話したカフェについてですが、カフェでは、大人と子どもの過ごす部屋を分け、子どもには「室内で過ごす時は静かに遊ぶ、室内では走らない」などルールを徹底させて実施しました。その結果、部屋を分けてから今まで、子どもが騒がしいといったクレームはなく、お互いにゆっくり過ごしてもらえているのだと思います。

また、２つ目は、新しい取り組みとして、「子ども企画」を実施しました。

この企画の目的は、子どもがのびのびと遊べる場をつくることと、学生も子どもに対してしっかり時間をとって向き合えるようにするためです。「子ども企画」は未就学児から高校生くらいまでに対象を絞った企画で、これまでには、まだ１回しか実施したことがないのですが、学生と一緒に宿題をする時間「勉強タイム」や、自由遊び、みんなで行うレクリエーションなどを実施しました。この企画を実施して、学生からは、「カフェの時よりも子どもたちと遊んだりお話をしたりすることに集中できた」との声が聞かれました。また、参加してくれた子どもたちも、とても楽しそうにしており、「次はいつ来るの？」などと声をかけてくれました。

最後に、今後この団地で取り組んでいきたいことについて話します。

まず、この団地に対して学生が抱いている願い、ビジョンのようなものは２つあります。１つ目は「地域の大人の方に見守られながら、子どもたちに団地の中でのびのびと遊んでほしい」ということ、２つ目は「カフェや子ども企画が、大人子ども関係なく、住民の方にとって一つの居場所になれば」ということです。

これらを踏まえて、具体的な活動として現時点で考えていることを紹介します。まずカフェについては、今後も継続して実施していきたいと考えています。現在は大人と子どもの部屋を分けるという対応をしていますが、将来的には大人も子どもも同じ部屋で実施したいと考えています。子ども企画では、学生が子どもの思いに向き合う場にすると同時に、子どもたちどうしが友達の輪を広げられるような場にしていきたいと考えています。そして、その他には、具体的な案は検討中ですが、大人と子どもの世代間交流ができるような企画を実施できないかという声も上がっています。また、すべての企画に共通して、緊急時対応のマニュアルを作成し、子どもたちが、親御さんの付き添いがなくても、企画に参加できるようにしたいと考えています。具体的には、自治会の方々とも相談しながら、保護者の方の連絡先をきちんと把握することや、場合によっては保険の加入なども考えていこうと思っています。

以上で、私たち福興 youth からの報告を終わります。もし何かご質問やご感想などありましたら、後で私たちふたりにお声がけいただけると嬉しいです。ご静聴ありがとうございました。

2017年12月9日(土)　S-チルシンポジウム
東北大学福興youth発表スライド

いわきで出会った子どもたち

～学生ボランティアにできることは何か？～

東北大学 教育学部３年 中澤 恵
文学部２年 大庭 佳乃

自己紹介

中澤 恵（教育学部３年）
・仙台白百合学園高校出身
・幼稚園生の頃の夢→天使

大庭佳乃（文学部２年）
・島根県立松江北高校出身
・興味のあること→方言！

福興youthの活動

- 主な活動地域： 福島県いわき市、富岡町
- 主な活動： 仮設住宅、災害・復興公営住宅での「カフェ」の実施

今日の発表内容

1．ある活動先での子どもの言動について「気になったこと」
　－気になった言動・実際の学生の対応・感想

2．これまでの取り組み

3．今後取り組みたいこと

（昼ごはん食べた？）
「ううん、食べてない。家に誰もいないし。お母さん、２時か３時まで帰ってこないから。」

＜状況＞
・ある週末、学生が昼前に団地に到着し、集会所で昼食をとろうとしたときの会話
・学生が昼食をとっている間も昼食を食べず、ずっと外で遊んでいる子どもたちが他にも2、3人いた（結局夕方までずっと帰らずに遊んでいた）

＜学生の対応＞
・遊びを見守った
・自分達の昼食を分けるべきか迷ったが、結局しなかった

＜学生の感想＞
・昼食をあげたいと思ったが、安全面や、各家庭にはその家庭のやり方があることなどを考えると、そうするのが得策ではないと思った

→学生としてできること、してあげられることは何か？

＜帰り際に突然泣き出してしまい＞
「もっと遊んでいたい。いつも遊んでくれる相手がいない。帰っちゃうのいやだ。」

＜状況＞
・学生を取り合うように遊んでいた一人の子が、学生が帰り支度を始めた時に突然泣いてしまった
ただただ泣くばかりで、最初はどうして泣いているのかわからなかったが、30分位して落ち着いてから話してくれた

＜学生の対応＞
・「また必ず来るから、また遊ぼうね」と声を掛けた

＜学生の感想＞
・最後に気持ちを話してくれて嬉しかった、聞けてよかった
・日頃抱えていた寂しさやストレスをぶつけてくれたのかなと思った

→時々遊びに来たいと思った。
しかしそれは問題の根本的な解決にはならない・・？

＜小学校中学年・高学年の子どもたち＞
「おんぶして！」「だめ、わたしがする！」
／「（学生の名前を呼び捨てで呼ぶ）パンチ！」

＜状況＞
・小学校中学年以上の子どもたちでも、おんぶをせがむ、自分の思う通りにいかないとぐずるなどの様子が見られた
・初めて来た学生に対しても人見知りせず、過度になついてくる
・少々乱暴なこともある（叩く、蹴とばすなど）

＜学生の対応＞
・基本的に求められるがまま遊ぶ
・どの子にも平等に接するようにしている

＜学生の感想＞
・「自分に注目してほしい」というアピールのある子が多いように感じた
・どこまでは受け止めて、どこから注意するべきか分からない（パンチなど）

→子どもたち一人ひとりに向き合っていきたい

＜カフェの場で、子どもが騒いでいて＞
「子どもがうるさい。」「なんでこんなところに子どもだけで来ているのかしら。」

＜状況＞
・集会所でカフェを行っていた際に、集会所の中ではしゃいでいた子どもたちがうるさいと、大人の方からクレームがあった

・特に子どもだけで集会所に来ている子に対して、子どもだけで来させるのは如何なものかという声も出ていた

＜学生の対応＞
・以後、カフェ実施の際は大人と子どもの部屋を分けることにした

＜学生の感想＞
・「室内では騒がない」などルールを作る必要があると思った
・子どもだけで来ている子の安全は心配だと思う反面、カフェが家に親が不在の子たちの居場所になったらという思いもあり、複雑な気持ちだった

→カフェが、
大人・子ども両方にとっての居場所となるには・・？

これまでの取り組み

- **カフェで、大人と子どもの過ごす部屋を分け、子どもに「静かに遊ぶ時は中、はしゃぐ時は外」を徹底**
  →現在まで、カフェ実施時のクレームはなし
- **子ども企画の実施**
  －目的 ①子どもがのびのびと遊べる場を作るため
  ②学生が子どもと向き合う時間をとれるようにするため
  －未就学児～高校生までの子どもを対象とした企画を実施
  ［第1回：勉強タイム＋自由遊び＋レクリエーションゲーム ］
  →学生が子どもたちと遊ぶことに集中できた
  →子どもたちが楽しそうにしていた、
  「次はいつ来るの？」と言ってくれた

今後取り組みたいこと

学生側の願い：
- 地域の大人の方に見守られながら、子どもたちに団地の中でのびのびと遊んでほしい
- カフェや子ども企画が住民の方（大人も子どもも）にとって１つの居場所になれば

カフェ	子ども企画	その他
・継続する ・将来的には大人・子ども同じ部屋で実施したい	・子ども同士が友達の輪を広げられる場にしたい ・学生が子どもの思いに向き合う場に	・世代間交流のできるような企画の実施？

共通
・緊急時対応のガイドライン作成（子どもだけでも企画に参加できるようにする）

ご清聴ありがとうございました。

私たちが学んだ
被災地の子どもを取り囲む環境

基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼた

千葉　柚紀

飯田　　司

根來　怜菜

たなぼた

2016年度 基礎・展開ゼミから生まれた
ボランティアサークル

棚から ぼた餅 × たんいがなくても ボランティアしたい

ボランティアをすると
思いがけない幸運が
舞い込むかも?!

東日本大震災の被災地 宮城県で、
仮設住宅の集約や復興住宅への移転を背景に
地域のコミュニティづくりをお手伝いしています！

住民さん同士の交流やリラックスできる場を
私たちと一緒に作ってみませんか？

傾聴
お茶会

折り紙
工作

足湯
手もみ

地域のイベント
参加

手芸
たこ焼き

こども向け
実験教室も！

← たなぼた公式ゆるキャラ"ぼたちゃん"

SNSでゆるっと発信！要チェックぼた！
Twitter
@tanabota_tohoku
Facebook
@tanabota.tohoku

本ポスターは、東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の協力のもと作成した。

これから私たち、基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼたの発表をさせていただきます。タイトルは「私たちが学んだ被災地の子どもを取り囲む環境」です。発表者は、私２年千葉柚紀と、１年飯田司、根來怜菜で務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

はじめに、私の個人的なお話でありますが､東日本大震災の経験を簡単にお話させていただきます。私は宮城県栗原市出身です。内陸なので津波の被害はありませんでしたが、ライフラインが途絶え、食事の問題などいろいろありました。ですがその中で地域の中で助け合って、日々を過ごしました。落ち着いてからメディアや、それから自分の目でも実際に津波の被害を知り、これからこの地域はどうなるんだろう、私に何ができるのかなということを考え、なんとなくボランティアに興味を持つようになりました。ですが、それから実際の活動に踏み出すことはできずに、大学生になりました。

そこで、次にたなぼたについてです。私は２年生なのですが、昨年私たちが１年生のときにつくりました。基礎ゼミ「ボランティア活動と地域課題」という授業を受講し､ボランティア活動の今の状態について学びました。そして私たちにもできることがあり、これからも継続していく必要があると知り、これからも自分のペースで続けていくために、サークルとして活動しようと思って立ち上げました。

次に、私たちの日々の活動についてお話させていただきます。私たちの活動の一番大きな目的は、住民の皆さんのコミュニティ形成です。仮設住宅や復興住宅に新たに入るときは、皆さんゼロからコミュニティを作ることになります。日々の生活のためにも周りの関係というのはとても大事なので、そのお手伝いをさせていただくために、私たちが企画・イベントを通じて仲介することで、住民の方々の交流を深めてもらっています。交流を通じてその時間を楽しんだり､悩みを吐き出す場になったらいいなということも考えています。それから、SNS で情報を発信することで、以前の私のように興味はあっても踏み出せない人が参加できるようにと思って活動もしています。

活動場所は、県内で仙台市、石巻市、名取市です。こちらが石巻市の活動になっています。足湯であったり、右下に映ってるのは餅つきなんですけど、このような季節に沿ったイベントも活動してます。それからこちらは仙台市、名取市での活動です。夏祭りであったり、またこちらでも足湯をしています。それから、仙台市若林区の大和町です。今日は、こちらの大和町での活動を主に大きく取り上げて、報告させていただきます。

ここから、報告者を根來さんと飯田さんに交代します。私たちが感じた大和町の課題は、大きく分けて２つあります。１つ目が子ども関連の苦情があるということで、もう１つが交通量が多く子どもには危険であるということです。大和町では、子どもの遊ぶ声がうるさいなどの苦情があり、嫌がらせもあるようでした。さらに交通量が多いことと、道路が複雑なために、子どもの遊ぶ場所が少なく、子どもが思い切り遊べる環境とは正直言えないと、私は感じました。しかし、子どもに対する苦情というのは、慣れない環境での生活の不満から生じる八つ当たりであり、復興住宅内での人間関係が大きな問題であると感じました。そのために私たちは何をするべきかを考えた時に、復興住宅の住民さんと、近隣の住民さんが関わるきっかけを与えることが必要であると思いました。次に、活動を通して感じたこれからの課題というのは、復興住宅の子どもだけを対象としてしまうと、周囲の復興住宅外の子どもが差別だと思っていじめられてしまうということがあるということです。良かれと思ってやっているボランティアでもいじめにつながりかねないということを知りました。そのため、誰を対象として何のためにボランティアをやるのか、というボランティアのあり方を考え直す必要があると思いました。

また、何をするのかが明確でないと、信用性の問題から、親が行かせようとしないということがあり、写真やイラストで内容を提示することが必要であると感じました。さらに、どこで活動しても出てくる問題であるのですが、参加者の固定化という問題があります。それはお祭りなどの誰でも参加しやすい活動を、もっと企画することが必要であると思いました。

ボランティアをする中で、私たちにできることは限られているなっていうふうに感じることがあります。それは、私たち自身に時間的・技術的制約があるばかりでなく、地域の方のプライバシーの問題などがあるためです。しかし、できることは多くはない中で、私たちには地道で継続的な活動が必要であると考えています。

学生ボランティアとして、私たちが学んだことについては、まず今必要なのが心のケアであるということです。復興住宅の住民さんはお年寄りの方が多く、私たちのような学生や若い人と話すだけで元気になる、と言ってもらえました。また子どもたちも、私たちが企画した科学実験などを通して、普段できないことができて、また遊べて嬉しいと言ってくれたり、また帰りたくないと泣いてくれる子までいました。なので、私たちのような人が積極的に参加することが重要なのだと思いました。また、復興住宅に

限定せず、地域全体を対象としてボランティアを企画して、一つの地域、また一人の住人として平等に接していくことも大切だと学びました。私たち学生ボランティアにできることは限られているので、住民の皆さんに人との関わり方を学んだり、人と関わる機会を与えたりすることが、私たちにできることなのではないかと思いました。私たち学生ボランティアにとって、一番大切なことは、ただ企画を遂行することではありません。ボランティアとして行っていることが地域のためになっているのか、本当に地域の方が必要としている活動なのか、そういった目的を常に意識しながら活動することは大切なのだと学びました。

最後に、私たちがボランティア活動を継続する理由を、それぞれ述べさせていただきます。私は活動を通して様々な人と関わることになりました。同じサークルの仲間であったり、住民の皆さんであったり、その住宅の付近に住んでいる皆さんなど、たくさんいらっしゃいます。その皆さんと関わることで、人の温かさや強さ、時には弱さや冷たさも感じました。それから、自分がのびのびいられる場所、心が癒される場所としての居場所の大切さも知りました。自分の生まれとも関係のない地域に入って、住民の皆さんとお話する際、自分について考えます。普段の生活ではなかなか会わない自分のまったく知らない人たちと関わるので、自分はどのような人間で今この場にいるのか、震災の時私は何を思って、何に守られて、どのように心を癒していたのか、そのようなことを考えているので、その活動が自分について見つめ直す場になっているように感じます。自分に何ができるのか、自分だからこそできることっていうのは目に見えないんですけど、それを求めてこれからも続けていきたいと思っています。

ボランティアを続けていく理由としては、私は被災地にはまだ多くの課題があって、私たちにできることがまだまだあると感じたからです。初め授業の一環として、地域のコミュニティ形成の問題の解決を目的として、ボランティアを始めました。しかし、授業が開催されている短期間の間ではその問題は解決できず、その上に、関わっていくことでその地域の新たな課題が多く見えてきました。中には、虫の駆除や、自治会に入っていないという私たちにはどうしようもできない問題もあるのですが、科学実験であったり、足湯であったり、お祭りの手伝いであったり、若い力が必要なそのような催しでも、課題解決に繋がるということを知り、私たちにもまだできることが多くあると知り、これからも続けようと思いました。活動をするうえで様々な人と出会います。その中で、楽しさや

経験や、ボランティアに対するやりがいを得ることができます。特に私たちが活動の中で出会う、地元自治会をはじめ、地域の方々は、ボランティアをしていなければきっと出会うことがなかった方々です。そのような様々な方との繋がりを得ること、これがボランティアを続ける理由の一つです。以上で私たち、基礎ゼミ･展開ゼミ継続サークルたなぼたの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

私たちが学んだ
被災地の子どもを取り囲む環境

基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークル“たなぼた”

千葉　柚紀
飯田　司
根來　怜菜

発表の流れ

1、東日本大震災の経験
2、“たなぼた”とは
3、日頃の活動
　＊若林区大和町での活動を通して
4、活動を続ける理由

発表の流れ

1、東日本大震災の経験
2、“たなぼた”とは
3、日頃の活動
　＊若林区大和町での活動を通して
4、活動を続ける理由

1、東日本大震災の経験

ライフライン・食事の問題

地域の中での助け合い

メディアによる津波被害を受けた地域の情報

自分の目で見た被災地の状況

→ボランティアに興味を持つようになった

発表の流れ

1、東日本大震災の経験
2、“たなぼた”とは
3、日頃の活動
　＊若林区大和町での活動を通して
4、活動を続ける理由

2、“たなぼた”とは

2016年度の基礎ゼミ「地域課題とボランティア」を受講

→私達にもできることがあり、活動の継続が必要だと学ぶ

→自分のペースでボランティアを継続するためにサークル化

現在は1年生・2年生
合計25名の学友会登録団体

基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークル“たなぼた”

発表の流れ

1、東日本大震災の経験

2、“たなぼた”とは

3、日頃の活動

＊若林区大和町での活動を通して

4、活動を続ける理由

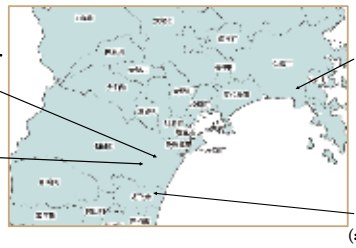
3、日頃の活動

・住民同士、学生と住民の交流
⇨新たなコミュニティ形成のお手伝い

・日頃の悩みや呟きを吐露できる場所に
・純粋に楽しい時間を過ごしてもらいたい
・SNSでの情報発信

3、日頃の活動

活動場所



3、日頃の活動

石巻市

3、日頃の活動

仙台市長町
名取市愛島

3、日頃の活動

仙台市大和町

3、日頃の活動＊若林区大和町での活動を通して

大和町における課題

・子供関連の苦情
→日々の生活の不満から生じる八つ当たり

・交通量が多く危険
→子どもの遊び場所が少ない

➡ 人間関係の問題が大きい

復興住宅の住民と近隣の住民が関わるきっかけ

3、日頃の活動＊若林区大和町での活動を通して

活動を通して感じた課題

・近隣との関係
→良かれと思ってすることがいじめに繋がる可能性も

➡ **ボランティアのあり方を考え直す必要**

・信用性
→何をするかが明確でないと親が行かせようとしない

➡ **写真やイラストで内容を提示**

3、日頃の活動＊若林区大和町での活動を通して

活動を通して感じた課題

・参加者の固定化
→内容に関わらず参加してくださる方がほとんど同じ

➡ **お祭りなど、参加しやすい活動の企画**

・ボランティアの難しさ
→学生ボランティアが地域のためにできることの制限

➡ **地道で継続的な活動が必要**

3、日頃の活動＊若林区大和町での活動を通して

学生ボランティア としての学び

・今必要なのは心のケア
→「学生という若い世代と話すだけで元気になれる」

➡ **積極的に関わることに意味がある**

・復興住宅に限らず、地域全体と関わる
→1つの地域、1人の住民として接する

➡ **人との関わり方を学んだり、人と関わる機会を提供**

3、日頃の活動＊若林区大和町での活動を通して

学生ボランティア としての学び

・活動の意義
→学生ボランティアとして一番大切なことは、企画の遂行ではなく地域課題解決への貢献

➡ **目的を意識しながら活動する**

仙台市大和町・卸町

大和地区社会福祉協議会は3つの復興住宅（大和町市営住宅・中倉市営住宅・卸町市営住宅）の支援活動を実施。“たなぼた”でもお手伝い

→地域の人が誰でも参加できるイベントもお手伝い

夏祭りで地域の子ども対象の科学実験、中倉町の防災訓練にも参加

→将来的には大和地区全体の防災・減災に貢献したい

大和地区には東北大生60名が住む寮が完成予定

→防災や福祉、文化活動などで大学生と地域が連携できれば楽しそう！

発表の流れ

1、東日本大震災の経験

2、“たなぼた”とは

3、日頃の活動

＊若林区大和町での活動を通して

4、活動を続ける理由

4、私たちが ボランティア活動を続ける理由

・人の心と居場所を知り、自分を見つめる場

・まだ解決していない課題や私たちにできることある

・活動を通して得られる楽しさ、経験、やりがいとさまざまな人とのつながり

ご清聴 ありがとうございました！

ディスカッション

地域復興プロジェクト“ＨＡＲＵ”
ＮＰＯ法人キッズドア
陸前高田応援サークルぽかぽか
インクストーンズ
福興 youth
基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼた

地域復興プロジェクト“HARU”

関さん：皆様貴重なご意見、ご質問ありがとうございました。誠に勝手ながら大きくカテゴリーで分けていった時に３通以上頂いた質問にお答えしていきたいと思います。

質問 1．ニーズの調査というものが何度か出てきましたが具体的にニーズの調査とはどんなことをしていたのですか。

主に「あそいくプロジェクト」で行っていた活動となります。その中では仮設住宅に訪問してお茶会ですとか足湯とか、カラオケなどを通して住民の方と交流しました。基本的には定期的に、継続して訪問して、住民の方と足湯などによって信頼関係を築いて会話を大事にしながら、その対話の中から「今困っていることはなんだろう」というのを探す、ということをやっていました。それだけではなく､市街地を実際に自分たちの足で歩いて周りまして、石巻にあるお店などに訪問して、そこでも店員さんに困っていることはないですかと質問して周るなどもしていました。

質問 2．活動を継続する難しさは何がありますか。

今一番直面している課題としては、人手不足が見られます。最初は 1000 人以上の方が登録して HARU という団体ができていたのですが、体制など変わる中でメンバーの数が減り、また、所属しているメンバーもどうやってモチベーションを維持するか、という意味では学業の方が忙しくなってあまり活動に参加できなくなったりとか、そういう方も結構いらっしゃるので、そういった中で今いるメンバーでどういった活動をするのか、ということと、どうやってメンバーを募集するか、という課題が一番大きなものとなっています。

小林さん：

質問 3．先輩方の活動をどういう風に後輩が引き継いでいるか

僕は２年生なんですが、そもそもサークルの中に先輩方、今一番上だと大学院１年生の方がいて、その方々から震災初期の活動について詳しく聞くというミーティングを月一でやるのですが、そういった機会に聞くことができます。あと HARU が５年経った時に５年間の活動を冊子にまとめたものがあって、それを見ながら、こういった活動をしてきたというのを学んだりしています。最後の質問として、これからの活動の見通しですが、石巻部門の方でいうと、これからは復

興公営住宅の活動が中心になってくると思います。仮設住宅は来年の９月頃にほとんど閉鎖されてしまうことになってると思うので、これからは復興公営住宅の活動がメインで、そこでの新たなコミュニティ形成のために、今までやってきたお茶会などを継続してやっていけたらと思っています。山元町でも、地域ぐるみでのイベント、仮設住宅や復興公営住宅以外の、地域ぐるみで何かイベントに参加したり、また自分たちで企画したり、ということをやっていけたらいいなと思います。HARU の質問の受付はこんな感じで終わります。

NPO 法人キッズドア

錦織さん：はい、たくさんのご質問やご意見ありがとうございます。その中でできるだけ多くの質問に答えようと思っているんですけど、それでまだ足りないという方は僕らの方に直接来てもらえればできるだけたくさん答えたいと思います。

質問 1．資金をどうしているのですか

まず前提として、キッズドアというのは、大学生のサークルとかではなく、NPO 法人であり、大学生のボランティアが結構多いのですが、ちゃんと職員さんもいて、活動をしております。なので、資金というのは、政府行政やいろいろな民間企業さんから助成金を受けたり、いろんな人のご厚意で寄付を受けたりしてやっています。

質問 2．保護者とのかかわりという面で、保護者とキッズドアがどのようにかかわっているのですか

家庭や学校の様子、経済的な状況などを年に何回か職員と子どもと保護者で面談するという機会があり、必要な情報を確認しています。学生ボランティアとして、仕事、バイトとの違いということで、塾講師のバイトと比べて僕たちがどう感じているのか、という質問もあったんですけど、僕個人としては、あまり塾に通う余裕がない子もちゃんと勉強ができるようにしたいと思っていて、それに少しでも関われているので、バイトと違ってお金はもらっていないんですけど、すごくやりがいを感じています。

質問 3．ボランティアはどうやって集めているのですか、どうやってボランティアの人たちが集まったのですか

キッズドアは、ボランティアセンターなどで情報を発信したり、SNS やメディアでも情報やボランティアの募集をかけたりしています。インターネットでは Twitter、Facebook、

あとブログも日々更新しています。良ければ見てもらえるとありがたいです。東北大学だけじゃなくて、他の大学や社会人の方、あと外国人の方も登録しています。総じて見ると、東北大が 50 人くらい、他で 10 人くらいというところです。

宇野さん：

質問 4. キッズドアに来る子たちを登録するときにどのような手続きを踏んでいるのですか

宮城県・仙台市などの行政の方と協力して、市内の中学校で案内してもらうようにお願いしています。そのほかにもメディアや Web などでキッズドアという団体を知って個人でご連絡をくださるご家庭もあるんですけれども、多くは学校の先生からちょっと気になるご家庭の親御さんに「こういう風なものがありますよ」と案内していただいて来る子などがいます。

質問 5. 学力が向上しても資金面で進学できない子がいるのではないですか

キッズドアの方で、奨学金や教育ローンなどのご案内もして一緒に手続きを手伝うという支援も行っています。あとは、宮城県は、都会と違って公立高校が学力の偏差値が高いという特徴があるので、できるだけ学力を上げることで、経済的な負担が減るのではないか、という風な考えのもと、できるだけ学力を上げて、高校進学のお家の負担を減らそうというも私達の狙いのひとつです。それでもやっぱり親御さんの反対で、進学を諦めざるを得ない子がまだいるので、そのあたりは課題として残っているなと思います。

質問 6. 学習意欲を引き出すためにどのような工夫をしているのですか

キッズドアに来ている子どもたちはやっぱり勉強が苦手な子たちが多くて、おそらく普通の塾のような環境ではなかなか勉強できない、集中が続かないというお子さんが結構いると思います。そういうところで､大学生のボランティアがたくさんいるという環境を生かして、個別の一対一の対応をして、その子のニーズに合う教え方をしてみたりだとか、あとはクラス分けをして勉強ができる子とちょっと苦手な子という風に分けて、そこで大学生がそれぞれのクラスに合った教え方を模索していく、という風にして、できるだけ子どもたちが勉強に拒否反応を起こさないというか、面白いと思えるような教え方を日々みんなで頑張って工夫しています。

質問 7．学習支援をしても、結局お金がなければ貧困は改善できないのではないですか

キッズドアでは、学力を上げるというのは大前提なんですけれども、そのほかに生きる力というか、思考力とか、判断力、社会性などもともに育んでいけたらと思っております。そういう力を育むことで、社会人になったときにより幅が広がるというか、能力が上がって、勉強だけでなくさまざまなことへの興味関心を持ってさらにいろんなことに挑戦する意欲につながるのではないかと思っています。私達の団体の一番のテーマが子どもの貧困ということで、今回の被災というのと直結した問題ではないんですけれども、支援する子どもたちの中に被災した子どもたちも含まれていると感じて、少し毛色の違う活動になっているのですけれども、今回参加させていただけて、私達の活動を知ってもらえて良かったかなと思います。ありがとうございます。

陸前高田応援サークルぽかぽか

鈴木さん：発表のスライドの順番とはちょっと違うんですけど、私の方からいくつか質問にお答えさせていただきたいと思います。

質問 1．東京の中学高校生と、陸前高田の高校生、あと東北大の学生の交流について、高校生が他の所の高校生と交流するのはどういったメリットがあるのですか

これは自分が大学生になってから特に感じたんですけど、高校生までっていうのは、自分の力でいろんな所に行って、いろんな人と話す機会というのがすごく少ないなと思います。どうしても学校の中で全て終わってしまって、学校と自分の家との行き来で全て終わってしまうという印象があります。そんな中で、他の高校生とじっくり話すことで自分と同じ年の子たちがこういうことを考えているんだ、というのが、発表のスライドの中でもあげたんですけど、そういうことを知ることでお互いの刺激になるのではないかと思います。私の母校の先生方の反応はどうでしたか、というのに対しては、これまでスタディツアーは毎年2012 年から行ってきたのですが、スタディの要素が強くてどうしてもマンネリ化してきてしまいます。似たような内容なので継続して同じ高校生がツアーに参加するというのが難しくなっていました。そこで、ボランティアという新しい要素を加えることで、今まで来てくれた子たちがもう一回参加してくれるということで喜んでもらえました。学校側からは「こういうことがしたいです」とか「こういう内容はどうですか」という案を、先生と企画委員という子たち（10 名くらい）が私たちに提案してくれて、それに合うような形でボランティアをこういうところでこういうことをしてはどうかと提案してやりました。あとは、将来震災を知らない世代の人たちが高校生になったとき、陸前高田の高校生にはどのようにして東京の高校生に震災のことを伝えていってほしいかという質問に対しては、積極的に自分の経

験を話していってほしいなと思います。やっぱりなかなか、直接人からそういう体験を聞かないとどういったことがあったのかというのは私達にも分からないので、積極的に話してほしいなと思いますし、実際の土地（現場）を見ながらここでこういうことがあったんだよ、というのを言ってもらえるとなお身にしみるのかな、と思います。

大西さん：

質問 2. 子どもの接し方についてのご質問で、震災によって傷付いた子どもと触れ合う際にどのようなことに気を付けますか

これに関しましては、ここにいる皆さんは気を付けていらっしゃることだと思うんですけど、受容的態度という言葉があって、これは子どもたちとか被災地の住民さんがネガティブな発言をしたときに、それを否定せずに、深く掘り下げずに、「そうなんですね」という態度のことなんですけど、これに気を付けています。

質問 3. 子どもたちに対する責任を感じることは

以前メンバーとも話したことがあったんですけど、子どもたちに「また来てね」と言われて、それに対して大学生が「行くよ」と答えたら、その言葉に責任を持つことが大切だといつも感じております。

質問 4. 進路に関する質問で、大学に行きたくても何等かの理由で地元を離れられない人々がいるかもしれない、地方の大学がそんな人々の受け皿になることが重要か、大学に進学するのが本当に良いのか、きちんと自分の将来設計を立てさせ、そこから進路を考えさせることも大切ではないか

まず地元を離れられない人々について、高田で話した高校生についても、お金がないので進学できない、しないという子がいました。将来設計を立てさせて進路を考えさせることも大切だと思いますが、まず立てさせる段階の中に、勉強のために大学に行くという選択肢がないことがひとつ問題点として挙げられると思います。それがあれば、お金がなくても、いろいろな奨学金とか、そういう種類があるので、問題解決しようとできるかもしれません。もう一つご指摘で、岩手県には岩手大学の他にも大学があります、対象を国立大学とだけするのはいかがなものかというご指摘があって、そこに関しては配慮が足らずすみません、としか言えません。普段交流をしている大学で、陸前高田に近くて一緒に活動しているのが岩

手大学さんだというのに引っ張られた部分が大きいです。あと、地方の大学がそうした人々の受け皿になるのが重要ではないか、というのについては、地方の大学というか、その大学のご指摘の通り、大学進学という選択肢があれば良いと思うので、どこでも良いと思います。この大学に行く選択肢がないというのは、震災をきっかけに大学生が行って、以前からあった問題が浮上して、ニーズが出たので、大学生ができることをしたいなというので、考えていることです。

質問 5. 予想が難しい時代を生きていく子どもに必要なことをもっと深く考えながら活動することを望みます

ひとつ返答させていただくならば、未来を見据えるというのは、大学生の中の学生という面での、やらなければいけない仕事だと思っていて、もう一つ陸前高田の今の課題を見つめて細かく考えるのは大学生のぽかぽかメンバーとしての仕事なのかなと思いました。以上です。

インクストーンズ

桐原さん：貴重なご意見とご質問ありがとうございました。時間の関係で他の団体と同じようにいくつか絞らせてお答えさせていただきます。雄勝町についての質問にお答えさせていただくんですが、まず説明が不十分だった部分があるので補足させていただきます。

質問 1. チーム雄勝とは何ですかというご質問を受けたんですが

そういう団体というか組織があるのではなく、教師と地域とのつながりを超えて、学校として捉えていますよ、という名称のようなものとして捉えているので、別に団体としての法人格があるとかそういう訳ではなく、そういう意識で活動をしています、というものです。具体的にはその地域にある子どもの体験学習ができる複合体験施設みたいなのがあるんですけど、そこを中心とした地域住民と学校で、共同のカリキュラムを作ったり授業を作ったり、ということを一緒にしています。組織ではないんですけど、つながりになっています。

質問 2. 子どもを地域社会で育てるためにどんな環境があると良いと思いますか

僕個人の意見なんですけど、地域社会で育てるということで、まず学校とその地域社会が分かれてはいけないのかなと思っていて、学校が当然地域に対して開いているというのが大事だと思いますし、地域住民が、学校に任せるのではなく自分たちでもあの子たちを支えるんだ、一緒に育てていくんだ、という、相互作用といいますか、という関係性がないといけ

ないのかな、という風に思っていて、でもこれについて雄勝について全体を見れている訳ではないんですけど、僕がちょっとお話を聞く中では、例えば子どもさんがいない大人の方でも、あの子たちは自分たちが育てるんだ、ここの担い手になるんだから、という意識で学校と接している方にお会いしたことがあるので、そこについての風土といいますか、というのが育っているのかな、という風に思います。

質問 3. 人口減少社会における復興の意味についてどのように考えていますか

一個人の意見として聞いていただきたいんですけど、人口減少社会というので、どうしても人口を増やすとか元に戻すとかそういう方に意識が向きがちなんですけど、今の日本の現状からしたらまず無理なのかな、と思っていて、もっと大事なのは、やっぱりそこに住む住民が何を大事にして何を遺したくて、やはりそこで暮らしていく残りの余生を過ごしていくじゃないんですけど、というために何ができるのか、というのを考えるべきなのかなと思っていて、そのためにやっぱり人口が必要ってなってしまう面もあると思うんですけど、そうではなくもっと別の、人口を増やすだけではない、地域を残す形で何ができるのか。それを考えていく、というのも大事なのかなと思っています。僕からは以上です。

沼津さん：自分からは主に 3 つの質問に絞って答えさせていただこうと思います。

質問 4. インクストーンズの活動について具体的に知りたいという

インクストーンズの活動の頻度は、現在月に 2 回程度行っており、人数は約 15 人から 17 人です。内容は先ほどのスライドでも少々触れたんですけれども、仮設住宅におけるイベントのお手伝い、さっきの焼きそば作りや夏祭りのお手伝いというのをやったりとか、あとは雄勝町浪板地区というところでも活動しているのですが、そこでは地域の特色である雄勝石というのがあるんですけど、その石を使った石皿作りなどをして、地域を外に広げていく、という活動をしています。活動の目標はどんなものか、というご質問もあったんですけど、活動目標は、コミュニティ形成とコミュニティの支援ということを行うのが目標だと思っています。どういうことかというと、仮設住宅や今自分たちが活動している地域っていうのは、震災によって一度関係性がばらばらになってしまった地域がほとんどなので、そういった地域のコミュニティを上手く形成する、そしてその形成を行う上で、歯車というか、手伝うことを目標としています。

質問 5. 仮設住宅の移転に関して

一つ目が仮設住宅におけるコミュニティの再統合ということはどういうことかというご質問で、住民がばらばらになってしまうのか、それとも住民は変わらず地域だけが変わるのか、というご質問があったんですが、これは住民がばらばらになるというのが正解の方です。人によっては自分たちで住宅を再建してそこに住むといった方もいれば、仮設住宅に移転するしか方法がないという方もいるので、そうなった場合住宅に住む方、仮設住宅に住む方、そして復興公営住宅に住む方と、それぞればらばらになってしまうので、これがコミュニティの崩壊と呼ばれています。

質問 6. 平成 30 年度に、新たな復興公営住宅への移動の際に、移動先でも今後活動していこうと考えていますか

これは活動していこうと考えています。現在集約する仮設住宅に住んでいる方々の多くが行くとされている復興公営住宅が既に決まっているので、今後はそこに活動先を移転して、そこで継続的な活動をしていこうと考えています。そして最後の質問として、子どもたちの集団行動で苦労するのではないか、その苦労とは具体的にどういうものか教えてください、という質問があったのでこれに答えさせていただきます。活動先に住んでいる男の子なんですけれども、集団行動で苦労する場合、自分は 2 つあると思っていて、一つはコミュニケーションがうまく取れなくて、話しかけられない、という場合と、自己中心的な態度を取ってしまうので周りから敬遠されてしまうという形で集団行動ができない、という 2 種類があると思っているんですが、そのうちの自分が関わっている方は、結構自分の行動を中心に考えてほしいという傾向があるので、そういった面で他の子どもたちから敬遠されていまうのではないか、ということが考えられたので、こういった苦労があるだろう、といったことを述べさせていただきました。

質問 7. その男の子は小学校に通っていて、あと保育園に通っているようなので、グループ形成はそこでもできるのではないでしょうか

質問してくださった方の言う通りで、小学校や保育園で上手く関係性を築けている場合もあるんですね。そういった場合は、小学校や保育園できちんとできていると考えられます。しかし、自分たちの活動が、主に土曜日や日曜日といった祝日で活動しており、小学校などに行ける機会がないので、小学校での活動は見たことがないんですね。そういったことを判断するためには、やっぱり学校における活動というのを見ないといけないので、今回は自分たちの活動の中で見れる子どもたちの状況を切り取った上でこういったことが推測できるという話だったので、グループ形成が小学校や保育園ではできないんでしょうかという質問に

関しては、できるとお答えしたいと思います。以上です。

福興 youth

大庭さん：初めに、大庭の方からコメントさせていただきたいと思います。まず、こんなにたくさん意見、質問をいただきありがとうございます。今取り上げられない分も、しっかり読んで団体のメンバーに共有したいと思います。ありがとうございます。

説明が足りなかった部分があるようなのでその点の補足説明をさせていただけたらなと思います。まず、福興 youth についてなんですが、現在、今年は 15 名くらいで活動していまして、主に学部 1、2 年生がそのほとんどです。なので中澤さんは結構まれな、というか 3 年生なのに残ってくださっている、というような状況です。

質問 1．福興 youth の活動内容に関して

富岡町でも活動しているんですけれども、それに関して説明がなかったので教えてほしいというような意見もあったのですが、富岡町は、今年の 4 月に町の一部の避難指示が解除されたという事情もありまして、町内での活動はまだほとんどやっていないといった状況です。富岡町ご出身の方で、いわき市の仮設に避難されている方々に関係のある仮設がありまして、そこの仮設で、他の活動と同じようなカフェ活動でお邪魔させていただく中で交流したりですとか、あとは富岡町の社会福祉協議会の方と少し連携して、「こういう活動あるんだけど学生さんボランティアに来てくれない？」などと言われた場合はお邪魔して活動するような形で交流をしています。これから富岡町に人が戻ってくるという段階になって、私達がどのように関われるのか、というのを考えて作っていくような状況です。

質問 2．カフェに関して

カフェは、私達が普段お金を持って飲みに行くようなカフェとは違いまして、通称私達がカフェと呼んでいる活動のことです。公営住宅や仮設住宅の集会所をお借りして、私達が飲み物やお菓子、おせんべいとかチョコレートとかそういうようなお菓子を持っていって、コーヒーとか紅茶とかジュースとかを持っていって、その場で普通の紙コップなどに入れて出して、それを囲みながらおしゃべりする、というような状況です。あまりきちっとしたようなものではなくて、手作り感満載のカフェです。カフェで一緒にやる

こととしては、私達は手芸とよく呼んでるんですけれども、うちわ作り、プラスチックのうちわの骨とそれに貼るシールを持っていって、シールに一緒に絵を描いてうちわを作る、など、季節に合わせていろんなことを行っています。このような活動は自治会、団地の方々に前もってこういう活動を大学生がやります、という広報用のチラシを送りまして、自治体の方に集会所や掲示板などに貼ってもらうことで広報して、住民の方を集めてもらっています。私からはそのくらいにします。

中澤さん：

質問 3. 子どもたちの状況にはどのような背景があると思うか教えてほしい

自分たちが思っていることをお話させていただきたいと思います。私たちが活動しているのが、津波で被災された方や原発事故で避難されている方の仮設住宅や復興公営住宅などなのですが、何と言えば良いのかな、あまり所得が高くない方が多いです。子どものことに関しては、親御さんが、共働きをされているご家庭や、子どもたちとお話していてもそういう親御さんはどっちもお仕事をされているよというようなお家や、一人親の世帯も多いなというのが、これは自分たちの肌感覚なんですけどそういう風に思っています。その中で、やっぱりお家に帰っても親御さんがいないという時間も多いのかな、なかなか遊んだりお話したい、って思ってもそばにいないことも多いのかな、寂しいって思うことも多いのかな、と背景としてはそういうようなことを思っています。

質問 4. アピールのある子が多いように感じた、とスライドでも書かせていただいたんですけど、自分を見てほしい、甘えたい、といった子どもたちに対して、特定の子に学生がかかりきりにならないようにしているというようなこともお話したんですけれども、そこはどういう風にしているのか

ここがすごく、自分たちも難しいなと思いながら関わっているんですけど、一人に関わっていると、あの子ばっかり面倒見て私のところには来てもらえないと、そういうようなことにならないように、みんなにちゃんと向き合うよということを伝えていけたらと思いながら、そういう風に関わっていけたらと思っています。ただ、現状は偏ってしまうこともあるので、そこはすごく難しさを感じながら行っています。

質問 5. 学校や地域の主任児童委員さん等との連携はありますか

結論から申し上げますと、連携は行っていないのが現状です。私たちの活動は、団地の自治会の方と直接連絡を取って実施させていただいているのですが、子どもたちのことで気に

なることがあった時にも、その自治会の方に相談させていただくことはありますが、その他のどなたかに、例えば、社会福祉協議会さんや民生委員さんなどに相談したことというのはまだありません。これはその、自分達の活動の中で私たちが見る子どもたちというのは、子どもたちの生活の中のほんの一部分であって、その一部分から安直にこの子の家庭は気になる、などと判断してしまうことに抵抗があったからというのが大きいです。ですが、確かに、子どもたちにとって年の近い大学生にだから悩みを話せた、などということもあるかもしれないので、今後は場合によっては、社会福祉協議会さんや地域の民生委員さんなどにも相談をしながら活動できたらと思います。

基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼた

千葉さん：たくさんのご意見ありがとうございます。手短に答えさせていただきます。

質問 1．今後のたなぼたの活動について

私たちが活動していて、一番共通として課題に思っているのが参加者の固定化についてです。住宅内の参加者ですと、住宅内で参加者が固定されてしまうことで来ていただいている方のコミュニティはどんどん深まっていくということで良いことなんですけど、それ以外の部屋からこっちに参加して来られない方、というのは、悪く言えばちょっと取り残されているというか、コミュニティに入っていけてない状況ということで、少しでも参加して顔見知り、そして仲良くなっていただければ思って、それを課題に思っています。そのために、もっと広報して、直接ご訪問したり、チラシを配ったり、参加していただければいいなと思ってお声がけをしていくつもりです。それから住宅だけでなく、周りの地域の方々を巻き込んでの活動もしていきたいなと思っております。そのために、今年ですと、夏祭りや防災訓練に参加いたしました。地域なので、町内会が行っている行事なのですが、それに参加し、その地区内にある復興公営住宅の皆さんにお声がけをして、参加していただければいいなということでお手伝いをさせていただきました。そのように、参加者が固定化されることを課題として見て、活動をしています。

根來さん：

質問 2．いじめについて

いじめに関する補足をさせていただきます。大和町では、私たちが介入する前から、各公

営住宅の自治会で支援金を使って活動をしていました。近隣に住んでいる子どもたちが、なんであそこの住宅だけ、いろいろ催し物をしているのか、や、そういう催し物をたくさんできてずるい、という意見があり、そこがいじめにつながっているというお話を聞きました。それに対して私たちはどうしたかというと、復興住宅に限らず、公園などを使って科学実験や夏祭りに参加したりなど、そういう活動を企画したり運営したりしてきました。そういうことによって、復興住宅の子どもたちはもちろん、その公園の近くに住んでいる子どもたちや、復興住宅の近くに住んでいる子どもたちも来て一緒に遊んだり、企画に参加してもらったり、することができました。以上です。

飯田さん：

質問 3. 具体的にどんな時にやりがいを感じましたか

僕自身も、ボランティアでやっているカフェ活動や足湯というのが地域のためにどれだけ役に立っているのかというのは常に考えながら活動していまして、そういった中で地域の方に来てくれてありがとうという声を掛けていただけると自分たちの活動が地域の役に立っているのか、ということを感じられて、そういった場面でやりがいを感じることができます。

質問 4. さまざまなサークルがあるので、互いに情報交換してみていかがですか

僕たちたなぼたと、インクストーンズさん、あと HARU さんが活動場所が石巻市で共通する部分があるので、そういった場面で何か一緒に活動できないか、というところでネットワークを作りまして、先月第一回のミーティングをしたところです。これからそういったサークル間の協力についても模索しているところです。以上です。

加藤先生：ありがとうございました。本当はまだまだお話いただきたいところなんですけれども、時間ですのでここまでにしたいと思います。大学生が今回このように一堂に会して発表してくれたという中で、とても強く感じたのは、みんなすごくいろんなことを考えながら、いろんな意味でのつなぎ役になっている、ということです。例えば異世代、あるいは大人と子ども、同世代間、地域、それも被災地域と他地域、それから震災による復興住宅と周辺地域。まだまだつないでいるものはたくさんあると思うんですが、自分たちから中に入って、見て、

活動しながら自然とその繋ぎ役になっていっているということを思いました。また、ご発表の中から、「大学生ならでは」の役割ということが強く訴えられていたことも印象に残りました。このことは、今日午前中に発表してくださった高校生にとっても、「高校生ならでは」の、私たちにできることは何か、という視点でもう一度見直していただくのもいいですね。実は本当に素晴らしいことをしているということを、また改めて感じることができるのではないかなという風に思っています。

それではお疲れ様でした。皆様、お気をつけてお帰り下さい。また、いつか、どこかでお会いしましょう。

登壇者アンケート

＜登壇者アンケート＞

登壇者アンケートは、本シンポジウムの進行や運営に関すること、個人や団体が特定される部分を除いてまとめました。運営上のご指摘は、今後のＳ－チルの取組みに活かしたいと存じます。

1．ご自身の団体の発表をまとめるにあたって、感じたこと・気づいたことなどありましたら教えてください
• 私自身が団体に登録する以前の復興支援に関して，知識を深めることができた。
• 自分の団体の発足のきっかけなども含めてまとめ直してみて、自分たちの活動の曖昧さを感じました。何のために活動をしているのか、どのような成果につながる活動なのかを考え直すきっけけになりました。
• 当団体は活動先に子どもが少ない（ほぼいない）ため子どもに焦点を当てて活動をしていなかったが、発表にまとめるため考えてみたところ、これまでは見えていなかった部分、見落としてしまっていた部分に気が付き、新たな支援の形も見えてきた。
• 団体としての理念や方針を改めて確認することで、活動の軸を意識するきっかけとなりました。また普段は活動の成果などを目に見える形で示すことは、なかなかないので、自分たちのやってきたことを実感できてよかったです。
• 普段の活動は子どもに限っていないので、改めて活動先の子どもの様子、それに対するアプローチについて整理し、ふり返るきっかけとなった。
• 当団体は震災ボランティアを６年半継続してきましたが、“子ども支援”に焦点を当てた発表の場を頂くのは初めてでした。そこで団体の活動の歴史を改めて振り返り、震災直後から現在まで当団体が支援の対象としてきた人々の中には、常に子どもたちがいたことに気が付きました。子どもを直接の支援の対象としている学用品の支給や教育支援はもちろん、仮設住宅でのイベント開催など、対象者の幅が広い活動であっても、コミュニティ形成（居場所作り）を通じて間接的に子ども支援につながっている部分があるのではないかと考え、発表の中で取り上げるに至りました。時系列でご報告するにあたり、発表者が関わったことのない過去の活動の背景や意義を確認したことで、被災地の子どもたちを取り巻く状況の変化やその時々の課題が見えてきました。それを踏まえて現在行っている活動を見直すとともに、今後の支援の在り方を考えることができました。
• 発表をまとめるにあたって、今までの活動を振り返り思ったことは、今までかなりの回数ボランティアに参加してきたんだなぁということでした。自分は、忙しい大学生生活の中で、気が向いたらボランティアに行くというスタイルで活動してきましたが、自分のこれまでの活動の積み重ねに驚かされました。それと同時に、ボランティアを通して確実にできることが増えている自分に気がつきました。
• ボランティアをすることは良いことで、するべきだということを伝えつつ、今のボランティアの問題を指摘するのが難しかった。

2. 大学生のプレゼンテーションにおいて、他の団体の発表を受けて感じたこと・気づいたことを教えてください
• 足湯などの活動内容の重要性は、これまであまり理解できていなかった部分があったが、今回のシンポで理解が深まった気がする。被災者の声からニーズを探すという他団体の説得力は大きかった。では実際にどんなニーズがあったのか、その点に関して興味がある。また、全体的に成果報告が少なかったのは残念。子どもたちから声をいただきましたといった定性的な成果だけではボランティア団体として生き残るのは大変。もっと定量的な指標にのっとった成果を示して欲しかった。
• 活動内容や活動場所の皆さんとの関係の安定性を感じました。自分たちの信念や皆さんとの信頼関係を大切にしているように見てとれました。
• 当団体と同じように仮設住宅や復興公営住宅でイベントを行っている団体では、似たような悩みを抱えているところがあり、問題の解決方法や対策で参考にできるものがあった。また当団体では未だ見えていなかった問題に直面している団体もあり、「もしかしたら自分たちの活動先でもあるのかもしれない…」、「これから出てくるかもしれないな…」と考えることも出来た。
• 普段は他の団体との交流をなかなかもつことができないので、今回のような場で、みんなが集まることで、仲間がいるんだなと改めて感じることができました。また他の団体の工夫点や悩みなどを聞けたことも今後の励みになりました。
• 多くの団体が私たちのように具体的事象でなく、さらに抽象化して捉え、発表されていてすごいなと思った。具体的な出来事を抽象的にとらえ直すということが団体内でなかなかできないと思った。反対にもう少し具体的に活動を聞いてみたかった。
• 団体によって拠点としている地域が異なり、その土地特有の子どもに関わる課題や、そこで出会った子どもたちの様子についての報告を受け、自分たちの団体にはなかった視点を知ることができました。また、その課題について工夫している点なども聞くことができ、今後の活動へ向けヒントをたくさんいただくことができました。このシンポジウムでお互いの子ども支援について知ることができたことにより、この先子ども支援について何か課題が生じた際には、相談し合って協力していけるのではないかと思います。
• 最後のディスカッションにあたって、そこで表示されたスライドには発表者の名前とともに学部学年が併記されていましたが、教育学部生の多さに驚きました。自分は、普段、ボランティアに対するやる気さえあれば、性格や能力に関係なく、まして学部学年に関係なくボランティアはできるという思いで、もっと多くの大学生にボランティアの楽しさを知ってもらいたいと思っています。その思いをさらに深めるとともに、教育学部のみなさんへの尊敬を深めました。もちろん、その他のことでもたくさんの気づきや発見がありました。
• ボランティアに関して自分とは違う考えや、また今まで自分が考えていたのとは違う観点から見たボランティアの在り方を知れたので良かった。

3. 高校生の発表についての感想をお書きください。
• しっかりと段階を踏んで研究するという姿勢が素晴らしいと思いました。私は高校生のときは、興味はあってもチャレンジできないということが多く後悔もあるので、発表者の皆さんは勇気を持って一歩を踏み出したそのこと自体がとても立派で格好良い！と思いました。発表も堂々としていて言うことなしでした。自分のできることに真っ直ぐ向かおうとする姿を私も見習いたいです。
• まずは単純に自分の高校時代と比べてとても考えているな、と感じた。被災地で育った、というのもあるのかもしれないが、それによって地域に何ができるのか、自分たちには何ができるのかをよく考えていて、とても高校生とは思えないような活動、また発表をしていた。すべての発表をじっくり聞けなかったことが残念だが、大学生として負けていられないな、自分たちならもっとできるんじゃないか、と良い刺激になった。
• 高校生の意識の高さには大変感心しました。自分が高校生のときには、あのような研究活動の機会がなかったので、早いうちから経験できることがうらやましかったです。
• 取り組みが素晴らしいと思った。その活動は誰が主体で考え出したのか、どのような団体とどう連携して実現したのかがとても気になってしまった。より多くの全国の高校生にこれらの活動を知ってほしい。アピールしてほしいと思った。
• まず初めに、素晴らしいポスターの数々に感嘆しました。ある発表では、課題を解決していくために高校生はどう社会に働きかけていくことができるか、高校生ならではの視点で具体的に行動に移しているのが凄いと思いました。そのほかにも、地域に根差した防災教育・震災支援や、若さを生かした取り組みについての発表を聴き、とても勉強になりました。
• 高校生のものとは思えないほど、内容も濃く、完成度の高い発表でした。しかし高校生の活動スパンは大学生より短いものと思います。というのも大学では、卒業後も院生として活動に携わる方が見られますが、高校生の場合、自分のように卒業後に住む場所や環境が大きく変わってしまうことがあります。そうなったとき、卒業後の生活にどう生かせるか、また、後継にうまく引き継げるかが問題です。今回発表を行っていた高校生のみなさんは、震災当時まだ小学生だったのにもかかわらず、このような発表ができているということは、それぞれの高校で活動とともにそこにかける思いもうまくつないでいっているということだと思います。また高校生のみなさんの将来にもきっと活きてくると思います。今回、遠くからいらっしゃった高校生も多く、お疲れさまでしたと言いたいです。
• 私が高校生のときには、考えないようなことや思いつかないようなことばかりで、勉強になった。

4. シンポジウム全体についての感想をお書きください。
• 私は初めてこのような場での発表に参加しました。日々緊張していましたが、Ｓ－チルの皆様の丁寧な対応のおかげで充実した一日を過ごすことができました。貴重な機会をありがとうございました！他団体の活動発表や高校生の活動など、なかなか知ることができないことなので、交流という意味でもとてもためになる機会でした。
• 普段はなかなか聞くことのない高校生や他の学生団体の活動報告を聞けたのは非常に有意義であり、学べることも多かった。しかしだからこそもっとじっくりと話す時間、討論する時間が欲しかったな、と感じてしまった。高校生の意識の高さがポスターセッションや大学生の発表に対する質問などから見て取れたため、もっと大学生として、ボランティアの先輩として声をかけてあげたかった。もちろん自分がもっと積極的に空き時間などで話しかければよかったのではあるが、全体としてパネルディスカッション形式でなくても個別に話したり、フリートークができる時間もあったりしたらなおよかったのかな、と感じた。
• 高校生ともう少しふれあいたかったなぁと思いました。時間があまりなくて仕方ありませんでしたが、直接言葉をかわす機会があるとなおよかったように思います。全体としては、温かみのある素敵な会でした。参加させて頂けてよかったです。ありがとうございました。
• 我々の発表に対してレスポンスを頂けたのがとても嬉しく参考になった。ディスカッションタイムでもっと様々な話が聞けたらよかったなと思った。高校生のポスターセッションも、もう少しスケジュールがゆったりしていれば、余白で高校生とお話しできたのではと思う。
• 震災子ども支援室の先生方のご尽力により、会場や抄録、ポスターなど、どれをとっても素晴らしいものになっていたと感じました。特に抄録やポスターなどは、丈夫な作りの、今後も活用していきやすい素敵なものに仕上げてくださり、本当にありがとうございました。また、プログラム進行も、最後のディスカッションで学生の伝えたい気持ちが溢れ少し時間が押してしまったこと以外は、とてもスムーズだったと思います。高校生のポスター発表では、大学生のみならず高校生からも質問が飛び、活発な質疑応答が行われていました。もう少しポスターセッションの会場が広ければ、参加者が移動しやすく、近くの発表と声が混ざることもなくより良かったのではないかという気がしました。時間の都合上３グループの発表しか聞けませんでしたが、全て聞きたいと思うほど素晴らしい発表でした。聞けなかったグループに関しても、抄録にあるポスターや、ポストイットのコメントを見て、様子を伺い知ることができたのが良かったです。 午後の大学生の発表に関しては、どの団体もそれぞれ準備してきた内容を時間内に報告ことができていてスムーズだった思います。ポインターを用意していただいていたにも関わらず、上手く活用することができませんでしたが、誘導などとても分かりやすかったです。団体ごとに質問を紙に書くシステムは、あまりこういった機会のない私たちにとってとても貴重でした。言葉の足りなかった部分や、特に注目してくださった点などがとてもよく分かり、激励のお言葉などが嬉しかったです。一部だけですが、参加者の皆さんの前でお答えできて良かったです。その後の片付けなども先生方が的確な指示を出してくださり、すみやかに動きを理解することができました。
• 高校生や他の大学生が様々なことをしていることを知り、またボランティアを通した自分の成長に気づき、ボランティアへの思いを新たにしたシンポジウムでした。大変恐縮ですが、高校生のポスター発表の会場が狭かった点、大学生の発表後のディスカッションの時間が短かった点を改善していいただければ幸いです。とても良い経験ができました。ありがとうございました。
• 全てが勉強になることばかりで、これからもボランティアを続けようと改めて思えた。また、他の団体や高校生の発表を聞くことで、これからのボランティアの在り方をもっと考えようと思った。

5. シンポジウムを終えて、このシンポジウムは今後のご自身や団体の活動にとってどのような影響があると思われますか。お感じになれたことを教えてください。ンポジウム全体についての感想をお書きください。
• 当団体の活動は震災との結びつきは弱いが全くの無関係ではない。被災者のみにターゲットを絞るだけでは、完全な復興は難しいように思える。今後、活動を拡大していくにあたり、当団体の「震災復興における役割」を多くの人に認知してもらえればよいと思う。
• それぞれの団体がどのように感じながら活動をしているのか知ることができました。どの団体も悩みや不安を抱えていながら活動を続けていることに、悩んでいるのは自分たちだけではないことを感じ、安心しました。もっとほかの団体と話し情報共有していきたいと思うようになりました。私自身、もっと頑張ってみたいと刺激を受けました。
• このシンポジウムは当団体の活動を新たな視点から見つめ直す必要があったため、そこでの新たな発見があった。また自分たちよりも若い世代の子たちが頑張っている姿を見て、自分もまだやれる、もっといい活動ができる、と刺激を受けた。
• 自分の団体のことをより広く知ってもらうきっかけになったかと思います。
• 対外的に活動を紹介することで、自分たちの活動を見つめ直すきっかけになるというのを改めて感じた。自分にとってとてもよかったと思う。また大学としてオフィシャルな場を頂けたことで、メディアの方に注目していただくこともでき、我々の活動を周知させることにもつながったと思う。最も大きかったのは、発表に対するレスポンスで団体内になかった意見をもらえたり、評価していただけたことが自信につながるとも思った。先生にフォローしてもらいながらではあるが、みんなで悩みながらつくっている活動なので、外部の人に評価していただけるというのはありがたかった。
• 個人としては、他の団体の発表を聞き、自分になかった視点を得ることができたので、現在関わっている子どもたちに対して別の角度から見ることができるようになると思います。以前ならば特に気にしていなかったであろう子どもの様子の変化などにも、敏感に対応することができるのではないかと考えています。 また、団体として、子ども支援の活動を振り返り、現在の活動を見直し、そして高校生や他団体の多様な報告からヒントを得たことにより、今後、私たちが行うことのできる子ども支援の道筋がより明らかになったのではないかと思います。このような発表の機会をいただいたことにより、これまで確かに意味のある活動を行うことができていたこと、しかし被災地の子どもたちを取り巻く状況にはいまだ課題が数多く残されていること、そして大学生ボランティアの私たちだからこそできることがあることを再確認することができました。今回のシンポジウムで学んだことは必ずや今後の活動で生きてくると思います。本当にありがとうございました。
• はっきりと具体的には、まだ分かりませんが今後に確実に活きてくる経験だったと思います。例えば、今後高校生のみなさんと一緒にボランティア活動をしたり、もっと子ども向けの活動を推進していったりということが考えられます。
• 他の団体の意見や考えを取り入れて、各地でより良いボランティアができるようになると思う。

シンポジウム参加者アンケート結果

震災子ども支援室シンポジウム　アンケート集計結果

有効回答数 63 名

質問１　この度の研修会を知ったきっかけを教えてください

①支援室からの案内（チラシ）	22	34.9%
②ホームページを見て	2	3.2%
③フェイスブックを見て	0	0.0%
④知り合いからの情報	11	17.5%
⑤その他	28	44.4%

質問２　あなたの性別を教えてください

男性　26 人　41.9%　　女性　36 人　58%

質問３　あなたの年齢を教えてください

10 代：29 人　20 代：13 人　30 代：9 人　40 代：4 人　50 代：6 人
60 代：1 人　70 代：1 人

質問４　あなたのご所属（勤務先）を教えてください

①学生	39 人
②一般住民	2 人
③行政機関	3 人
④医療機関	0 人
⑤各種相談機関	1 人
⑥教育機関	13 人
⑦その他	3 人

質問５　本日のシンポジウムはいかがでしたか

①とても参考になった　49 人　②まあまあ参考になった　12 人　③あまり参考にならなかった　0 人

質問６　シンポジウムの所要時間はいかがでしたか

①長い　1 人　②やや長い　15 人　③ちょうどよい　41 人　④やや短い　5 人　⑤短い　0 人

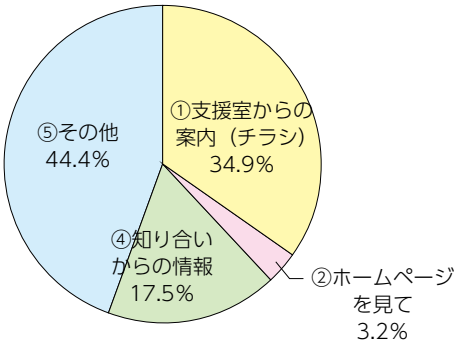
質問７　シンポジウムの内容はいかがでしたか

①難しい　0 人　②やや難しい　7 人　③ちょうど良い　51 人
④やや簡単　4 人　⑤簡単　0 人

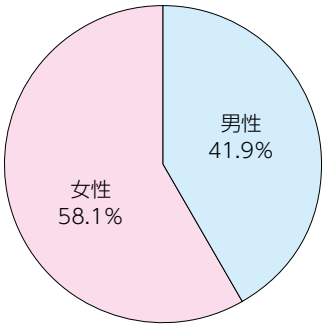
質問８　今回のシンポジウムを受けて、今後の活動に活かせそうですか

①活かせそう　43 人　②少し活かせそう　16 人
③あまり活かせそうにない　3 人　④活かせない　0 人

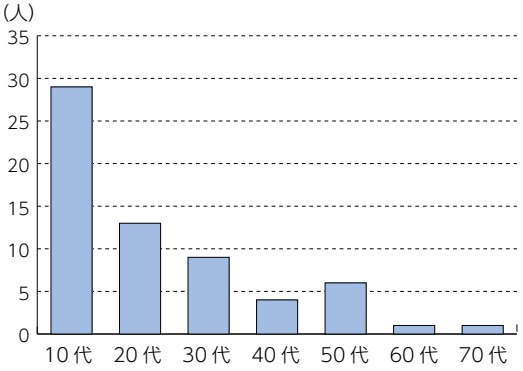
【質問１】このたびのシンポジウムを
お知りになったきっかけを教えてください



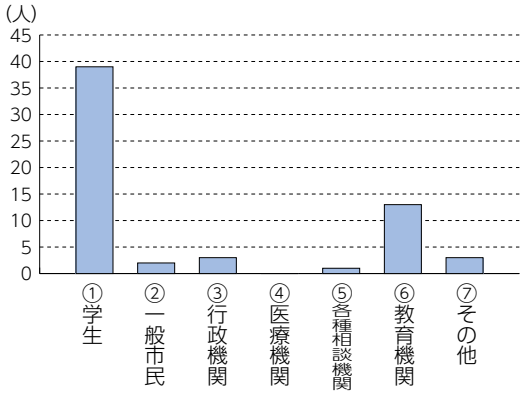
【質問２】あなたの性別を教えてください



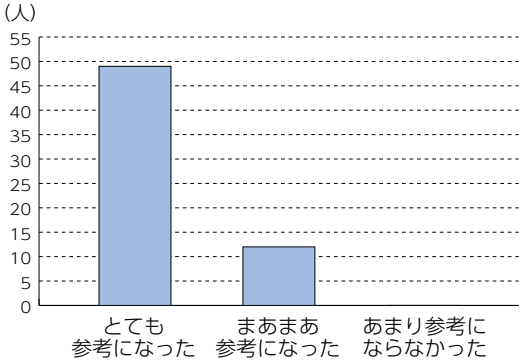
【質問３】あなたの年齢を教えてください



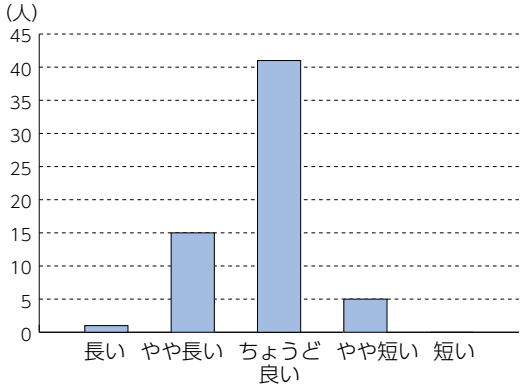
【質問４】あなたのご所属（勤務）先を教えてください



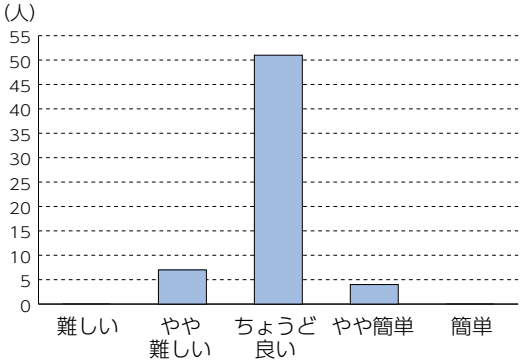
【質問５】本日のシンポジウムはいかがでしたか



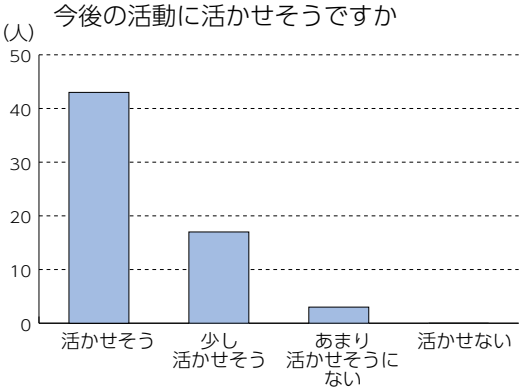
【質問６】シンポジウムの所要時間はいかがでしたか



【質問７】シンポジウムの内容はいかがでしたか



【質問８】今回のシンポジウムを受けて、
今後の活動に活かせそうですか



質問 10　今回のシンポジウムで印象に残ったこと、学んだことはなんですか	
1	高校生・大学生が被災地のために様々な活動をしていることに感動しました
2	震災によって将来の選択肢を失ってしまった子どもたちが多くいるということ
3	たくさんの高校生が自ら動いて凄いと思った。色んなやり方があるなと思った。自分の活動に行き詰まりを感じていたので参考にします！！
4	ニーズをくみとり大学での学びを生かしてよりそい、仲介の活動をどの団体も行っていて、今日来ている高校生のよい参考（もちろん我々にとってもよい勉強）になったと思う。
5	学生たちがとてもしっかりとしていることが印象的。たのもしい。
6	様々な学校が防災に関する取り組みを行っていること。
7	具体的に何をしているのか、何をすべきかを把握し、しっかり考えを持つこと、自分たちの課題、解決策を見つけ、実行することの大切さ。
8	他の高校生のポスターセッション、大学生の発表
9	他の学校の発表で人を引き付けるような発表。
10	若い世代が主体というのは本当に貴重、今後も続けて欲しい。
11	高校生のポスターセッション
12	高校生と大学生が集うことには大きな意味があるとは思いますが…大学生の頑張りは評価するものの。
13	中学生や小学生に震災の事に興味・理解をしてもらうのに、近い年の人が説明すると理解が得やすいという事が印象に残りました。
14	震災を体験した子ども、元子ども達が様々なアプローチ方法で復興に向けて行動していること。また、その行動をサポートする人も多数いるということ。
15	大学生が積極的に支援活動を行っていることが分かり、とても心強く、うれしく思いました。
16	学生ボランティアが地域で果たす役割は大きい。様々なステークホルダーが連携することで効果の拡大、支援事業の加速が果たせるし、子どもの支援でもそれは重要。
17	福興 youth の報告が印象に残りました。だた全体的に中学生・高校生・大学生の視点を知れて良かったです。
18	大学生の考えのレベル
19	活動が終わったら新しい課題を見つけること
20	震災に対するボランティア団体がたくさんあることがわかり、復興にはたくさんの人が携わっていると思った。
21	高校生と大学生で震災に対する向き合い方はさまざまで自分たちがやっている防災研究以外にも食物の研究などさまざまなことを学べてよい体験になりました。足湯をどこでもやっていたのが印象に残っています。
22	同じ高校生がいろいろな活動をしているのだと思いました。つなぎ役…なるほど。
23	どの団体も地域との交流を大事にし、多くのことを行っていて良いと思った。
24	大学生のみなさんがこんなにも震災について考えてくれていることにもとても驚きを感じた。

25	高校生のポスターとても良かったです。3 つ同時進行だったので話がきけないところがあったのが残念でした。
26	学生さんたちが活動の中でとらえた事柄は非常に的確であると感じた。若い感性での視点をもっと社会に発信してもらいたい。
27	よく耳にする、ハード（インフラ等）の復興は目に見えわかりやすいけど、心の復興はみえにくく、遅れる…ということが実感として感じられました。色んな問題が複雑化しているのではないかと思いました。
28	復興支援として今もたくさんの大学生の方がサポートしてくれていること改めて知ることが出来ました。
29	たくさんの人からのアドバイスをいただきました。実際に行ったことのある人からお話を聞いたり興味を持っていただけてすごくためになりました。（ポスター発表）
30	東北大学の学生の取り組みを知ることができ、地元の復興にも活かせそうだと思った。
31	地域住民が日頃から関わりを持つことが防災・復興には重要。
32	HARU の方々の活動を参考にしたい。特にその時々のニーズに的確に対応していて、自分の活動に活かしたいと思った。
33	どの団体もしっかり定期的に活動していることがとても良いなと思いました。特に HARU さんはニーズの変化までとらえていて、こうゆう地域の変化を住民の方々と共に見つめることこそ、継続したボランティア活動には必要なのだと思いました。
34	子どもたちの居場所を作ることが大切だということ。
35	被災地の子どもや施設について、真剣に考え、改善しようとしてくれている大学生の方々がいると知って嬉しく思いました。
36	まだまだ支援が必要であり、大学生のみなさんはすごく積極的にボランティアを行っている姿に感銘を受けました。
37	高校生・大学生の様々な活動は非常に参考になりました。
38	高校生・大学生が中心となり、今後の支援者として協力しあい、活動していく重要性を感じました。
39	大学生の発表のなかで福興 youth の活動が特に印象に残っています。人間関係の問題があることに気づかされ、驚きました。
40	町の復興は心の復興にはならなくて、お金では解決しないこと。
41	何かをしたいと思ったら行動に起こすことが大切だと学びました。
42	若い人がこんなに頑張っているのかと思い、人任せにしていないんだなと実感した。
43	震災関連の色んなが学生団体が出ていて興味深かった。
44	プレゼンテーションに参加できませんでしたが、資料を見てキッズドアを初めて知りました。業務の中でこの情報を伝えられたら役に立つ家庭が結構あると思いました。
45	学生たち（中高生）の発表がすばらしかった。
46	高校生・大学生が自ら悩みながら様々な活動をしていることが具体的に分かりました。それを受け、高校や大学がコミィニティとしてどのような支援ができるのか、考えさせられました。

47	一言で言えば「高校生、やるな！」です。若者の意義深い活動を知ることができて刺激になりました。それにひきかえ自分のことを振り返ると情けなくなります。
48	被災者・地　支援に何らかの形で関わる高校生・大学生の頑張りを感じることができました。
49	自分と同じ年の高校生たちが積極的に地域のために活動を行っているという姿がとても印象に残りました。また、参考にしたい点が発表の中にたくさんありました。
50	高校生によるポスター発表は被災地に住む人だからこその内容もあり、印象的でした。
51	高校生・大学生の発表がとても力強く素晴らしかったです。
52	支援のニーズが変化する中で柔軟に対応している学生団体の熱意。
53	高校生も素晴らしい活動をしている
54	高校生の発表がハイレベルでした
55	他学校の学校で行っている取り組み
56	高校生の意見を聞くことが出来たこと。大学生の発表とは少し違う視点での考え方を学ぶことができた
57	高校生の活動も活発で、市の協力を得られたり、大学生は大学生で中高生や地域の方と協力したりと、ボランティアをするネットワークがすごいなと思いました。
58	福興 youth さんやぽかぽかさんの子どもの言動が印象的。ちょっとした言葉も拾い上げて考える姿勢を学んだ。今後の活動で子どもの様子も注目してみたい！
59	どこの被災地でも子どもの問題あり。子どもの心は繊細なのだと改めて学んだ。

質問 11　今回の研修を今後どんな形で活かしていきたいと思われますか。	
1	子ども達の行動を表面的にとらえるのでなはく、背景まで少しずつ理解していこうと思った。
2	様々な高校生、大学生の団体とうまく協力しながら新たな活動を深めていきたい。
3	人と接する場面(いろいろな人と)で活かしていきたい。特に心に痛みを抱えている人に対して。
4	他の学校の発表でよかったところを自分たちの発表に取り入れていく。
5	防災カード、しおりなどといったものを作り、配っている方もいられたように、自分も実際に何かの形で役立つようなものをつくることができればいいなと思いました。
6	学校の総合の時間のなかで、探究活動をする機会あります。今回、発表する上での工夫を学べたので、それを自分たちの発表に活かしていきたいです。
7	SGH の探究活動を通して。
8	教育活動のなかでとりあげたい。
9	探究活動。
10	今回学んだことを職場の中に伝えて、活動に活かしたいと思います。
11	こういった活動について自分の周りの人に知ってもらえるよう伝えていきたい。
12	勉強になりました。
13	職場、関係者に共有、ならびにサポートできることがあれば協力。
14	ボランティア
15	自分もボランティアに参加し、地域の復興をすすめていきたいと思う。
16	研究のテーマの参考にしたり、何か新たな事をするきっかけとして活動に活かしていきたいと思います。
17	アンケートの取り方や、大学生との交流などまた、私の授業の中で取り入れたいと考えました。
18	自分達も地域との交流をさらに深めていきたい。
19	今後も様々な機会、方法で復興について取り組んでいきたい。
20	職場や周りの人たちとも共有したいと思います。陸前高田に足を運びたいと思いました。(復興状況実際を肌に感じ、周囲に伝えていきたい)
21	生徒たちは授業の課題研究に活かしてくれると思います。変化を感じるのが楽しみです。
22	今後の研究をすすめるあしがかりになりました。地域のコミュニティーのうつりかわりについて知れたので、自分の地域と比べてみたいです。
23	ポスター発表の時にポストイットにか書かれていたアドバイスを大切にして、課題として活かしたいと思った。
24	就職後、その職場における取組において。
25	大学生活の中でのボランティア活動において、“大学生”という立場のあり方や役割を考えて活動することなどに活かしたい。
26	これからのボランティア活動に参加または企画する際には、今回学んだことを、共に活動する人々にも広めていって、自分の活動に活かしていいきたいと思いました。

27	自分もボランティアに参加する。
28	他校のポスターセッションの内容を自身の高校にも反映させていきたいと思います。
29	将来の夢が発展途上国の支援です。なので、形は違くとも、様々な形で、貧しい子どもたちなどに行き届く支援ができたらと思います。
30	実践内容を情報として蓄積し、防災意識や被災地支援に活かしたいです。
31	高校生としてこのような場で自分たちの意見を発表することはもちろん、今回の学びをもとに、学校の防災活動の充実化を図りたいです。
32	学校の友だちや後輩、家族などに伝えていきたい。
33	今日学んだことを友達に伝えたり、ボランティアに参加する。
34	もっとボランティアや災害について知っていきたいと思います。色々な人と関わりたいと思いました。
35	地域の復興に活かせるようみんなに伝える機会を作りたいと思った。ポスターを発表して、終わりではなく今後も自分たちの未来をよりよくするために色々なことを考え、実践したいと思った。
36	まだまだたくさん熱い学生がいるので、もっと広く社会に認知されればよいと思う。
37	直接自分の研究テーマには関わらないので、背景知識としての学びにつなげたいです。
38	他の学校の方々の発表の研究動機→活動→まとめ、までの流れにしっかりと一貫性がある部分を見習い、筋の通った探究活動を行っていきたいと思いました。
39	被災地の方々や子どもたちと関わる際に今回学んだことを活かせればと思います。
40	改めて震災を自分の問題として捉えていきたいと思います。
41	活動について共通の悩みや問いがあったので、その解決策、対策について参考にしたい。
42	今後の被災地での活動に他団体の話を参考にしたいです。
43	学校での JRC での取り組み、地域活動に参加する時などの参考。
44	他団体のように住民の方の何気な会話の内容を記録しておき、今後の活動に活かせようにしたい。
45	今後自分たちの団体でもぜひ高校生のみなさんと協力してできたらいいなと思います。
46	明確に目標を持って活動していきたい。
47	被災地の子どもの問題もふまえて子ども関連の企画に参加する。

質問 12　その他、ご意見・ご感想・ご要望ありましたらお願いいたします	
1	高校生のポスターセッションのとき、同時に複数の高校が発表するので少し聞ききとりにくかった。
2	大学生と高校生の懇親会（サンドイッチたべながらの立食パーティーのような）がシンポジウム後にあると嬉しいです。より繋がりが出来ると思います。
3	ポスターセッションでポストイットに記入する時間があったのはとても良かった。発表を聞くことに集中できた。最後の回答は十分にやらせてあげたかった。
4	この機会に東北大学と高校との連携を強められたらよいのではないか。
5	コンセプトがすごくよかった。ぜひこれからも続けてください。震災を知らない世代が中高生になった時にも必要だと思います。
6	ボランティアしてあげている、そしてこの活動が自己満足になってはいないか…？大学生だからこそそれぞれの学部の専門性を生かしてこれからの未来づくりに出来ることがあるのではないでしょうか。
7	ポスターセッションで、すべての発表が見れるようにして欲しいです。
8	今後も様々な活動をしている中～大学生の生の声をきく機会があれば参加したいです。貴重な場をありがとうございました。
9	午前中のポスターセッションの会場づくりに工夫が必要と思いました。狭く、他の発表者の声が大きくて、肝心の発表者の声が聞き取りにくいなどがありました。
10	ディスカッションはやむを得ないがもっと時間がほしかった。
11	豊かな人間性を持つ子どもが育つような活動にしてほしいです。ボランティアのかかわり方がひとりの人間の人生に大きく影響することになります。もっと考えてほしいです。
12	とてもためになることが多くて参考になった。
13	大学生は高校生に比べ本格的な研究をしており、レベルの高さの違いを痛感しました。今回のシンポジウムを今後の活動に活かすよう頑張ります。
14	大学生の活動や他の高校生の話を聞くことができまして、生徒は多くの事を学ぶことが出来ました、ありがとうございます。
15	今後も活動を頑張ってほしい。
16	大学としてバックアップする体制が整えられたことを喜んでいます。学生さんひとりひとりがこの活動を後輩に伝え、仲間を広げていってほしいと思います。
17	パワポは文字を大きくしてほしい。“社会還元”“社会貢献”というメッセージを感じる印象に強く残るシンポジウムありがとうございました。
18	もう少し多くの方々に参加して頂けるような工夫を期待しています。
19	もう少し大学生の方と話す時間がもう少し長くほしかったです。
20	今回自分の研究を多くの人々や大学生に聞いてもらえる良い機会を与えていただいて、本当によかったです。これらのアドバイスや経験を次の研究に活かしたいと思いました。
21	高校生の発表を、場所的・時間的に余裕のある環境でさせてあげてほしかった。
22	参加で来てよかった。こういう機会をもっといろんな方に知ってほしい。

23	このような大学生のシンポジウムに参加するのは初めてだったのですが、自分と少ししか年の違わない大学生の発表に刺激を受けました。参加して良かったなと思いました。また参加したいです。また、こういう機会をもっと広めていけたら良いかなと思いました。
24	発表とディスカッションが別の時間だと混乱するので、発表が終わったら質疑応答という形にしてくれるといいかなと思いました。
25	これからもこのような活動を続けていってほしいと思います。震災のことを広く知ってもらうことも支援の一つだと考えます。これからも頑張ってほしいです。今回はありがとうございました。
26	大変貴重な学びの場を与えて頂き、本当にありがとうございました。今後の活力となる一日でした。
27	充実した時間になり来てよかったと思いました。ありがとうございました。
28	少しレベルが高かった。
29	色々なボランティアの考え、やり方があるんだなととても勉強になりました。
30	メモらんとかメモ用紙がほしいと思った。
31	福興 youth の把握したこと、それについて考えていること、とてもすばらしいと思いました。事実を知りました。
32	高校生のポスターセッションは新しい試みだと思いますが、耳があまりよくない者には声がまざって辛いものでした。
33	ポスター会場が少し狭かったかなと思いました。また、ポスター発表のとき、サポートに入っている（？）大学生のファシリテートがもう少しあっても良かったのではと思いました。高校生・大学生の発表が聴けたのはなかなか新鮮でした。
34	高校生のポスターセッションの際、間ができてしまったので、発表から質問までの流れを明確にしてほしいです。発表形式が発表当日まで知らされていなかったので、あらかじめ伝えておいてもらえるとうれしいです。
35	若い人達のエネルギーに触れ、こちらも元気をもらいました。
36	ありがとうございました。同一高校で複数発表したので、時間帯が重ならないようにしていただけると、よかったです。
37	高校生のポスターセッションをもっと聞きたかった。
38	発表を 15 分にまとめるのが難しかったです。
39	貴重な大変をさせて頂きありがとうございました。
40	高校生と大学生が直接ディスカッションするような機会もあればよいなと思った。
41	発表は緊張しましたが、よくできました。というよりも、みなさんにとても真剣に聞いていただいてありがたかったです。

シンポジウムを終えて

本報告書は、平成29年度震災子ども支援室のシンポジウムの記録です。ご参加いただけなかった皆さまにも、本報告書をもってシンポジウムの様子をお伝えできたでしょうか。最後までご覧いただきありがとうございました。

従来のシンポジウムは、東日本大震災後の子ども支援をテーマとして、様々な現場で支援を続けていらっしゃる方々のお話をうかがう形で続けて参りました。これに対して、今年度のシンポジウムは、大学生によるボランティア活動と高校生による震災や防災に関する活動を発表していただくという、これまでにない取り組みとなりました。企画の趣旨は本報告書冒頭のご挨拶の部分に記したとおりですが、初めての取り組みだったことで、至らない点が多々ございましたことをお詫びいたします。

発表では、活動内容だけではなく、活動から得られたことも、直面する困難や課題も、率直に教えていただきました。ただ、当日のプログラムは、大変、盛沢山のメニューでしたので、「もっと高校生の声を聞きたかった」、「もっと互いに交流したかった」という声をたくさん頂戴しました。支援室スタッフも全く同感です。当初はこの取り組み自体が実現可能なのかを案じてのスタートでしたので、皆さまから「もっと！」と声をかけていただいたことは、この上ない励みとなりました。

この報告書には、高校生のポスター発表への感想、大学生が登壇して感じた感想、そして、一般の方々を含む当日参加者の方々からのご感想を中心に、当日、時間の制約で生の声で交わせなかった感想がたくさん記されています。あらためて、当日の会場の活気が蘇るとともに、被災地に心を寄せ、力を注ぐことの意味が、この誌上から伝わってきます。それぞれの発表は、現地に身を置き、人と向き合い、実践を重ねることから得られる“経験の知”でした。それらを聞き、刺激を受け、考え、次の自分の行動に活かそうとする時、私たちはまたひとつ、大きくなれます。

実施にあたっては、多くの方々のご協力を頂きました。岩手県、宮城県、福島県の教育委員会、参加を申し出て下さった学校関係者の方々、高校生の皆さん、そして東北大学課外・ボランティア活動支援センターと大学ボランティア団体の皆さんにも、この場をお借りして心より感謝いたします。

若い皆さんから学んだ“経験の知”と、頂いたエネルギーを私たちの力に変えて、震災子ども支援室は8年目に歩み出そうと思います。

平成30年3月

東北大学大学院教育学研究科　震災子ども支援室
室長　加藤　道代

編集者
加藤　道代　　東北大学大学院教育学研究科教授
　　震災子ども支援室室長
一條　玲香　　震災子ども支援室特任助教
平井　美弥　　震災子ども支援室主任相談員
押野　晶子　　震災子ども支援室相談員
大堀　和子　　震災子ども支援室相談員

写真撮影（東北大学写真部）
鴨志田俊太　　東北大学工学部３年
堀　　祐輔　　東北大学経済学部１年

震災子ども支援室“Ｓ - チル”シンポジウム報告書

“東日本大震災後の子ども支援”

～高校生・大学生が見つめる被災地の現在（いま）～

2018 年 5 月 1 日

発 行 者　東北大学大学院教育学研究科　震災子ども支援室
代 表 者　加藤　道代
住　　所　仙台市青葉区川内 27-1
Tel/Fax　022-795-3263
E - m a i l　s.children@sed.tohoku.ac.jp

シンポジウム報告書

東日本大震災後の子どもたちへの支援

～高校生・大学生が見つめる被災地の現在（いま）～

東北大学大学院教育学研究科

震災子ども支援室 “S–チル”

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1

TEL&FAX ： 022-795-3263

E-MAIL ： s.children@sed.tohoku.ac.jp

この冊子は環境に配慮した「水なし印刷」により印刷しております。

環境にやさしい植物油インキ「VEGETABLE OIL INK」で印刷しております。